太宰府市の文化財 第22集

高雄地区遺跡群

高雄地区所在の埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 4

太宰府市教育委員会

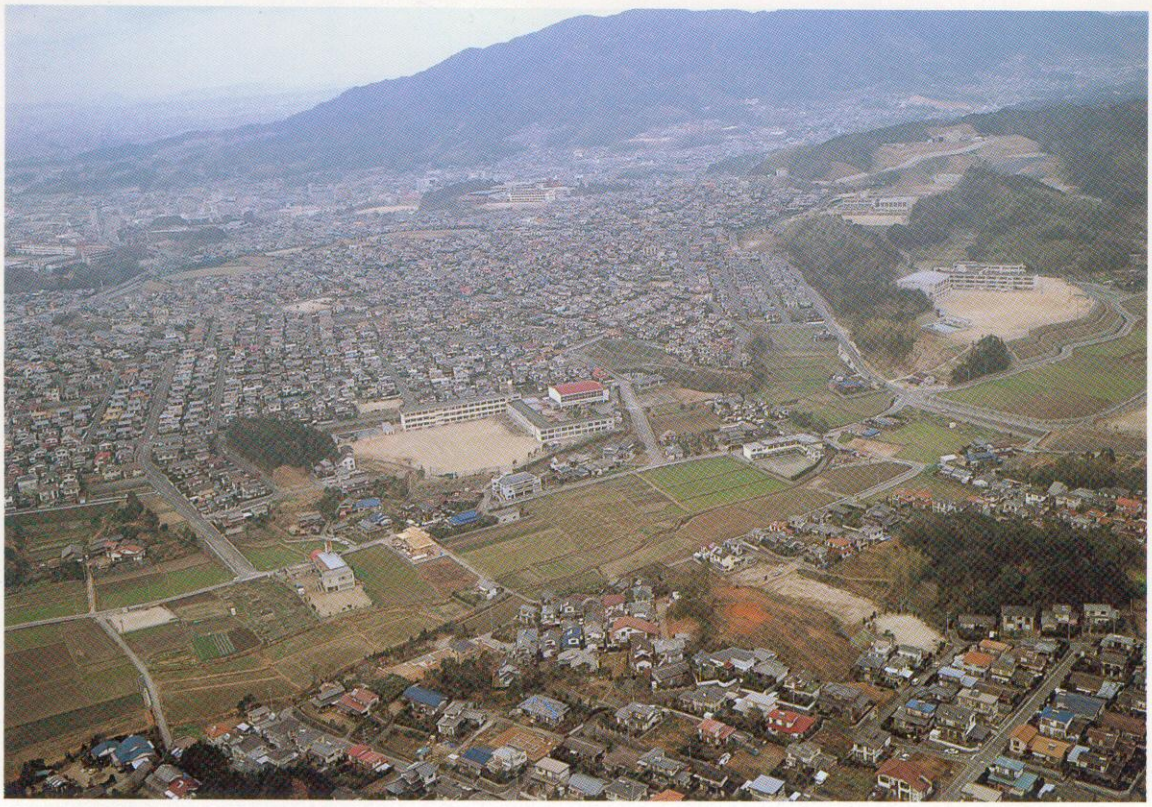
太宰府市の文化財 第22集

高雄（たかお）地区遺跡群

高雄地区所在の埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 4

太宰府市教育委員会



高雄地区上空から四王寺山を望む



下高尾古墳 主体部（東から）



石穴遺跡SX015から大宰府政庁跡を望む



石穴遺跡SX015（東から）

序

本書は、太宰府市が昭和57年度から平成３年度までに実施した高雄地区周辺での埋蔵文化財の発掘調査報告書であります。高雄地区は太宰府市の南に位置し、弥生時代の甕棺墓をはじめとして、中世における高雄山城跡など当時の絵図面が残る遺跡も所在しており、大宰府の周辺部にありながら貴重な文化遺産を埋蔵する地域にあたり、太宰府の遺跡分布の広さを物語るものです。

近年におきます市域全体にわたる開発の増加にあいまって、高雄地区におきましても開発の波が押し寄せ、埋蔵文化財の発掘調査が行なわれるようになり、大宰府縁辺部の歴史解明が徐々に明らかになってきております。

ささやかな一書ではありますが、本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助になれば幸いです。

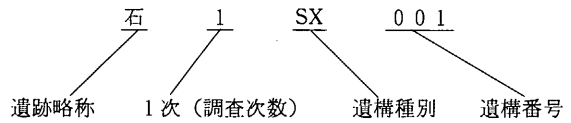
最後になりましたが、文化財に対して御理解いただきました皆様方をはじめ、山の急斜面という悪条件下での作業等、技師と共に連日現場作業に従事されました皆様方、また細かい整理作業に従事されました皆様方に心から御礼申し上げます。

太宰府市教育委員会

教育長　長野治己

例　　言

1. 本書は、太宰府市高雄周辺に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した調査は、昭和57年度から平成３年度までに高雄地区にて調査を行なった６遺跡である。
3. 調査次数は、吉ヶ浦遺跡のみが福岡県教育委員会が実施した調査に続けて番号化することにし、他の遺跡に関しては太宰府市教育委員会が実施した調査次数に続ける形で番号化した。
4. 調査および整理は昭和57年３月16日から平成５年12月１日までの間で随時実施した。
5. 開発対象面積および調査面積は、各遺跡の調査概要に記載した。
6. 調査関係者は、第Ⅰ章に記し、調査経過は各遺跡概要において記した。
7. 遺構の実測および写真撮影は各調査担当者が行なったほか、全体図の図化は一部、アジア航測株式会社福岡支店に委託し、遺構の空中写真撮影は㈲空中写真　稲富および㈲空中写真企画が行なった。
8. 遺構の実測は、原則として国土調査法第Ⅱ座標系を利用しており、座標記載のものについては遺構実測図の方位は全てG. N（座標北）であるが、座標記載の無いものはM. N（磁北）である。
9. 本書に掲載する遺構番号は、以下のように示す。



10. 遺物の実測および浄書は、狭川真一、中島恒次郎、山村信榮、田中克子、森田レイ子、井上信正、河田聡、古賀里恵子が行ない、遺物写真撮影はフォトハウスおか（代表　岡紀久夫）が行なった。
11. 出土した金属製品の応急処理は、狭川麻子、山中幸子が担当した。
12. 本書の執筆は、各区切りの文末に（　）で示した。
13. 自然科学分野の所見に関して、吉ヶ浦遺跡出土人骨については永井昌文先生（九州大学医学部名誉教授）より玉稿をいただき、また石穴遺跡抽出試料残存脂肪分析については中野益男先生（帯広畜産大学生物資源化学教室）の御指導のもと、㈱ズコーシャ総合科学研究所に委託した。御指導いただきました諸先生方には、深く謝意を表します。
14. 本書の編集は、中島恒次郎が担当した。

目　　次

Ⅰ．調　査　組　織 …… 1
Ⅱ．遺跡群をとりまく諸環境 …… 5
Ⅲ．調　査　の　概　要 …… 7
1．吉ヶ浦遺跡　第２次調査 …… 7
1）調査に至る経過 …… 7
2）遺　構　各　説 …… 7
3）遺　物　各　説 …… 11
4）小　　結 …… 11
2．渡内遺跡　第１次調査 …… 12
1）調査に至る経過 …… 12
2）調　査　の　概　要 …… 12
3）小　　結 …… 16
3．下高雄遺跡　第１次調査 …… 17
1）調査に至る経過 …… 17
2）遺　構　各　説 …… 17
3）遺　物　各　説 …… 21
4）小　　結 …… 23
4．五条遺跡　第１次調査 …… 24
1）調査に至る経過 …… 24
2）遺　構　各　説 …… 24
3）遺　物　各　説 …… 28
4）小　　結 …… 28
5．石穴遺跡　第１次調査 …… 29
1）調査に至る経過 …… 29
2）遺　構　各　説 …… 30
3）遺　物　各　説 …… 45
4）小　　結 …… 48
6．今王遺跡　第２次調査 …… 50
1）調査に至る経過 …… 50
2）遺　構　各　説 …… 51
3）遺　物　各　説 …… 54
4）小　　結 …… 55
Ⅳ．お　わ　り　に …… 56
付　　編 …… 57
1．吉ヶ浦遺跡出土の人骨鑑定 …… 57
2．石穴遺跡における残存脂肪分析 …… 59
3．高　雄　山　城　跡 …… 64
4．方形壇状遺構の性格について …… 67

Ⅰ．調　査　組　織

各遺跡に関しての調査経過は、個別に各遺跡報告中に掲載した。本報告書掲載の調査報告遺跡は６遺跡にわたり、昭和57年度より吉ヶ浦遺跡第２次調査を行なってから調査報告書作成まで11年の年月が経過している。したがって、各遺跡の調査組織も多年度にわたることから多岐におよぶが、以下に各遺跡調査年次ごとに記し、さらに整理組織を示した。

吉ケ浦遺跡（昭和57年度調査）

調査組織

総括	教育長	陶山直次郎
庶務	社会教育課長	西山義則
	文化財係長	黒板力
	主事	岡部大治
調査	技師	山本信夫（調査担当）

渡内遺跡（昭和58年度調査）

調査組織

総括	教育長	陶山直次郎
庶務	社会教育課長	西山義則
	文化財係長	黒板力
	主事	岡部大治
調査	技師	山本信夫
		狭川真一（調査担当）

下高雄遺跡（昭和62年度調査）

調査組織

総括	教育長	藤寿人
庶務	社会教育課長	花田勝彦
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主事	岡部大治
		白水伸司
調査	技師	山本信夫
		狭川真一（調査担当）
		緒方俊輔
	技師（嘱託）	山村信榮

五条遺跡（昭和63年度調査）

調査組織

総括	教育長	藤	寿人
庶務	社会教育課長	花田	勝彦
	文化財係長	鬼木	冨士夫
	主事	岡部	大治
		白水	伸司
調査	技師	山本	信夫（調査担当）
		狭川	真一
		緒方	俊輔
	技師（嘱託）	山村	信榮

石穴遺跡（平成元年度調査）

調査組織

総括	教育長	長野	治己
庶務	教育部長	西山	義則
	社会教育課長	関岡	勉
	文化財係長	鬼木	冨士夫
	主事	岡部	大治
		白水	伸司
調査	技師	山本	信夫
		狭川	真一
		城戸	康利（試掘担当）
		緒方	俊輔
		山村	信榮
	技師（嘱託）	中島	恒次郎（調査担当）
	調査員（嘱託）	狭川	麻子

今王遺跡（平成３年度調査）

調査組織

総括	教育長	長野	治己
	教育部長	西山	義則
	文化課長	佐藤	恭宏
	埋蔵文化財係長	富田	譲
	文化振興係長	大田	重信

	主任主事	岡部大治	
	主事	川谷豊	
調査	主任技師	山本信夫	
		狭川真一	（調査担当）
		城戸康利	
		緒方俊輔	
	技師	山村信榮	
		中島恒次郎	
		塩地潤一	
	技師（嘱託）	田中克子	

整理組織（平成4年度）

整理組織

総括	教育長	長野治己	
庶務	教育部長	中川シゲ子	
	文化課長	佐藤恭宏	
	埋蔵文化財係長	高田克二	
	文化振興係長	大田重信	
	主任主事	岡部大治	
		川谷豊	
調査	主任技師	山本信夫	
		狭川真一	
		城戸康利	
		緒方俊輔	
		山村信榮	
	技師	中島恒次郎	
		塩地潤一	
	技師（嘱託）	田中克子	

整理組織（平成5年度）

整理組織

総括	教育長	長野治己	
庶務	教育部長	中川シゲ子	
	文化課長	花田勝彦	
	埋蔵文化財係長	高田克二	

	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷豊
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
	技師	塩地潤一
	技師（嘱託）	田中克子
		重松麻里子
		井上信正

調査参加者は次のとおり。（順不同、敬称略）

（発掘調査参加者）

竹林　義文	八柳健之助	渡辺ひとみ	山下　澤子	花園美千子	楠林　静香
吉田　正子	田中　平助	田部　澄博	早田ミツル	中嶋　幸子	米原　峰子
宮田　恵子	岸　邦子	田口美智子	高原改良子	大迫フミ子	江島スミエ
近藤　秋枝	太田ヤス子	大田　敬子	古川　民子	古川ヨシ子	宮原ハナエ
宮原　圭子	高鍋キミヨ	山本　洋子	柴田ツキエ	大田八重子	中溝　洋子
境　美佐子	高木　宗代	萩尾須磨子	萩尾カネ子	田中テル子	萩尾　昇
萩尾　泰祐	柴田　義雄	鬼木　寅雄	今崎　良男	梶山サツキ	納富　明美
斉藤　徳美	梅田　富雄	森田　政義	松本　正美	菊武　徳美	平嶋　正市
八尋ヒサ子	樋口　キミ	永川　満香	中原千恵子	岡藤　文子	鬼木　知子
岡部　幸子	内田　文子	藤丸くみ子	和田　京子	主税まつ子	妹尾ひとみ
木村　末子	松浪由美子	木村　静子	安武　稔	福島　保子	田中　幸子
陶山　小春	山内アサノ	和田ハマ子	陶山よしゑ	瀬口　真司	藤城　泰

（整理作業参加者）

森田レイ子	山中　幸子	横山美津子	原野　正子	吉田　勝子	久保喜代香
中村　房子	野田　美子	林　美知子	武堂　年子	小西　晴代	古賀里恵子
酒井三保子	安芸　朋江	河田　聡	田崎(中島)笙子		

Ⅱ．遺跡群をとりまく諸環境

高雄地区は、太宰府市の南東部に位置しており、宝満山より南西にのびた低丘陵と丘陵を浸食した小河川によって形成された谷部によって成り立っている。昭和40年代より福岡市のベッドタウン化に伴って住宅開発の波が押し寄せ、高雄地区の大半が宅地造成されてしまった。その間埋蔵文化財の発掘調査が進められ、古くは縄文時代の人々の生活をしのばせる遺物の出土をはじめとして、弥生時代における集落跡、墓群など特筆すべき遺跡の存在から、中世の山城などが所在している。

もっとも古い遺物としては、山城跡の調査として実施した、石穴遺跡D区において出土した縄文時代早期の押型文土器の小破片であり、周辺において生活跡の存在の可能性を示唆している。もっとも顕著な時代として、弥生時代の遺跡をあげることができる。その一つに宅地造成によって調査が実施された吉ヶ浦遺跡であり、主要な遺構には、住居跡10棟、木棺墓18基、甕棺墓72基などがあり、人々が生活した集落（弥生時代中期前半）から墓域（弥生時代中期中頃～後期初頭）へと変遷し、その後再び集落（弥生時代後期終末）へと移っていった状況がうかがえる。

この遺跡からは、中期前半の鉄製品が出土し、国産による鉄生産を考える上で貴重な資料を提供している。さらに甕棺墓からは布が人骨に付着した状態で出土しており服飾史を考える上でも貴重な資料を提供したといえる。また吉ヶ浦遺跡以外でも銅戈が出土したと伝えられる、現在の星ヶ丘団地東部の丘陵地があり、高雄地区の丘陵周辺には弥生時代における集落群が展開していた可能性が極めて高いといえる。

その後の古墳時代では、菖蒲浦古墳をはじめとして吉ヶ浦古墳など宝満山からのびる丘陵および縁辺に古墳が造営されている。特に菖蒲浦古墳からは方格規矩鏡などとともに漆塗の櫛などが副葬されており、造墓集団の勢力背景をうかがい知ることができる。古墳時代における集落については吉ヶ浦遺跡内に認められ、弥生時代に引き続き人々の生活痕跡が認められる。

古代に入ってからは、中心が大宰府政庁跡周辺の大宰府条坊へと移動したことからか、現状では、古代以降の集落は確認できていない。しかし、古代以降の遺物が調査を進めるたびに出土することから、周辺に古代以降の集落が存在していた可能性は高い。

時代は下り、中世も後半期の戦国時代に至り、今回調査を行った高雄山城跡が築かれる。天正14年に薩摩勢（島津勢）によって築かれたという記載が古文書に残されており、実際に山城の痕跡が高雄山一体に残存している。特に詰め（本丸）部分については、竪堀や当時の段状の造成が明瞭に残っている。このように大宰府条坊跡と推定される地域から離れ、一見遺跡など希薄な地域ではないかと捉えられがちな地域ではあるが、弥生時代の集落の存在をはじめ、古墳の造営を見るように古墳時代における人々の活発な活動の痕跡など、時代は大宰府の時代（古代）から遡るものから中世の時代まで連綿と人々の生活の痕跡が残る地域であることがわかる。（中島恒次郎）



1．有智山城跡
2．根本中堂跡
3．南谷遺跡
4．宝満山経塚
5．地蔵原遺跡
6．竈門山寺跡
7．浄戒座主跡
8．三浦古墳群
9．浦之城跡
10．連歌屋遺跡
11．新町遺跡
12．馬場遺跡
13．浦ノ田遺跡
14．太宰府天満宮境内地遺跡
15．岩屋城跡
16．小賀谷遺跡
17．塚口古墳群
18．御笠遺跡群A地点
19．高雄山城跡
20．松ヶ浦古墳
21．集り古墳群
22．六本松古墳
23．結ヶ浦遺跡
24．菖蒲浦古墳群
25．下高尾古墳
26．今王遺跡
27．柚ノ木古墳群
28．柚ノ木遺跡
29．吉ヶ浦遺跡
30．六度古墳
31．尺ガ浦古墳
32．大谷古墳
33．星隈古墳
34．阿志岐古墳群
35．宮崎遺跡
36．御笠遺跡群
37．天山古墳群
38．竹塚遺跡
39．大曲川遺跡
40．野黒坂遺跡
41．イカリノ上古墳
42．峠山古墳群
43．針摺遺跡
44．宮崎遺跡
45．竹敷町遺跡
46．永岡遺跡
47．常松遺跡
48．銭塚古墳
49．鳥井元古墳

Fig. 1　高雄周辺の主要な遺跡（S＝1/50000）

Ⅲ. 調 査 の 概 要

1. 吉ヶ浦（よしがうら）遺跡　第２次調査

1) 調査に至る経過

遺跡地の地番は太宰府市高雄５丁目4222－19（大字太宰府字吉ヶ浦4222－19）である。昭和57年３月に土地所有者が宅地造成を行なったところ、人骨が発見され、所有者は福岡県文化課へ通報し、さらに県文化課小池史哲氏より当市が連絡を受け、甕棺墓と確認されたため急遽発掘を実施することとなった。調査は1982.3.16～3.17に行なった。宅地造成の対象面積は400㎡であるが大半は削平されたため、残存する遺構の一部を調査したに止まる。調査は山本信夫が担当した。

2) 遺 構 各 説

遺跡は標高約60ｍの丘陵上に位置する。昭和44年８月１日～11月10日にかけて、団地造成に先立ち福岡県教育委員会が吉ヶ浦遺跡を調査しているが、今回の調査区はこの西部隣接地（竹林）あたり、当時は未調査の部分である。なお過去の県調査を第１次として、今回の調査を第２次とする。

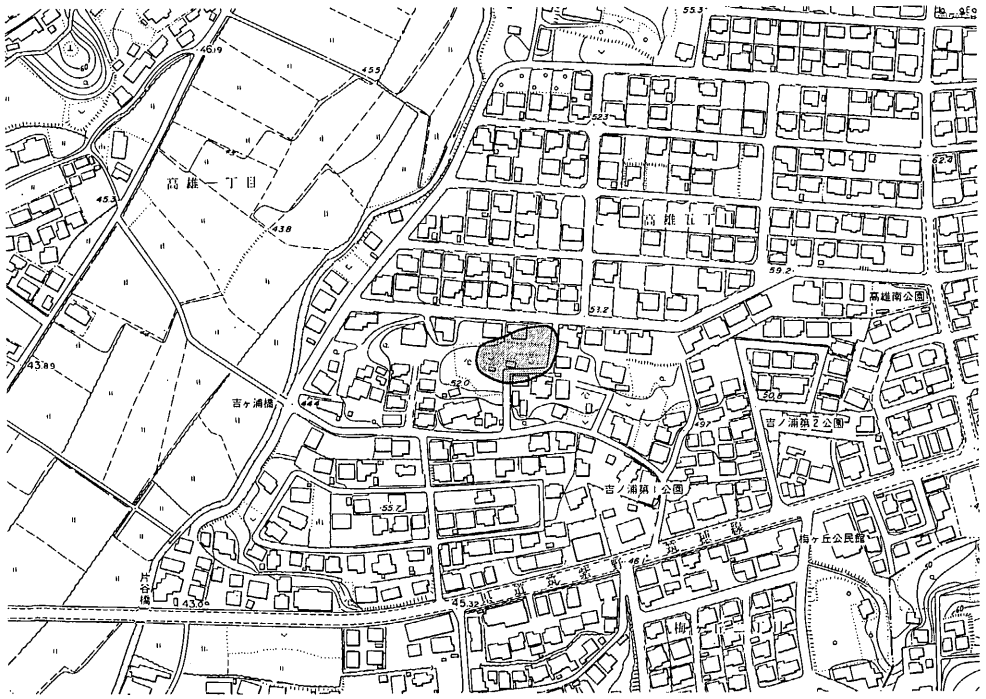


Fig. 2　吉ヶ浦遺跡第２次調査位置図（Ｓ＝1/5000）

吉ヶ浦遺跡第１次調査については正式報告は未刊行であるが、下記文献でその概要を知ることができる。

① 九州歴史資料館『大宰府の文化財（史前の太宰府)』1974

② 福岡県教育委員会『教育福岡』昭和47年11月号1972

③ 橋口達也「初期鉄製品をめぐる二、三の問題－福岡県吉ヶ浦遺跡出土の鉄器を中心にして」『考古学雑誌』第60巻１号1974

これによると遺跡の内容は下記に示すとおりである。

円墳３基（古墳時代後期）内部主体は横穴式石室。石室内から玉、鉄鏃、皮袋形須恵器、墳丘から須恵器大甕、壺、高坏などが出土。方形住居（古墳時代)。方形・円形住居（弥生時代中・後期)。木棺墓十数基（弥生時代中期前葉～後葉)、鉄鏃数個、鉇２出土。甕棺墓74基（弥生時代中～後期)、鉄鉇１、布・むしろ片、南海産イモガイ製貝輪などが出土。

吉ヶ浦遺跡は上記のような複合遺跡であるが、このなかで遺構の主体を占めるのは弥生時代墳墓とくに甕棺墓であり、その内容を見ると、合口式甕棺が多く、単式甕棺は少数である。また、半数近くは子供用であった。今回の第２次調査地点はこうした墳墓密集地の延長部分とみられる。

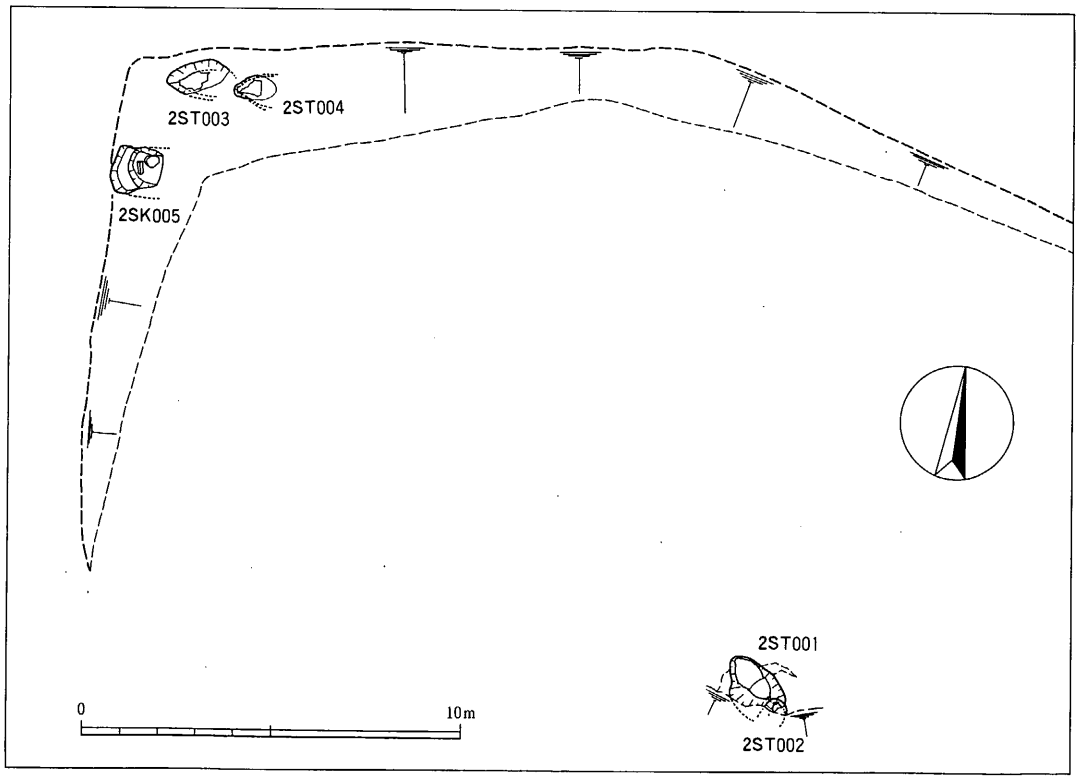


Fig. 3　吉ヶ浦遺跡第２次調査遺構配置図

遺　構

甕棺墓４基（2ST001～2ST004の成人棺）、土壙１基（石棺墓か？）がある。2ST002～ST004および土壙は造成時の破壊が大きく詳しい内容はわからない。

2ST001（fig. 4、pl. 2～4）

墓壙は削平されており上面の形状は明確ではない。南側は2ST002と重複し2ST002が新しく切る。棺は合口式で、上下とも甕を使用している。上甕の上半部は打ち欠き、この破砕面に下甕の口縁部を接して連結し、結合部には粘土の目貼りをしている。なお上甕の上面に２ヵ所穿穴と思われる部分がある。棺の傾斜角は18°。内部には屈肢葬人骨が遺存する。成人棺。

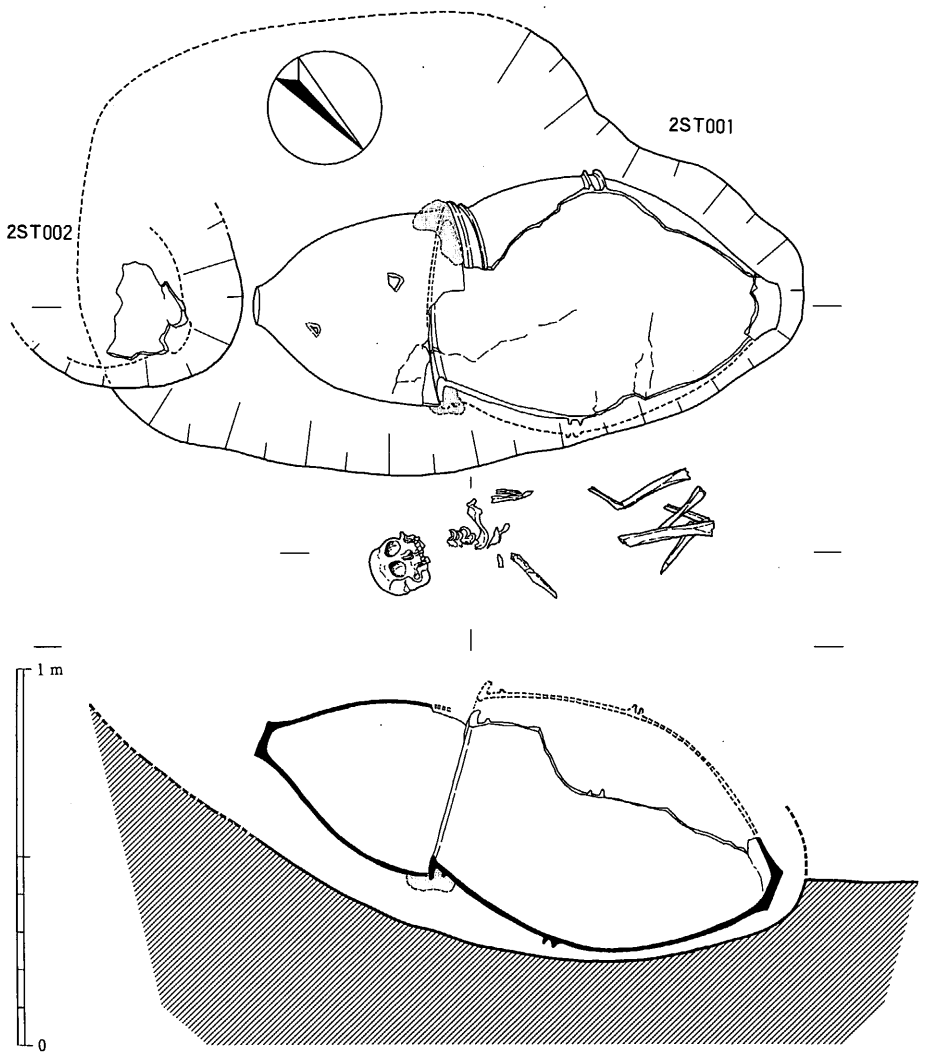


Fig. 4　2ST001甕棺墓実測図（1/20）

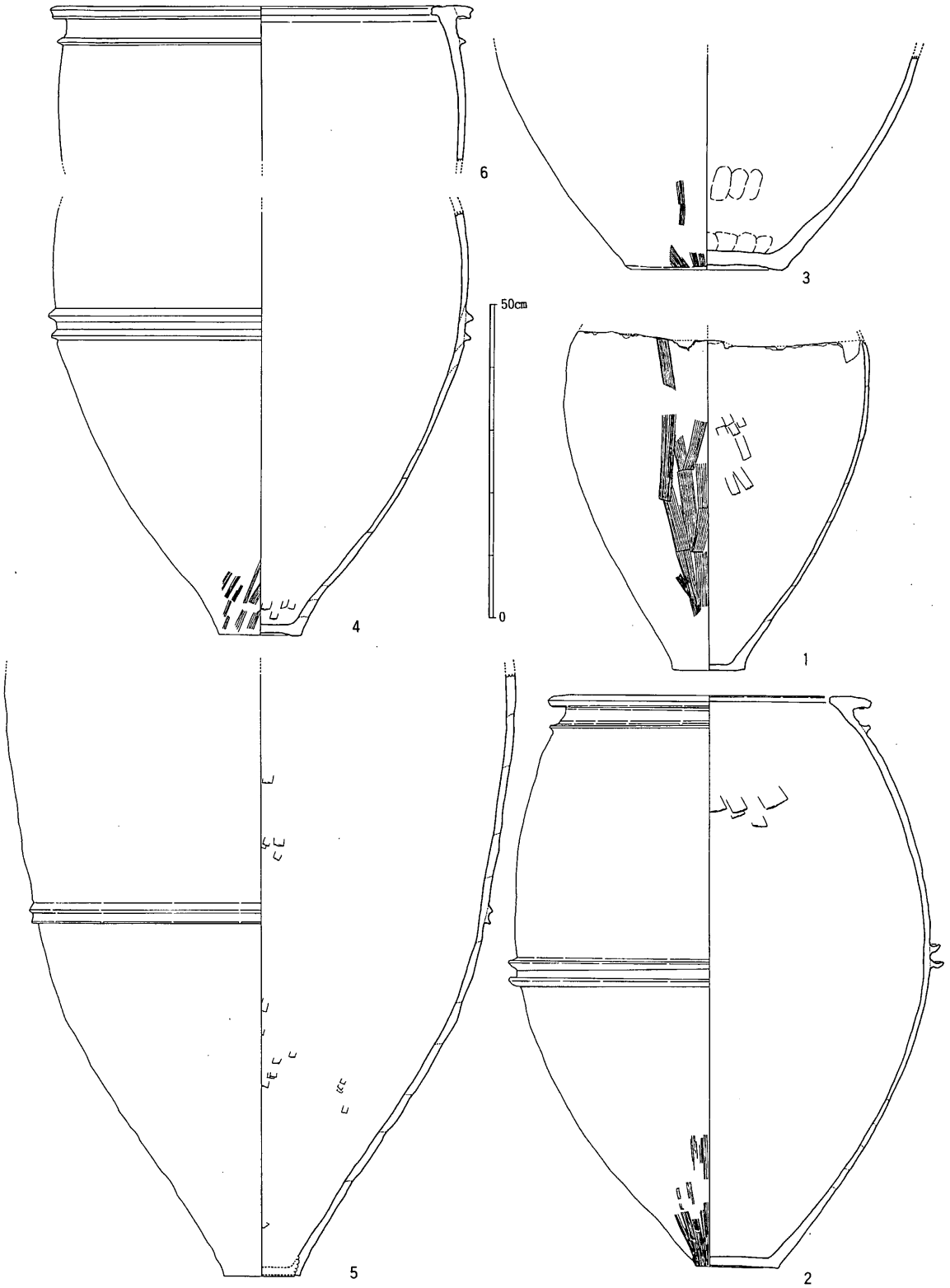


Fig. 5　甕　棺　実　測　図 (1/10)

3) 遺物各説（fig. 5、pl. 7）

2ST001甕棺

上甕（1） 口縁部は欠損する。外面は縦位刷毛目調整、内面は平滑な刷毛目調整（板状工具）で内外工具を替えている。底径は11.5cm、現存高さは52cm。

下甕（2） 口縁部断面は鋭角の逆L字形で胴部中位が張り、口縁部下に一条、胴部に二条の突帯がある。胴部突帯の断面は高く発達した三角形、口縁部突帯の断面は角に近い。特徴から弥生時代中期後半頃と思われる。口径51cm、器高90.1cm、底径は13.2cm。

2ST002甕棺（3） 底部のみである。底部端は鈍く他の甕棺より新しい要素をもつ。底径は13cm。

2ST003甕棺（4・5・6） 4は胴部に二条の突帯がある。突帯の断面は発達した三角形をなす。胴部最大径は64.5cm、底径は13cm。5は2ST003のすぐ南側で表面採集したもので2ST003の片方と考える。胴部には発達した三角形断面をなす二条の突帯がある。現存高さ95cm、底径は12cm。6は同じく南側で表面採集した口縁部で4・5どちらに接合するか不明。口縁部断面はT字状で内側の突出はシャープだが小さい。口径は67cm。成人棺。

2ST001、2ST003の土器は弥生時代中期中頃～後半に入り、2ST002はこれよりも年代が新しい可能性がある。

4) 小　　結

遺構は破壊が大きかったため、墓地の構成内容や年代幅などについて追及できる事は限界がある点、惜しまれる。この点に関しては第1次調査の内容を参考とする必要があろう。しかし大宰府前史をひもとくひとつの基礎材料として有用である。　　（山本信夫）

2. 渡内遺跡　第1次調査

1) 調査に至る経過

太宰府市青山2丁目3611－1（大字太宰府3611－1）において学校法人都築高宮学園（理事長都築貞枝）から同学園の総合屋外運動場造成の話があった。当該地点は過去の分布調査の結果、石室状の石がいくつか露出していたところから渡内古墳群として周知の遺跡とみなされていること、この開発対象地のすぐ南東の丘陵が結ヶ浦火葬墓（和同開珎を共伴した奈良時代の火葬墓）であることや、国道3号線バイパス建設に伴って調査された君畑遺跡が近接している点などから、太宰府市教育委員会では事前に発掘調査が必要であることを連絡し、協議の結果、昭和58年5月9日から18日にかけて発掘調査を実施した。調査は狭川真一が担当した。

2) 調 査 の 概 要

調査地は高雄山を中心とする南北に連なる低丘陵から西南に派生した尾根のひとつで、現存する最頂部の標高は約100m、尾根先端の水田からの比高差は約50mである。現況では尾根基部の大半が過去の造成で失われておりこの部分での遺跡の有無は確認されていない。

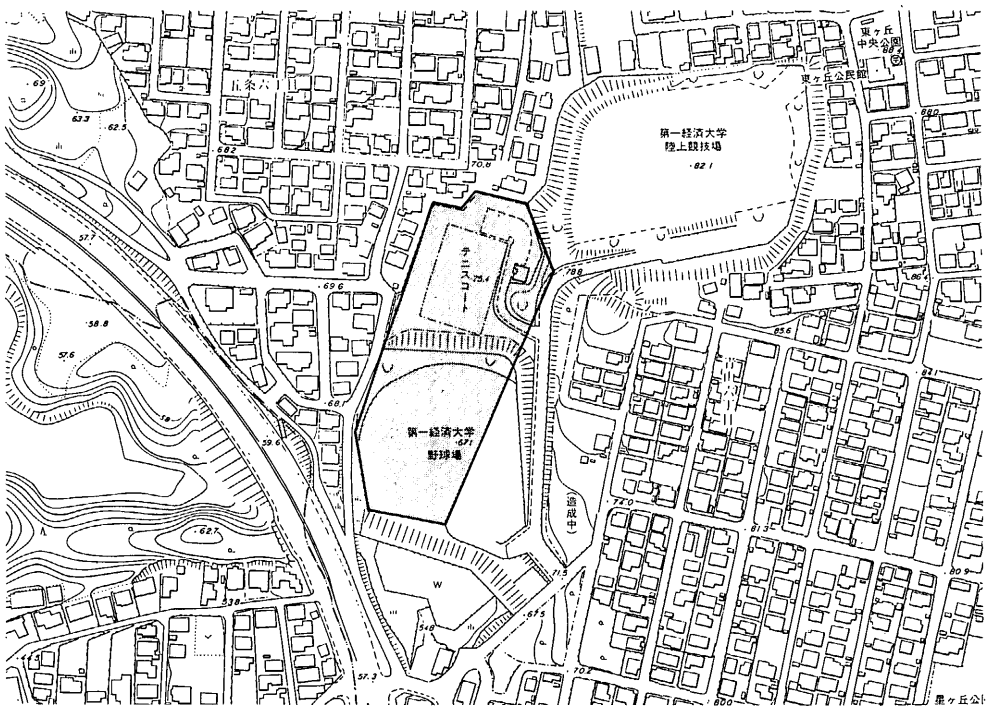


Fig. 6　渡内遺跡第1次調査位置図（S＝1/5000）



Fig. 7　渡内遺跡第1次調査トレンチ配置図（1：2000）

調査は、石室状の石が露出している地点（Ⅰ区）を中心に行なう計画であったが、1）にも述べたように奈良時代以降の墳墓群が近接した遺跡から発見されていることと、尾根頂部が緩やかな傾斜であることから墳墓遺構の構築されている可能性が充分に考えられたため、尾根頂部全面（Ⅱ区）と僅かに平坦な部分が観察される地点（Ⅲ～Ⅴ区）を追加して調査区を設定した。さらに谷部分にもトレンチを設定した（Ⅵ区）。以下各区ごとに報告する。

Ⅰ　区

過去の分布調査で古墳の存在する可能性が考えられていた地点で、墳丘状の隆起や石室を思わせる石の露出がある。調査はこの石の露出部分を中心に行なった。その結果、石の周辺に掘り方はなく人為的に置いたとは考えられず自然石の露頭とみなされた。墳丘と想定していたものは、断ち割り調査も実施したが盛り土は確認されず、地山と判断された。また周辺に遺構と考えられるものは全く無く、分布調査で想定されていた古墳は、丘陵の隆起部分にほかならなかった。

Ⅱ　区

Ⅰ区の南側から南北に延びる尾根の頂部に設定した調査区である。尾根頂部の一部に石が露出しておりその地点を中心に調査を実施した。その結果、石は自然石で下部に遺構はなく、またその傍らに集石状のものを確認したがすべて安定しておらず、また下部に遺構の存在が確認されなかったことから遺構と見做すことは困難である。

さらにこの調査区内からいくつかの素掘りの土壙状を呈する穴が確認されたが、すべて最近のものであった。調査区全体にわたって遺構と考えられるものは検出されなかった。

Ⅲ　区

Ⅱ区西側で一段低く且つ僅かに平坦な部分に設けたトレンチである。表土除去後すぐに地山となっており遺構は検出されなかった。

Ⅳ　区

Ⅱ区の南側で一段低く且つ僅かに平坦な部分に設けたトレンチである。この部分は尾根頂部からの土砂が流入し堆積していることから地山に至るまでに他の地区よりもかなり深く掘り下げたが、遺構や遺物の検出は全くなかった。

Ⅴ　区

Ⅳ区の南側で調査対象としている尾根の南端部分にあたる。表土直下はすぐ地山となり、遺構や遺物の発見はなかった。

Ⅵ　区

尾根西側の谷部分に形成された畑地に設定したトレンチである。現状でも湿地状を呈していたが、トレンチを掘り下げた結果、表土直下には暗青灰色の粘土が堆積しているだけで、遺構や遺物の検出はなかった。またこの地点のボーリング調査の結果をみると暗青灰色粘土が4～5m余り堆積し、その直下が花崗岩風化土となっており、危険度が著しく高くなることもありこれ以上

の調査は行なわなかった。

以上の調査以外に重機搬入路の立会調査を行なった。主に尾根の裾部分にあたるが、Ⅰ区の裾部分では人頭大の石が多量に検出された。しかしながら人為的な構築物とは考えられず、丘陵上方から転落し堆積したものと判断された。

3) 小　　結

ここに報告したように当該地点に遺構の存在は確認されなかった。また表土中を含めて出土遺物は皆無であり、調査の手が及んでいない斜面もかなりの急傾斜であることから、遺構の存在は想定できない。したがって、今回の開発対象地域には遺構の存在は無いものと判断した。

（狭川真一）

3. 下高尾（しもたかお）遺跡　第１次調査

1)　調査に至る経過

昭和62年９月に、太宰府市高雄２丁目3828－２他の山林1408㎡を三和宏業有限会社から宅地分譲に伴う開発行為を実施するとして、埋蔵文化財の有無に対しての照会があった。それに基づいて太宰府市教育委員会では昭和63年１月13日に立木伐採に際して現地立会を実施した。その結果、開発予定地域内に古墳の存在が確認されたため、三和宏業有限会社と太宰府市教育委員会が協議を行ない、開発行為の事前に発掘調査を実施することで合意した。そのなかで発掘調査の期間については、開発地が民家に隣接しており、造成工事を梅雨時期まで延長すると災害の恐れが予想されることから、緊急に発掘調査を行なう必要があると判断した。現地での発掘調査は、昭和63年１月25日から２月２日まで行ない、調査面積は約220㎡であった。現地立会は山本信夫、調査は狭川真一が担当した。

2)　遺　構　各　説

標高151ｍの高雄山から南に長く延びる丘陵を主丘とし、そこから東へ舌状に派生する低丘陵

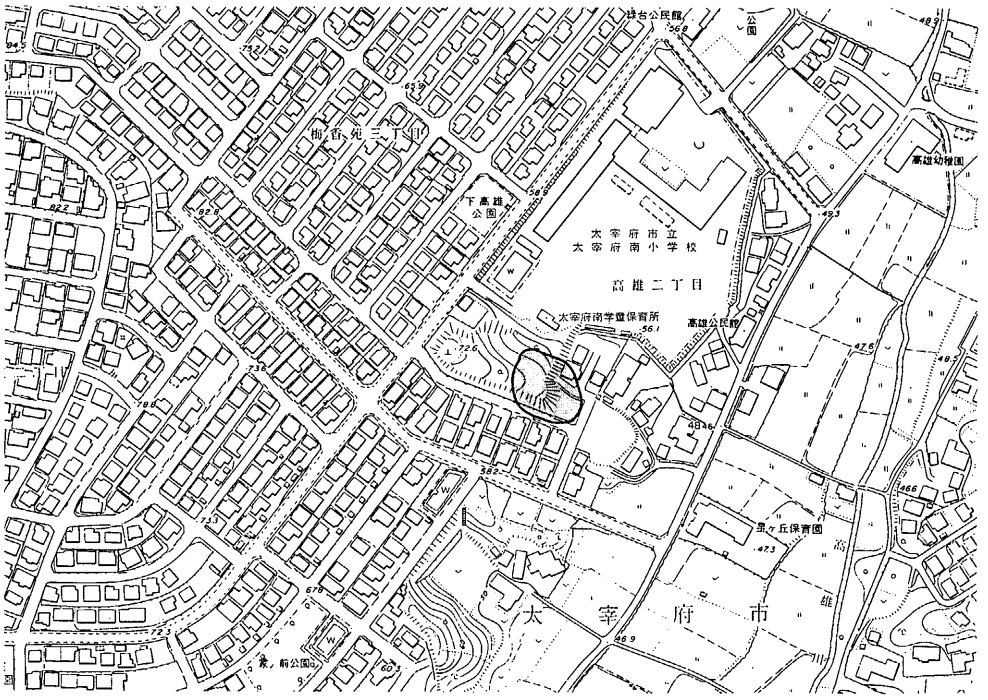


Fig. 8　下高尾遺跡第１次調査位置図（Ｓ＝1/5000）

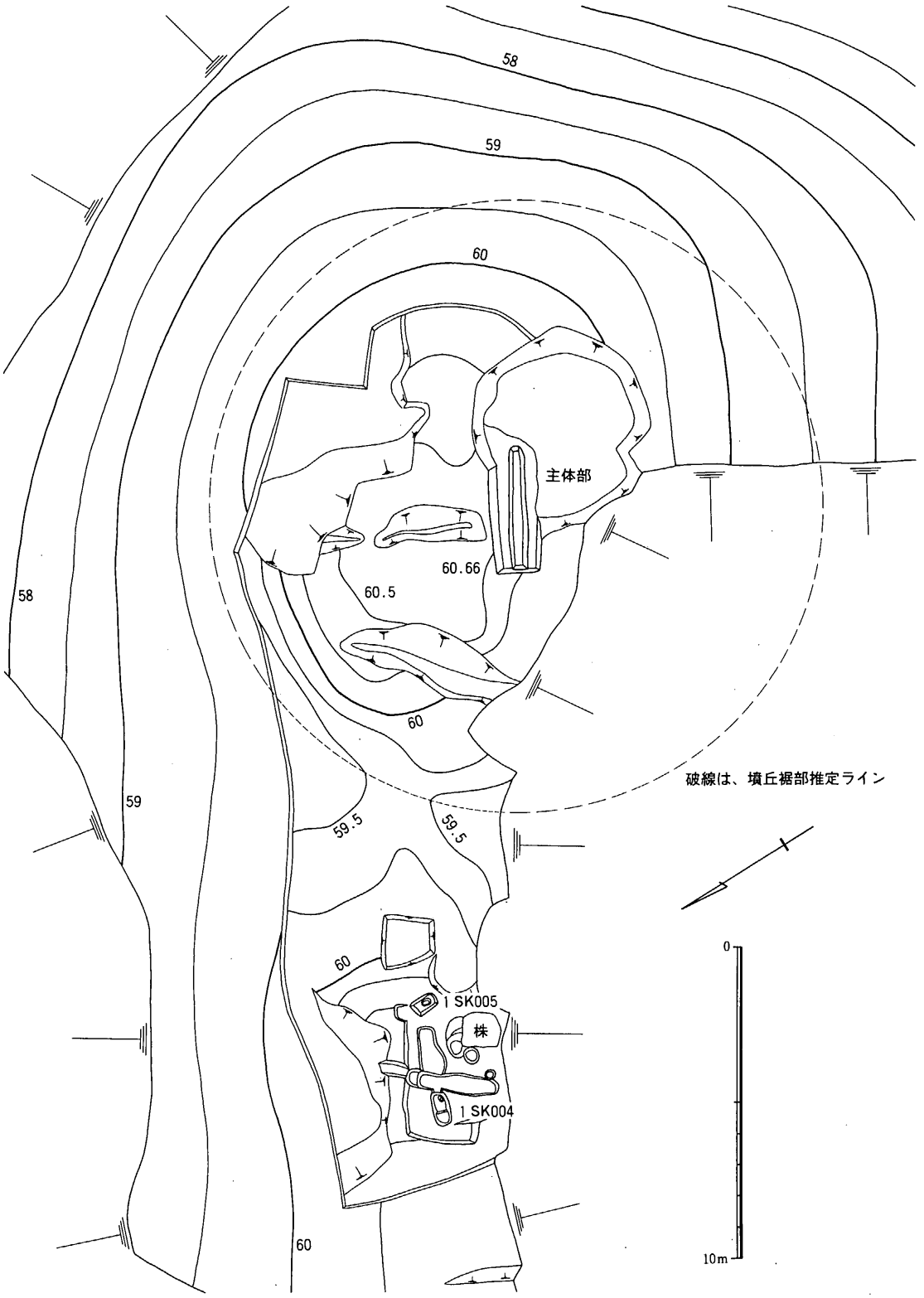


Fig. 9　下高尾遺跡第1次調査遺構配置図（1：200）

の先端に調査地は位置している。現状では、この低丘陵の南側斜面はすでに開発され失われており、東側も裾部分を削り取って宅地となっている。しかしながら標高60m付近の丘陵尾根上に古墳1基と弥生時代とみられる土壙などを検出することができた。また北側斜面下位には太平洋戦争中の防空壕とみられる横穴が存在したが、内部が土砂や廃棄物で埋まっており調査は行なわなかった。

(1) 古　墳《下高尾1号墳》

調査区の範囲では古墳の裾部分を完全には調査できなかったため規模は明確ではないが、直径はおよそ19m（主体部中心から調査できた裾部を半径として復原した数値）、高さは丘陵基部側から現存頂部までで約1mを測る円墳と考えられる。丘陵先端側から計測すると高さはかなり高くなると思われるが、調査が必要部分に及んでいないため明確にはできなかった。裾部分が明らかにできた西側では、周溝は確認できていない。また、調査時点ですでに著るしく土砂が流出し、随所に攪乱もあってすでに花崗岩風化土の地山が露出し、盛り土の状況は明らかにできていない。しかしながら主体部の深さから考えて盛り土の高さはそれほど厚いものとは考え難い。

埋葬の主体部は、割竹型木棺を用いた粘土槨である。墓壙は主軸をN－113°－Eにとり、2段掘りされる。墓壙東側および南側の半分程度を攪乱で失っているが、上段の掘り方の上場で復原長4.4m、幅は現存する西側小口部分で1.3mを測り、東に向かうにつれて徐々に広くなる傾向にある。現存する深さは最も深い部分で0.78mを測る。下場は長さ4.2m強に復原され、幅は残存する西小口部で1.05mを測り、上場同様東に向かうにつれて徐々に広くなる傾向にある。なお、上段掘り方の北側プランの一部が中央部付近で乱れているが、埋土の観察から墓壙埋め戻し以前に崩落していたことが確認される。下段は上面の攪乱にもかかわらずほぼ完存しており長さ4.22m、幅は中央部付近で0.58m、西小口部分で0.40m、若干攪乱を受けているが東小口部分で0.43mである。深さは中央部分が最も深く0.17mを測り、両小口へ向かうにしたがって徐々に浅くなる。下段の掘り方は検出段階で完全に粘土で覆われており、その粘土は上段掘り方下面の大半に広がっていた。

粘土の埋設は、まず下段掘り方底面全体に青灰色粘土を広げ、棺を安置した後に黒灰色粘土で棺底面に生じた透き間および棺の目張りを行ない、両小口付近は灰茶色粘土で厚く包み込み、最後に同質の粘土および茶黄色土の若干混在する暗青灰色粘土で全体を覆っていたものと考えられる。

木棺は粘土の状況から長さは約3.9m、幅は現状では約0.45m程度まで計測できるが、棺底の粘土の形状から棺は円形に近い断面形を呈していたと考えられ、それから算出される棺の直径はおよそ0.52mに復原される。また棺内の赤色顔料分布範囲は、長さ3.1m程度であった。また、西小口付近の粘土の在り方から棺外に別の施設の存在した可能性も考えられる。

墓壙の埋土は、暗茶色土および明茶白色土で花崗岩風化土のブロックや茶褐色粘質土のブロックが混在している。土層観察では3層に分層しているが、その状況から明らかに地山を掘りあげ

埋葬後すばやく埋め戻されたことが分かる。また堆積の状況から埋土は北側から埋められていることが知られ、墓壙掘削の排土は一端墓壙の北側に置かれていたものと推定される（先述した墓壙掘り方上面の乱れと関連するのか？）。

出土遺物は、主体部の棺内に鉄剣１振が埋納されていた他は、表土から弥生土器片、墓壙埋土中から黒耀石のフレイク１点が出土したにとどまり、古墳に伴う遺物は検出されていない。

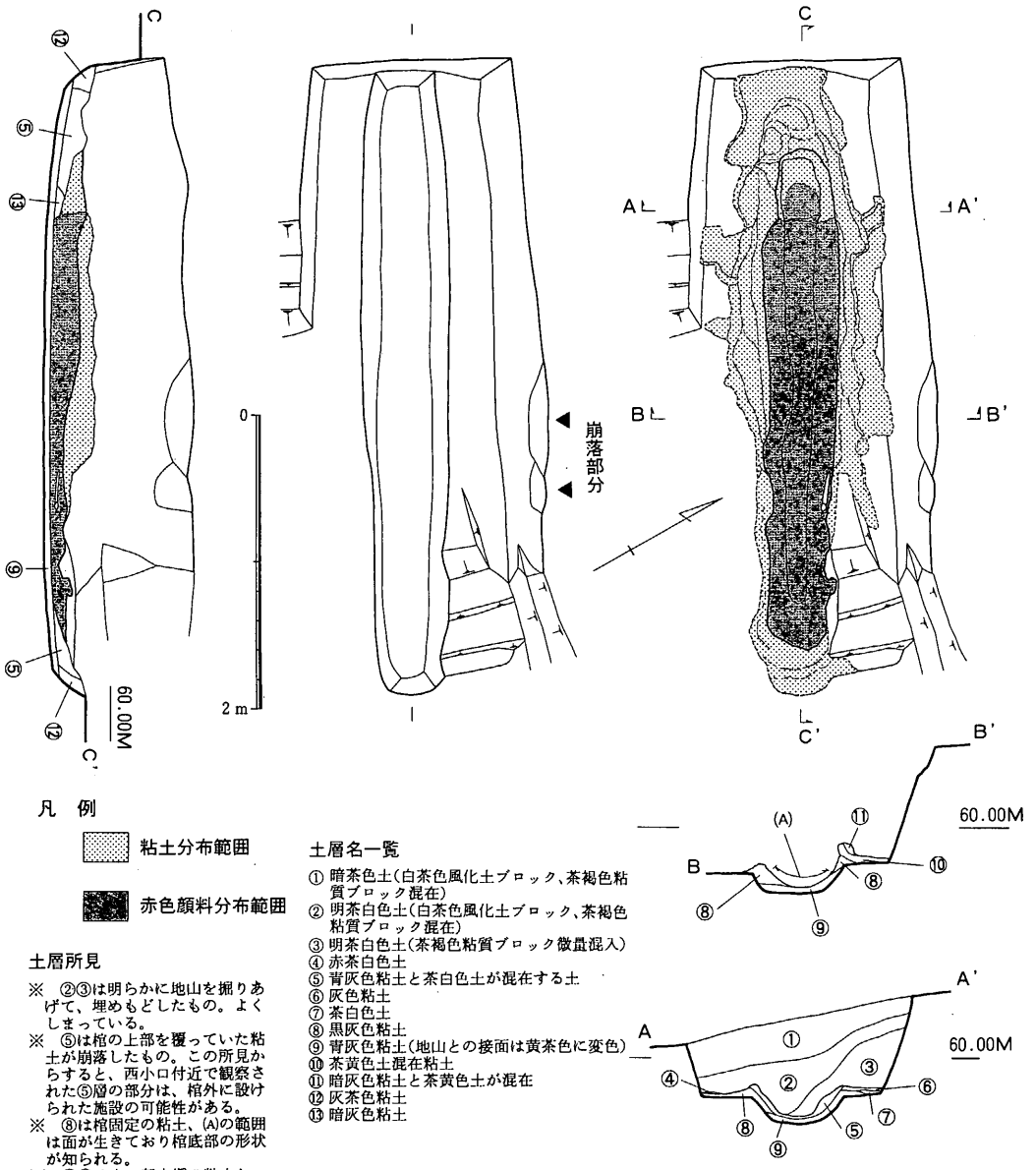


Fig.10　１号壙主体部実測図及び土層観察図（1：50）

出土した鉄剣は、先を西に向け棺内の中央付近で北寄りに副葬されていた。

埋葬遺体の頭位は墓壙の法量、鉄剣の方向などから東側と判断される。

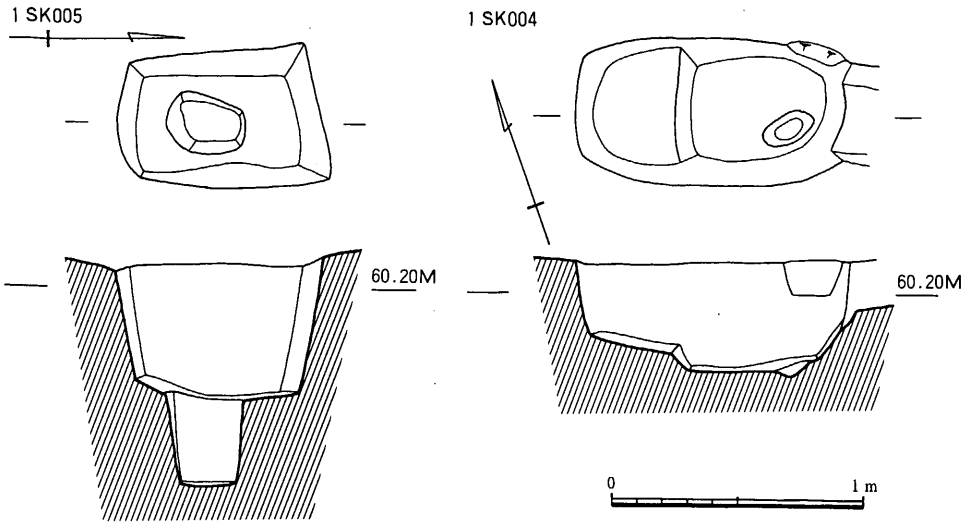


Fig.11 土 壙 実 測 図 (1：30)

(2) その他の遺構

1SX002

調査区西寄りで検出された東西4.2m、南北3.1m以上、深さ約0.3mを測る方形の窪み状遺構である。埋土は、茶灰色土、茶色砂質土、明茶白色土などから構成されるが、自然堆積と判断される。この埋土を除去すると1SK004、1SK005などの遺構が検出された。埋土中から弥生時代土器片が若干出土した。

1SK004

長さ1.05m、幅0.60m、深さ約0.40mで長円形の土壙である。主軸をN－108°－Eにとり、底部は2段になっており、東隅に浅いピットがある。埋土中から弥生時代の甕片ほか若干の土器片が出土した。

1SK005

長さ0.83m、幅0.55m、深さ約0.50mでやや歪な長方形を呈する土壙である。土壙の中央に0.30m×0.25mで略円形を呈し、深さ約0.35mのピットがある。一般的に落とし穴遺構と考えられているものである。出土遺物はない。 (狭川真一)

3) 遺 物 各 説

古墳の遺物としては鉄剣が出土したにとどまり、他は少量の弥生時代の遺物が出土している。

古墳出土遺物 (Fig.12)

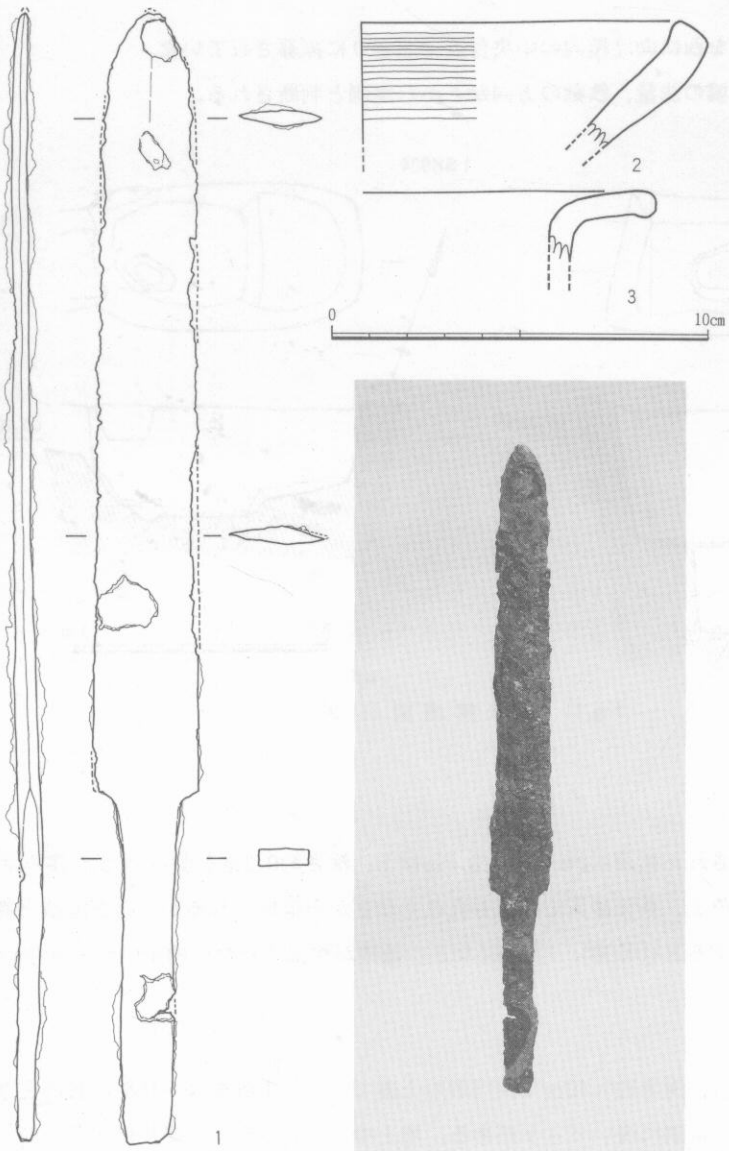


Fig.12　下高尾古墳出土遺物実測図及び鉄剣写真

鉄製品

剣（1）　全長29.9cm、刃部長20.8cm、茎部長9.1cm、刃部の厚みおよび茎部の厚みは、0.6cmをそれぞれ測り、残存状況は良好であるが鏑は明確ではない。茎部分の断面形状は長方形を呈している。

1SX001出土土器（Fig.12）

弥生土器

甕（2・3）　いずれも小破片であり、全形を考えるには不十分である。そのような中で口縁部の破片を図化した。（2）はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を僅かに肥厚させるもので、内外面ともに刷毛によって仕上げている。（3）は鋭角に屈曲する形状を呈し、調整痕跡は器表面剝離のため明確ではない。　（中島恒次郎）

4）小　　結

今回調査した下高尾古墳は現在の高雄の集落がある小平野の西に位置する丘陵上に存在する。この丘陵の北側に隣り合う尾根上には菖蒲浦古墳が存在していた。現在の太宰府南小学校建設に伴って消滅したが、調査の所見では直径20m余の円墳で、埋葬主体は墳頂部に4基、裾部に3基が検出された。この中の1号主体部は割竹型木棺を用いた木棺直葬墳であった。この主体内からは方格規矩鏡をはじめとして、鉄剣・直刀・針・鉄斧形鉄器・刀子・鉇・U字形鋤先・櫛・滑石製臼玉・勾玉など豊富な副葬品や着葬品が認められた。

今回の下高尾古墳と比較すると立地の点では近似したものを認めるものの、1墳に対する主体部の数や埋葬品の内容に大きな違いを認めざるを得ない。しかしながら、この狭い地域に類似する規模の古墳が近接することは、両者が近接する時期の所産であるとともに同一集団によって造営された可能性を考えて差しつかえなかろう。

これと相い似た状況で古墳の配置がなされているものに、太宰府市宮ノ本古墳群がある。平成3年度に調査された12号墳は、粘土で目張りされた割竹型木棺の直葬墳で棺内から流雲文縁一仙五獣帯鏡が出土した。これに近接する尾根で検出された9号墳は、割竹型木棺を埋置する粘土槨でありながら埋納遺物は、鉄剣1振であった。宮ノ本古墳群の場合この両者はともに支群の中心をなすものであり、12号墳が鏡を保有していた点からより群における中心的な存在であったことが想定し得る。

高雄地区の場合、古墳に続く尾根の調査がなされていないためどのような支群を形成していたのか明らかではないが、宮ノ本古墳群の一例を参考にできるならば菖蒲浦古墳と今次の下高雄古墳は、大きな群の別支群であり、より中心的なものが菖蒲浦古墳であったと考えることができるのではないだろうか。

また、高雄地区の古墳はこの2基の円墳をはじめ、後期から終末期に属する菖蒲浦2号墳が近接して存在し、小平野を挟んで対面の丘陵には6世紀代の今王古墳群が知られている。この地区は古墳時代にはある程度の共同体が生活し且つ墳墓を造営した場であったと推定されるが、この地区の乱開発はかなり早くに行なわれ、丘陵の大半はすでに造成され住宅地と化している。詳細を知り得る術は失ってしまったが、残されたわずかの資料がささやかながらもこの地区の当時の様子を窺わせてくれている。　（狭川真一）

4. 五条（ごじょう）遺跡　第１次調査

1)　調査に至る経過

昭和62年２月にイハラハウジングより鉾の浦団地造成の届け出があり、当該地区を試掘調査した結果、削平される予定の丘陵部分に遺構が確認されたため、太宰府市教育委員会と協議を行ない造成工事に先立って発掘調査を実施することで合意をみた。現地での発掘調査は、昭和63年５月30日と31日の２日間で行ない、調査面積は180㎡である。調査は山本信夫が担当した。

なお、遺跡地は福岡県太宰府市五条５丁目3053他に所在し、大宰府条坊跡に隣接するもののその推定されている範囲を越えることから、現在の地名を冠して五条遺跡と名付け、その第１次調査として実施することとした。

2)　遺　構　各　説

現在の市立太宰府中学校および九州学園福岡女子短期大学の建設されている丘陵は、昭和23年の地形図から観察する限り、標高86ｍ内外で南北約１㎞、東西約0.6㎞の独立する丘陵であることが知られる（Fig.13）。発掘調査を実施した地点は、太宰府の平野を望むことができるこの丘陵

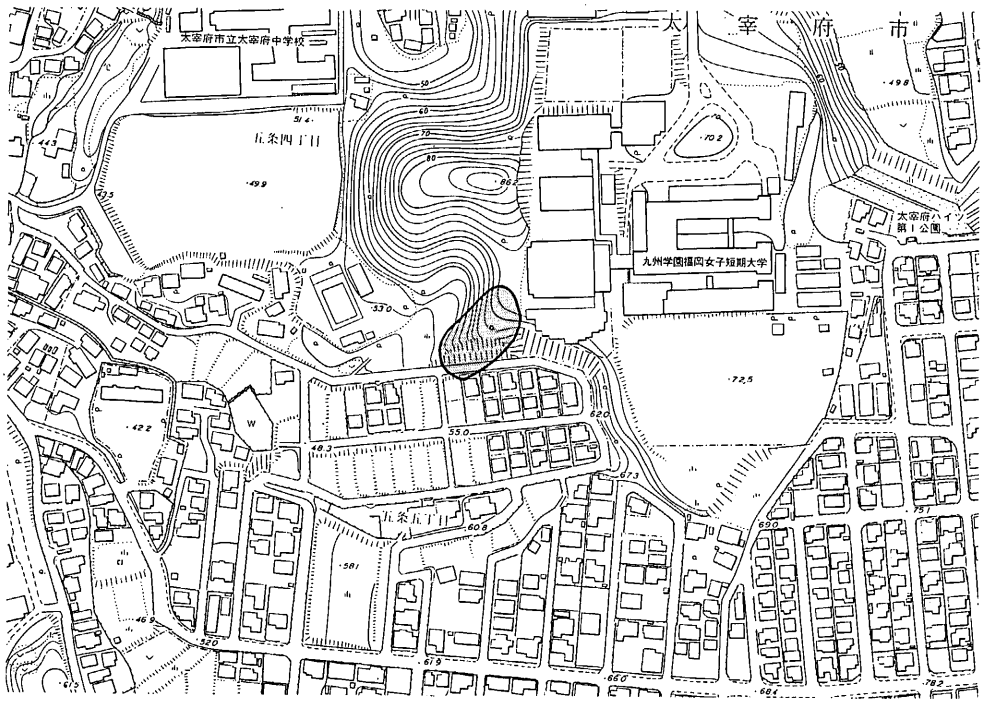


Fig.13　五条遺跡第１次調査位置図（Ｓ＝1/5000）

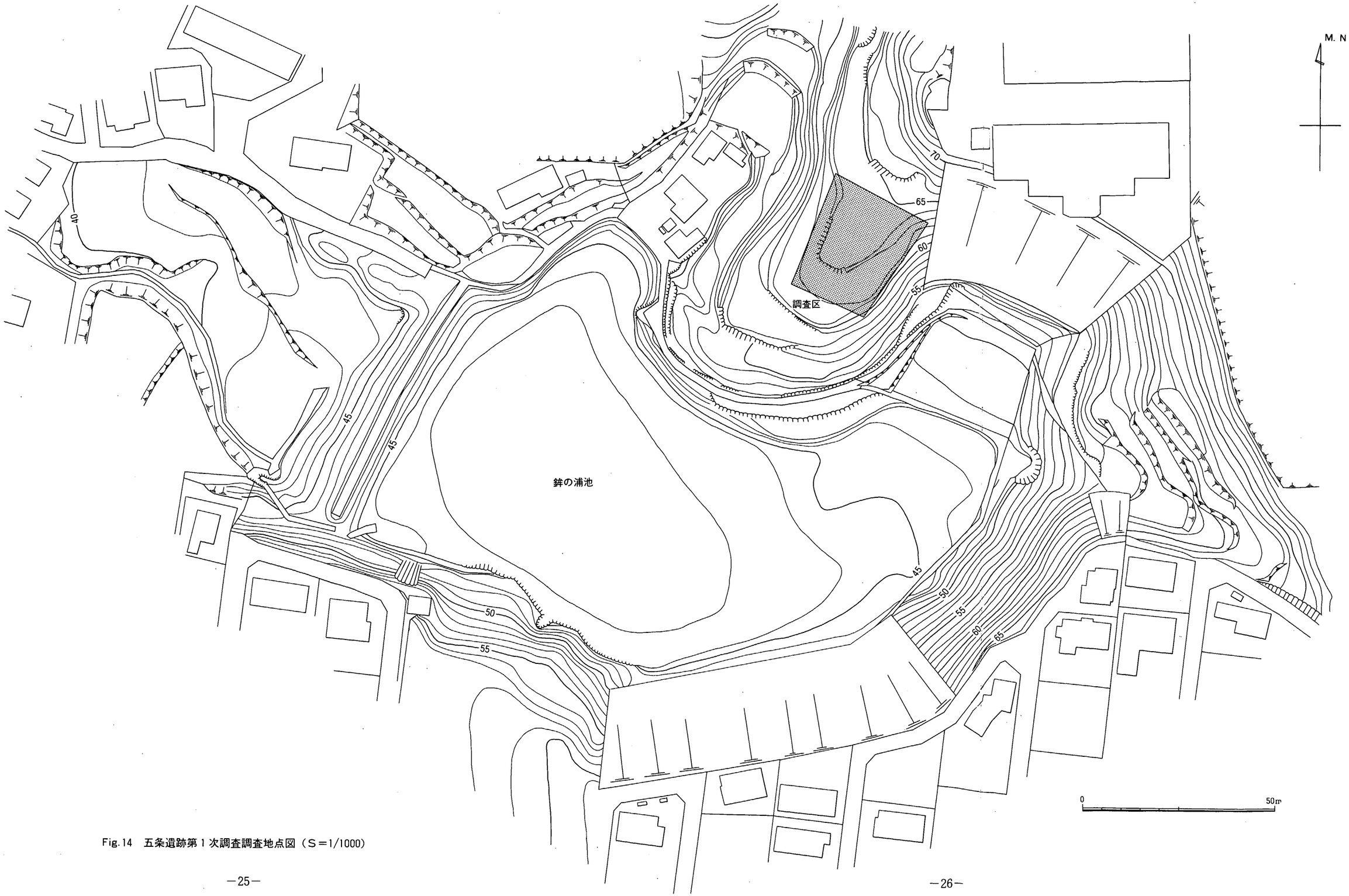


Fig. 14　五条遺跡第１次調査調査地点図（S＝1/1000）

の中央部で、近年まで存在した鉾の浦池に突き出すように舌状に派生する尾根の頂部にあたり、その標高はおよそ65m前後である。尾根の上面はわずかに平坦であり、その部分に掘立柱建物1棟が検出された。また尾根は建物検出部分を含めて3段に造成されており、2段目の南東付近に溜まり状の遺構が検出された。他の部分には遺構は検出されなかった。

(1) 掘立柱建物

1SB001

北西隅の2穴を失うが、南北6間、東西2間で南北棟の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、およそMN-5°-Eである。柱間は南北方向では各々約1.5m、東西方向では各々約2.1mである。柱掘り方は略円形で直径はおよそ0.3mを測る。柱はその痕跡から直径0.15m内外であることが知られ、掘り方の埋土はすべて黄茶色砂質土である。築固めた形跡は認められない。

(2) その他の遺構

1SX002

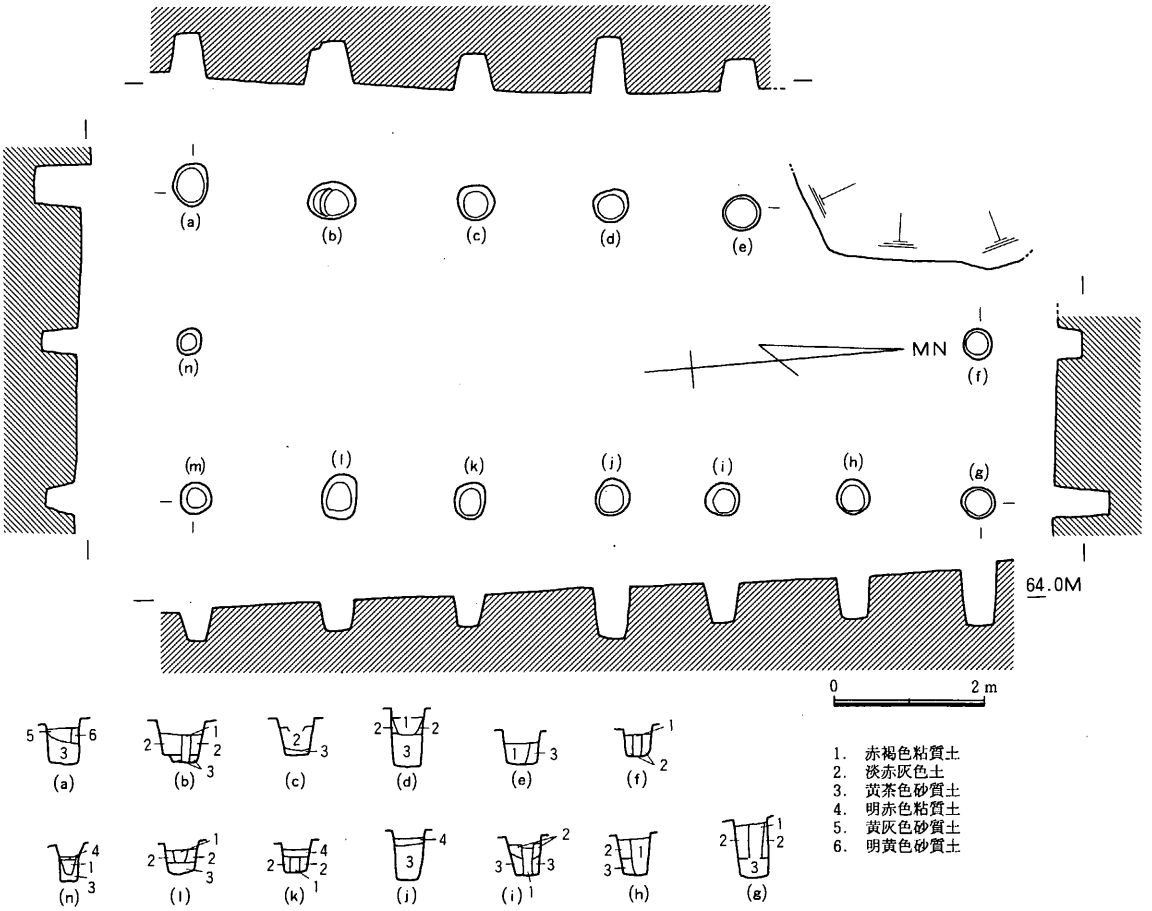


Fig.15　1SB001実測図

掘立柱建物1SB001のある平坦面から一段下の段造成面に存在した、若干の遺物を出土する溜まり状の遺構である。（狭川真一）

3) 遺 物 各 説

1SX002（Fig.16）

須恵器

蓋（1） かえりを有する形態で、内外面ともにヨコナデによって仕上げる。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。焼成・還元度はやや不良。

坏（2） 推定口径12.2cm、残存器高2.9cmを測り、内外面ともにヨコナデによって仕上げている。色調は内面青灰色、外面暗青灰色を呈し、焼成および還元ともに良好。（中島恒次郎）

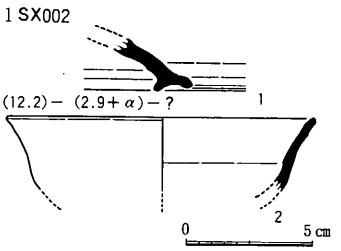


Fig.16 五条遺跡出土遺物実測図（S＝1/3）

4) 小 結

掘立柱建物1SB001の柱掘り方内からは、この建物の造営時期を決定し得る資料は出土しなかった。今次の調査で出土した遺物は、1SX002から出土した若干の資料のみである。この資料は7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられるものであるが、この資料と建物との関係は明らかにはできていない。しかしながら、この段造成の実施時期に何らかの形で関連するものであれば、造成の上限をこの時期に考えることは可能である。

建物自体を検討すると、建物の主軸は地形の主軸に影響を受けており大宰府の平野部分で検出される多くの建物が方位を略北に規制されるのとは異なった様相であると言え、軸方向からの検討は困難である。柱掘り方の形状は、厳密なデーターではないが、7世紀後半から9世紀前半ごろまでは概ね隅丸方形のプランを有するものが多く、これ以後の時期の資料はそのプランが乱れ、略円形を呈するものも含まれてくる。この点からみれば1SB001は平安時代まで下らせて考える必要性もでてくるといえよう。したがって、現段階ではこの建物の時期を、7世紀後半から平安時代の範囲で捉えておくこととしたい。

またこの建物の性格であるが、年代の決定も以上のように積極性を欠いており、性格を追及することは今のところ困難である。今後の資料の増加を待ってあらためて検討を行なう必要があろう。（狭川真一）

5. 石穴（いしあな）遺跡　第１次調査

1） 調査に至る経過

昭和63年度当時、太宰府市内におけるゴミの収拾・処理を管轄していた市民課より、ゴミの増大に伴うゴミ処理の効率化を計る目的で、昭和63年10月18日に不燃物ゴミ処理場の建設計画が持ち上がった。その建設予定地における埋蔵文化財の有無について、市民課より問い合わせが文化課に持ち込まれた。ゴミ処理場の建設計画予定地は、中世における山城が推定されている地であり、実際、現況地形に山城の縄張り遺構が残存し、絵図面も「高尾山城」として現存している地域にあたっている。そこで市民課と協議の結果、翌年の平成元年９月に建設対象地内の埋蔵文化財の有無を確認する目的で試掘調査を実施し、調査範囲の確定を先決課題として行った。試掘調査の結果、計画対象地のほぼ全域にわたって埋蔵文化財の存在が確認され、埋蔵文化財の発掘調査の必要性が再認識されることとなった。そこで再度、市民課と協議の結果、建設対象地の埋蔵文化財の発掘調査を実施することになった。

調査地は、福岡県太宰府市大字太宰府3467－36他に所在し、現地での発掘調査は平成元年10月３日から11月25日まで行なった。また現地での補足地形測量調査を平成元年11月29日から12月１

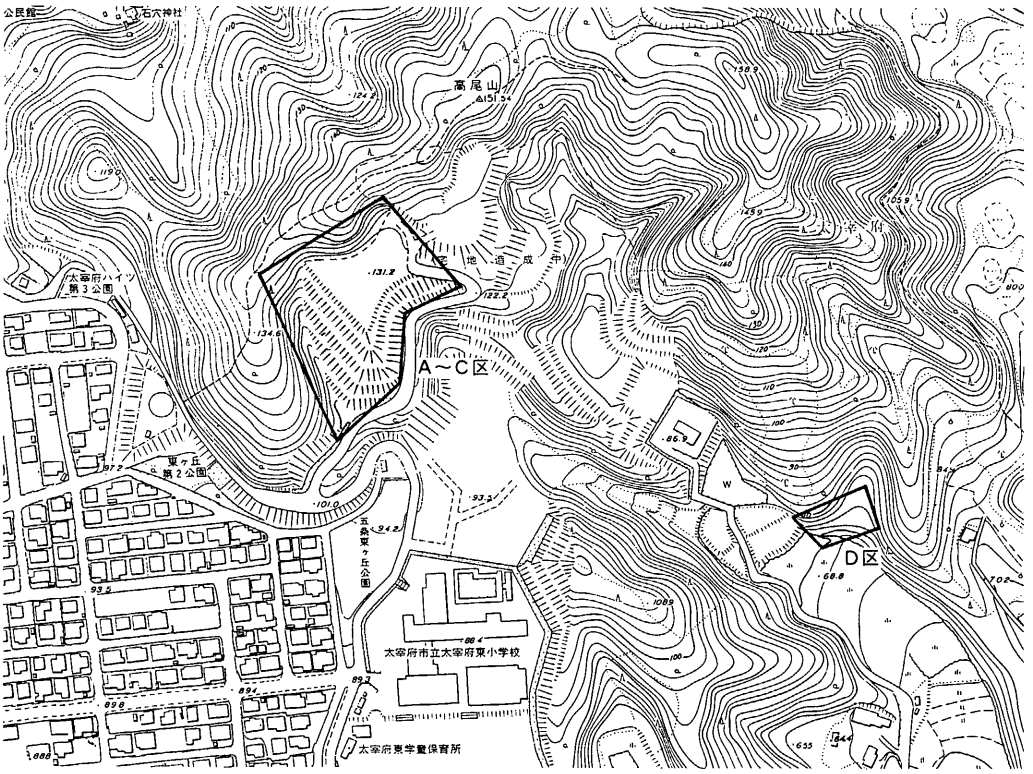


Fig.17　石穴遺跡第１次調査位置図（S＝1/5000）

日まで実施した。調査面積は、約5,000㎡である。試掘調査は城戸康利、本調査は中島恒次郎が担当した。

なお調査地の地形を含めた測量図作成は、アジア航測株式会社福岡支店に委託し、検査は調査担当者が行なった。

2) 遺 構 各 説

石穴遺跡調査地点は、試掘の結果、遺構の残存区域が開発対象地域全体に確認されたため、便宜的にA～D区の4区域に区分して調査を進めた。

各調査区において焼土壙を主体として、蔵骨器埋納遺構等墓域として考えられる遺構群が検出された。当初予想していた高雄山城に関わる遺構は、明確な形で検出できなかった。以下に遺構について報告する。

A 区

調査区は、開発対象区の最奥部に位置し、高雄山城の遺構が山頂部に残存している丘陵部南斜面に設定した。遺構は尾根部分ならびに斜面部にそれぞれ検出し、尾根部分には正方形の基壇状の遺構が残り、斜面部分には焼土壙、溝状の遺構、蔵骨器埋納遺構を検出した。

B 区

当該調査区は、A区に対して谷を隔てた位置にあり、丘陵頂部よりやや下りた地点に焼土壙を確認した。その他に遺構は確認できなかった。

C 区

A・B区が斜面部であったのに対し、C区はA・B区の谷部の延長である平場に設定した。この調査区からは、溝数条と焼土壙および土壙を確認した。

D 区

前三者の調査区とは離れた調査区として、高雄山裾部の谷に設定したのがD区である。この調査区からは、ピットならびに溝が数条確認されている。時期的には高雄山城の機能した時期であるが、性格については不明である。縄文早期の押型文土器片が出土した。

遺 構

(1) 方形壇状遺構と付帯遺構

1SX015 (Fig.23)

A区の最高所つまり西側に延びる丘陵頂部の標高148m内外の箇所に位置しており、南北長15.0m、東西長12.5mを測るほぼ正方形の形状を呈している壇状遺構で、遺構上部の一部および遺構の中心部が後世の攪乱によって削られているものの、残存する高さは約1mを測る。遺構南部には9m×2.5mを測る地山整形の平場が形成されており、平場の南北は溝によってそれぞれ区画されている。また同じく遺構東側も溝によって区画されており、この東側の溝と遺構最南端の区画溝が形成されることによって、この遺構の平面プランが強調されている感がある。なお遺構

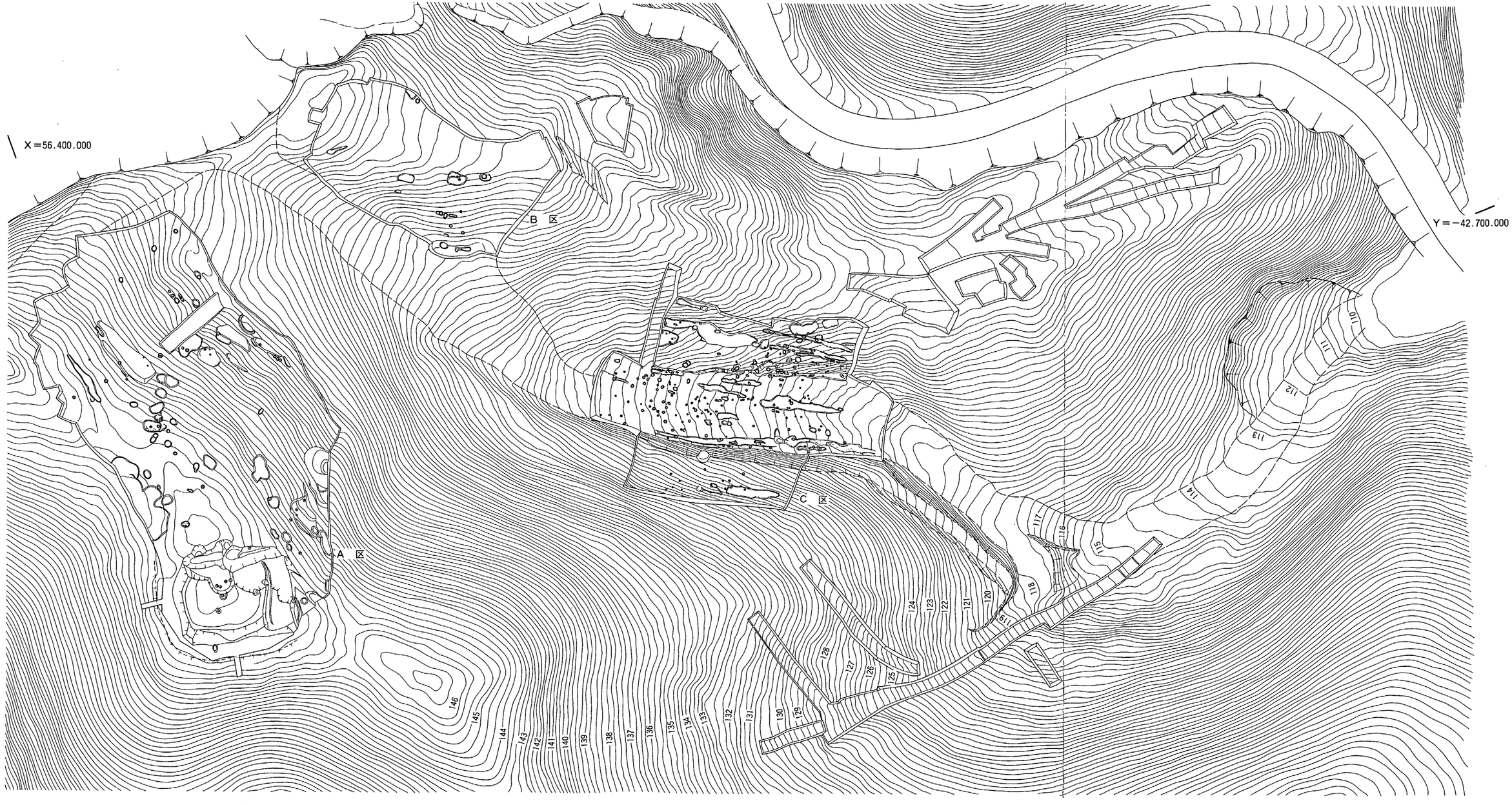


Fig.18　石穴遺跡調査図（S＝1/500）

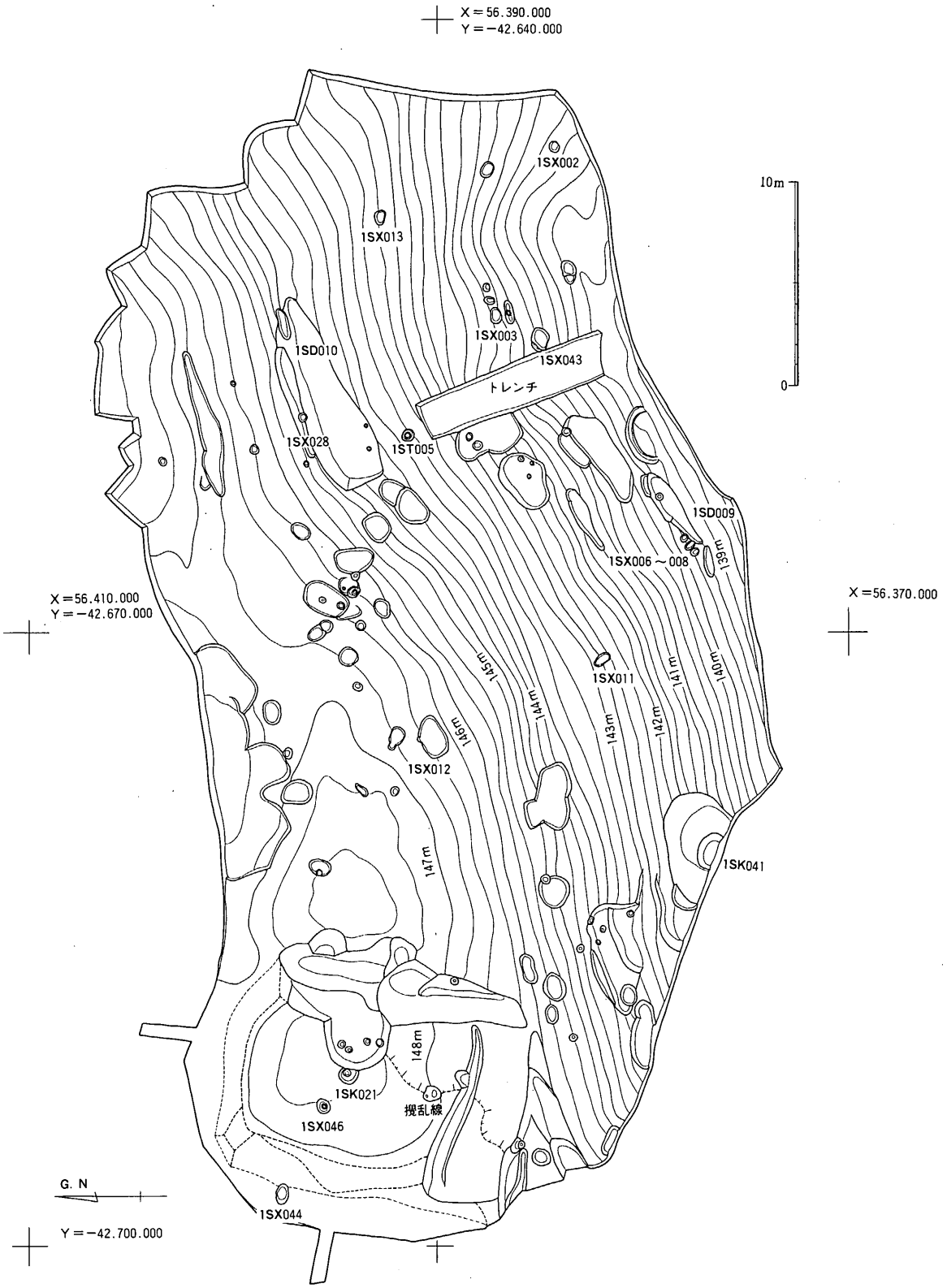


Fig.19　石穴遺跡１次調査Ａ区遺構配置図（Ｓ＝1/300）

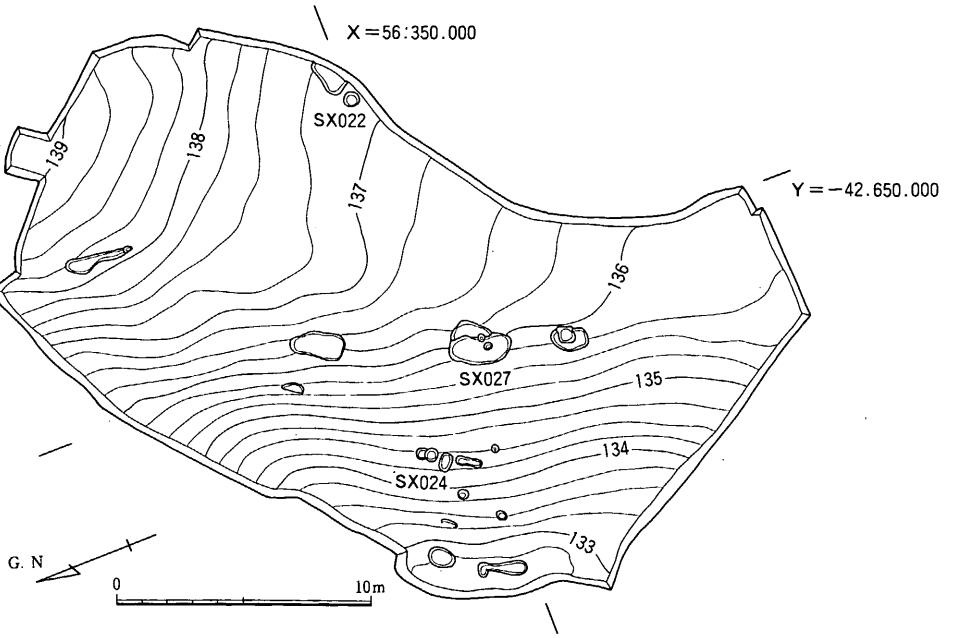


Fig.20　石穴遺構Ｂ区遺構配置図（Ｓ＝1/300）

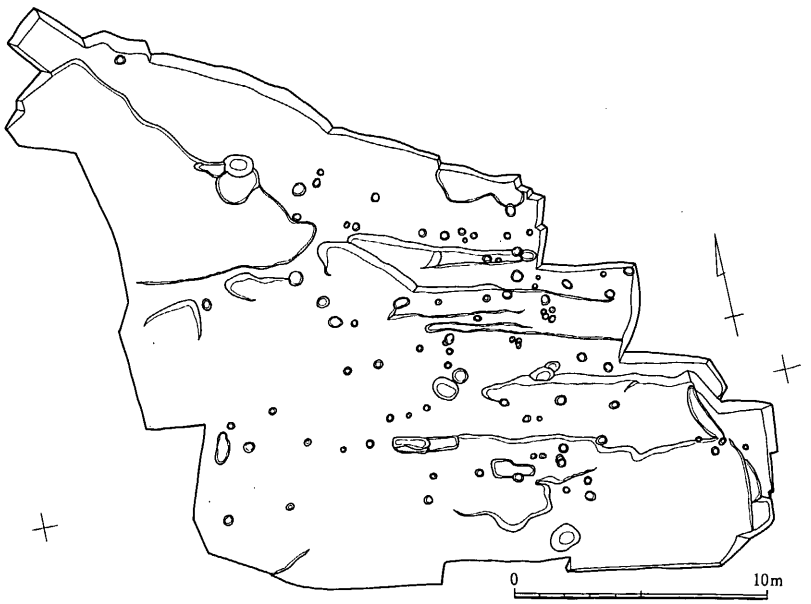


Fig.21　石穴遺跡１次調査Ｄ区遺構配置図（Ｓ＝1/300）

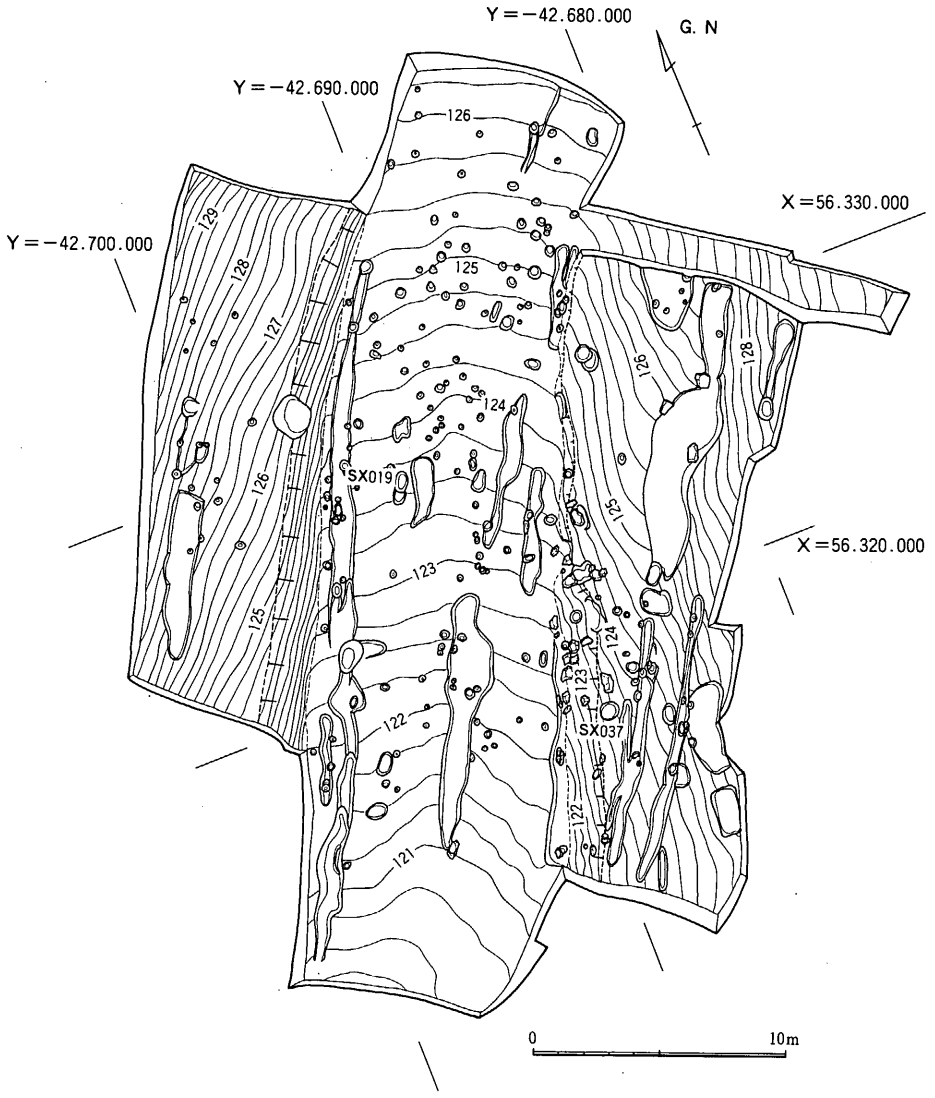


Fig.22　石穴遺跡Ｃ区遺構配置図（Ｓ＝1/300）

北辺と西辺には溝は形成されていない。

この遺構は単純な積み土によって構成されており、Fig.25に示したように５層の積み土によって形造られている。第１層ならびに第３・４層が黄色を基調とした地山と極めて近似した同一の層相を呈しているのに対し、第２層および第５層は黒色を基調とした腐植土的な土が堆積してい

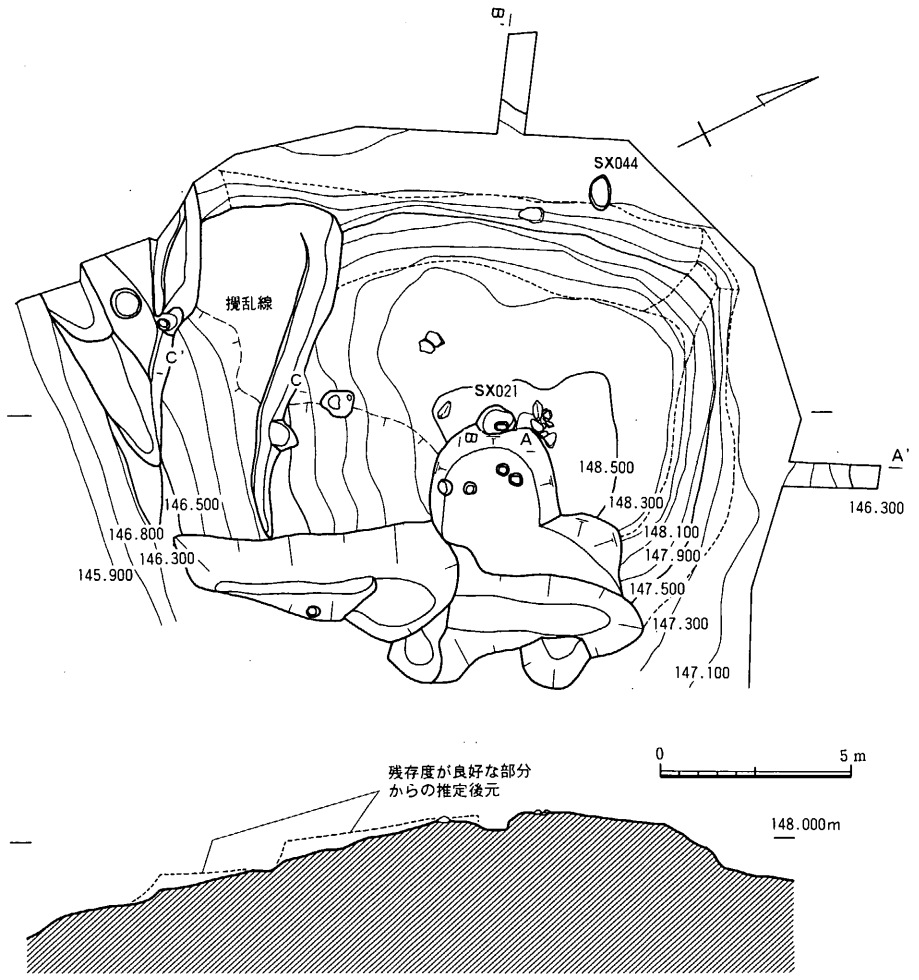


Fig.23　1SX015遺構実測図（S＝1/200）

る。なお第2層および第5層からは部分的に骨片が採集され、併せて土器の細片が出土した。これに対し、第1層ならびに第3・4層からは無遺物であった。後述する1SX021は、第3層から掘り込まれ、1SX046は地山に掘り込まれている。したがって、方形の遺構プラン中心よりややずれる位置に1SX046が形成されており、その後1SX015の形成過程の中で、方形の遺構プランのほぼ中心に1SX021が掘り込まれていると考えられる。なお遺構中心部に位置している1SX021の箇所まで撹乱を受けており、撹乱土を除去する際火箸が出土している。さらにその撹乱土中よりPl.34に示した宋銭が出土していることを考えると、遺構中心部に何らかの遺構象徴施設が存在してい

た可能性が高いといえる。

なお遺構南側の平坦部分は、Fig. 25に示したように雑ではあるが幾層かの積み土によって埋められた形跡があり、1SX015の機能が失われたか遺構存在の意味が変容したために埋められたものと考えられる。

1SX021（Fig.24）

長径0.89m、短径0.72m、深さ0.32mを測る不整楕円形の遺構の中に、長径0.32m、短径0.22m、深さ0.19mの小穴が掘り込まれ、二段の構造を呈している。堆積土は3層によって構成され、焼土をやや含んだ土と地山に近似した土によって構成されている。壁面に焼けた状況は確認できない。

1SX046（Fig.24）

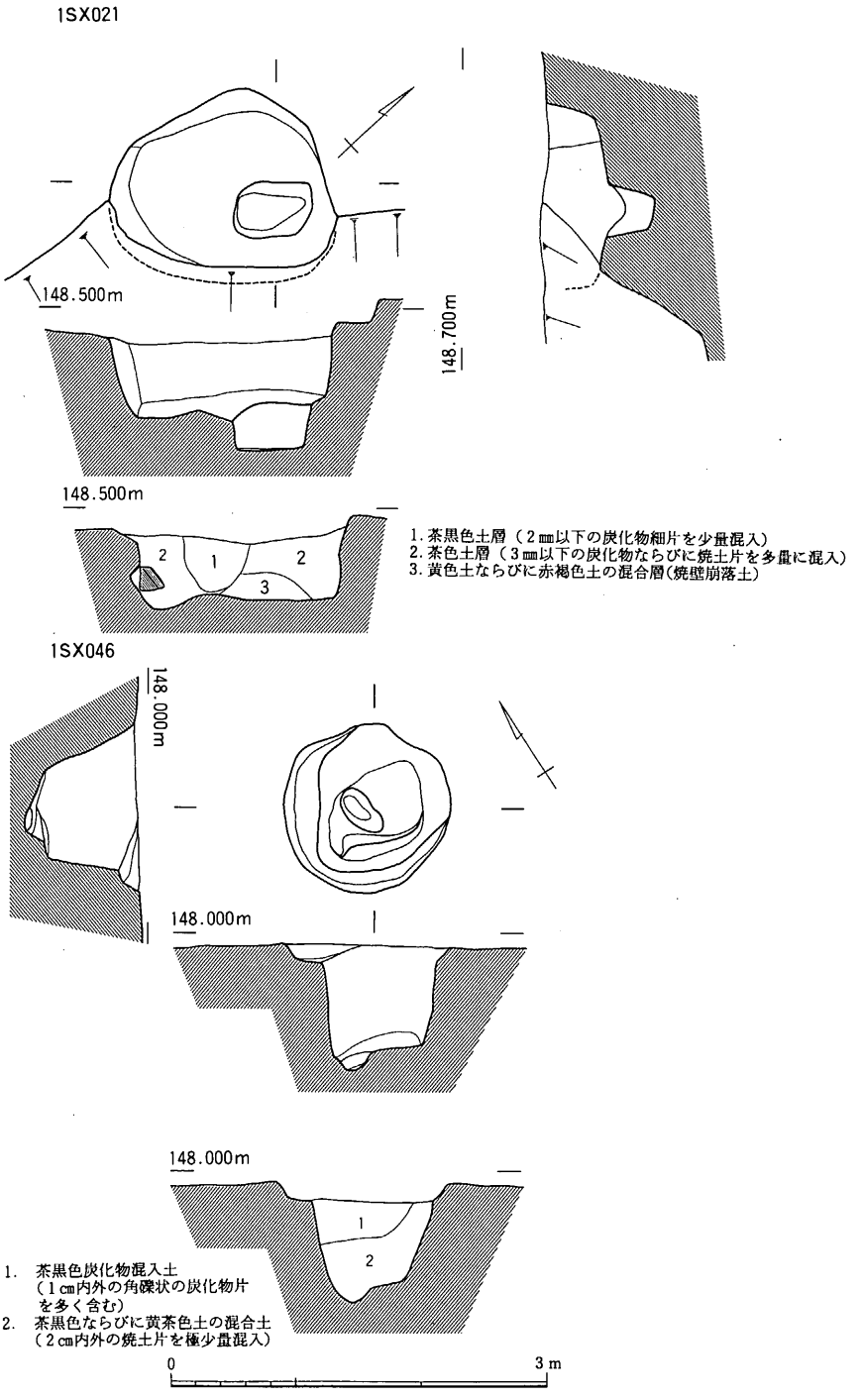


Fig.24　1SX015付帯遺構実測図（S＝1/60）

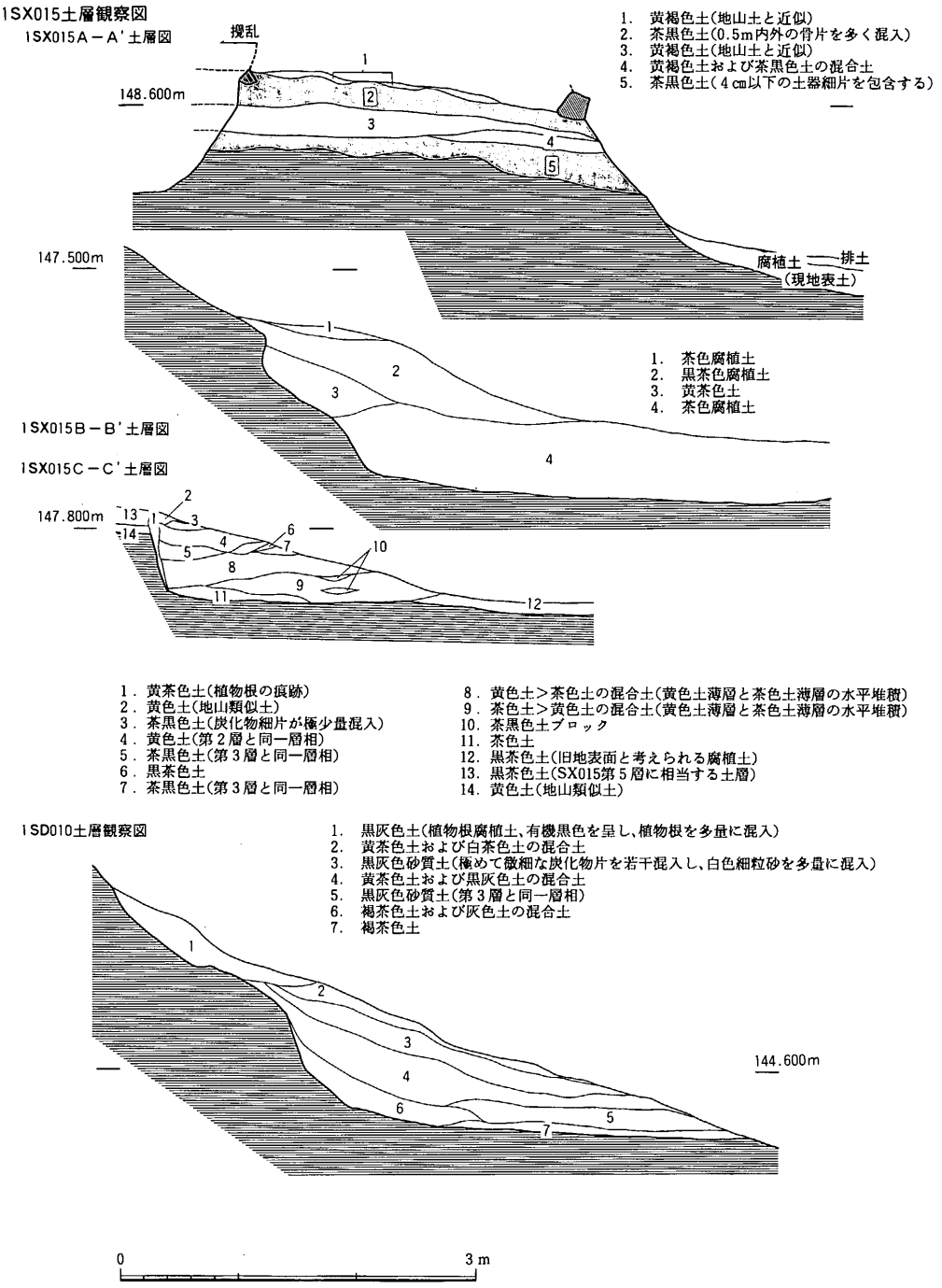


Fig.25 土 層 観 察 図 (S＝1/60)

長径0.67m、短径0.67m、深さ0.41mを測る不整円形を呈する遺構の中に、長径0.21m、短径0.11m、深さ0.05mを測る楕円径の小穴が掘り込まれている。堆積土は2層によって構成されており、いづれも炭化物を混入している。

(2) 蔵骨器埋納遺構

1ST005 (Fig.26)

丘陵頂部からやや下がった所に、長軸0.56m、短軸0.52m、深さ0.17m（残存）をそれぞれ測り、ほぼ円形を呈する土壙に須恵質土器の甕 (Fig.30-12) を正位置に埋納していた。須恵質土器の内部には、炭化物および骨片が多数埋納されており、火葬に伴なう蔵骨器と考えられる。

(3) 焼　土　壙

1SX002 (Fig.26)

長軸0.54m、短軸0.45m、深さ0.13mをそれぞれ測り、やや不整円形の土壙を二つ連ねた形状を呈している。堆積土は、炭化物を含む土によって構成されている。また壁面の焼けた状況は、検出面より下位に約1/4の壁面が焼けているのみで床面まで達していなかった。

1SX004 (Fig.26)

長軸0.53m、短軸0.25m、深さ0.21mをそれぞれ測り、不整楕円形を呈している。堆積土は細かく分層できるものの、地山流入土および炭化物混入土に大きく区分できる。壁面における焼けた状況は、検出面より下位に約半分が焼けており、これもやはり床面まで達していなかった。

1SX006・007・008 (Fig.26)

3つの焼土壙が横に並列した状況を呈している。それぞれの法量は、SX006は長軸0.46m、短軸0.28m、深さ0.16mを測り、隅丸長方形を呈している。SX007は長軸0.51m、短軸0.32m、深さ0.16mを測る。SX008は長軸0.42m、短軸0.27m、深さ0.11mをそれぞれ測り、不整隅丸長方形を呈している。堆積土はいずれも地山流入土および炭化物混入土によって構成されており、壁面の焼け状況も遺構平面形の山側の約半分が赤変している。いずれも床面までの変質は認められない。なお近接して3基が並列しており、3基がまとまって機能していたとも考えられる。

1SX011 (Fig.27)

長軸0.65m、短軸0.50m、深さ0.23mをそれぞれ測り、やや鍵穴形の形状を呈している。堆積土は、地山からの流入土と炭化物を多く含む堆積土からなり、炭化物を多く含む層が下位に堆積している。土壙の壁面は、加熱によって赤変しており、攪乱によって削除された箇所を除いて遺構壁面の全面に確認できる。ただし床面付近には焼け面は形成されていない。

1SX012 (Fig.27)

長軸1.17m、短軸0.65m、深さ0.27mを測り、不整円形の土壙が二つ連結した形状を呈している。堆積土は幾層かに分層可能であるが、大きく分けて地山からの流入土と炭化物を多く混入する堆積土の二つにまとめることができる。焼け面は、遺構壁面の三ヵ所に確認できいずれも床面

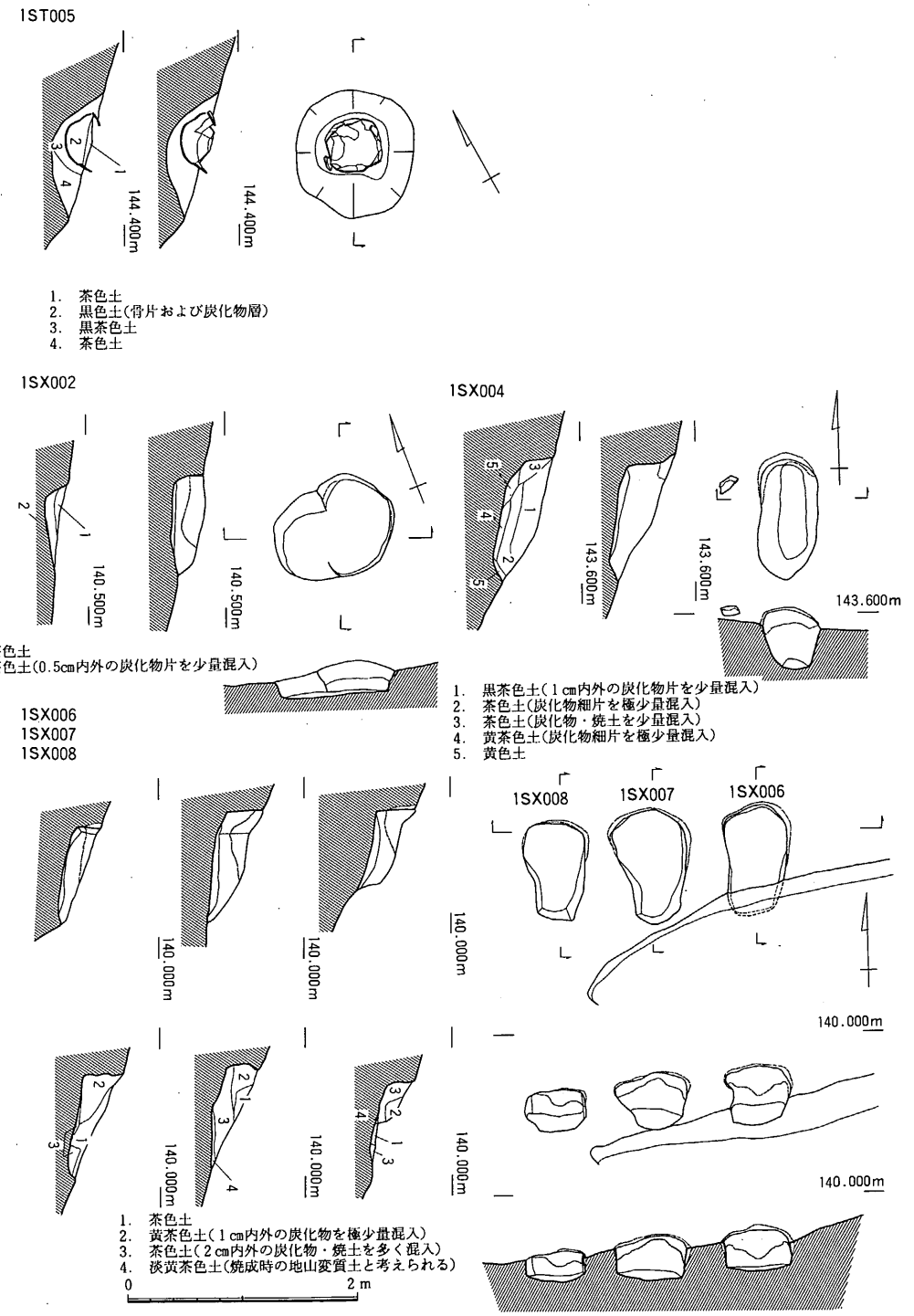


Fig.26 焼土壙実測図(1) (S=1/60)

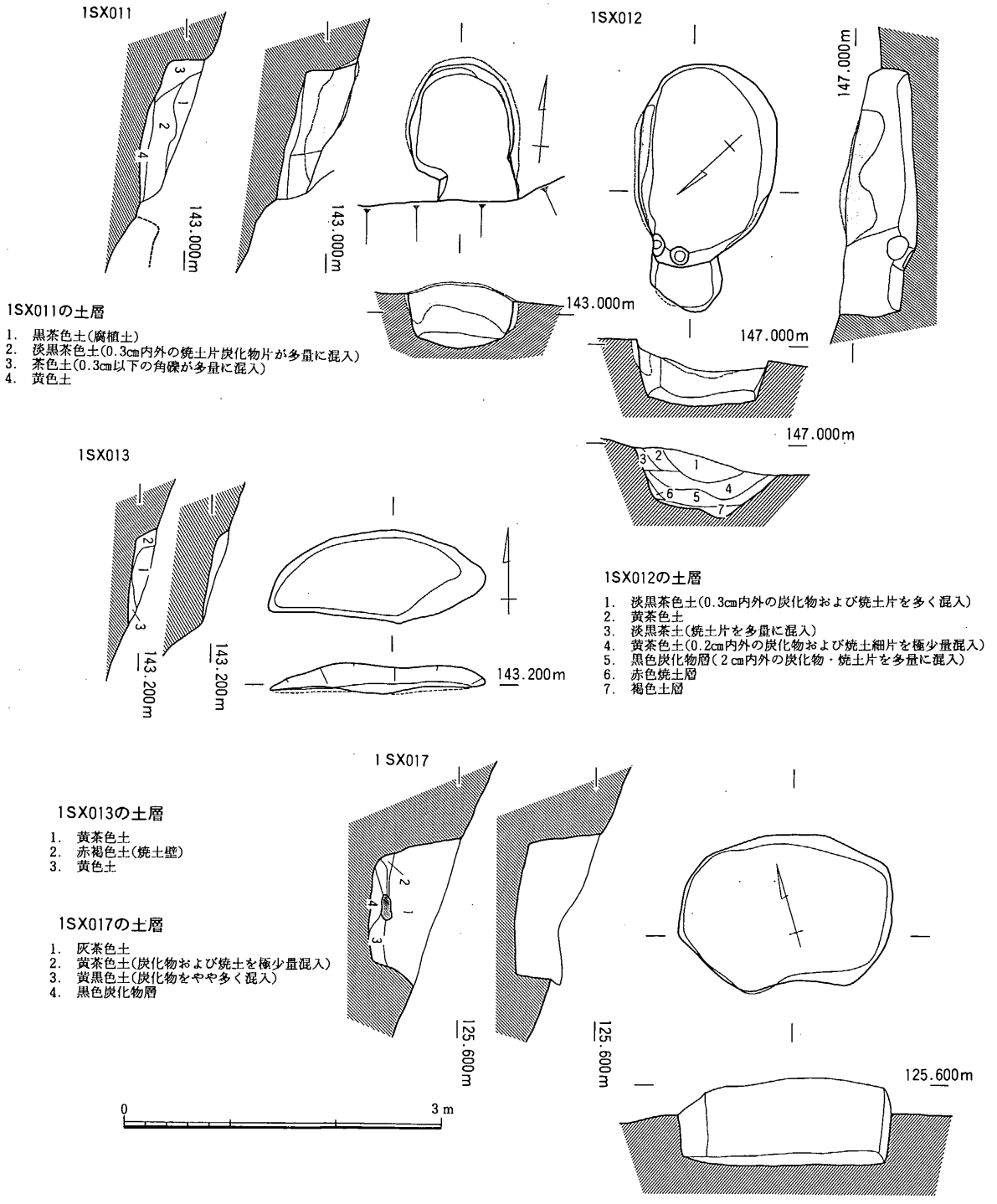


Fig.27　焼土壙実測図(2)（S＝1/60）

まで達していない。

1SX013（Fig.27）

長軸1.04m、短軸0.45m、深さ0.12mを測り、不整楕円形を呈している。堆積土は地山からの流入土と焼土および炭化物を多く含んだ堆積土によって構成されているものの、壁面における焼け面は確認できず、焼土壙と断定するには躊躇する。

1SX017（Fig.27）

長軸1.01m、短軸0.72m、深さ0.35mを測り、不整隅丸長方形を呈している。堆積土は地山からの流入土と炭化物を多く含んだ堆積土によって構成されており、地山流入土の下位に焼けた石が堆積していた。壁面において焼けた状況は確認できなかった。

1SX018（Fig.28）

長軸1.23m、短軸0.97m、深さ0.46mを測り、不整隅丸長方形を呈している。堆積土は上部に遺構が存在していたため不明確であったが、細かく分層できるものの、やはり大きく分けて地山流入土および炭化物混入土に分けられる。壁面の焼け状況は、遺構平面形状の約半分が焼けており、床面までは達していなかった。床面には深さ10cm前後の小穴が多数確認できる。

1SX019（Fig.28）

長軸0.72（+0.48）m、短軸0.44m、深さ0.25mを測り、浅目の凹み状の遺構が焼土壙に付属している。形状は隅丸長方形であり、壁面が僅かに焼けている。堆積土は、幾層かに分層でき地山流入土および炭化物を多く含む土によって構成されている。

1SX023（Fig.28）

長軸0.91m、短軸0.51m、深さ0.27mを測り、不整形に崩れた形状を呈している。壁面の焼けた状況はあまり確認できず、一部に僅かながら焼けた痕跡を確認したにすぎない。堆積土は僅かながら炭化物を含む土によって構成される。本遺構に関しては、地山流入土および炭化物混入土の差異は明確ではない。

1SX024（Fig.29）

長軸0.74m、短軸0.5～0.17m、深さ0.18mを測り、斜面上位が広く、斜面下位が狭くなる形状を呈している。壁面の焼けた状況は、遺構平面形状の半分が焼けており、斜面上位の方が焼けている。なお床面までは焼けていない。

1SX028（Fig.29）

長軸0.5m、短軸0.31m、深さ0.22mを測り、不整楕円形を呈している。等高線に平行に形成された溝状の遺構（1SD010）に切られる形で残存しており、斜面下位の部分は溝形成時に壊されたと考えられる。焼け面は斜面上位にのみ僅かに残存しており、やはり他の焼土壙同様、床面までは達していない。

1SX044（Fig.29）

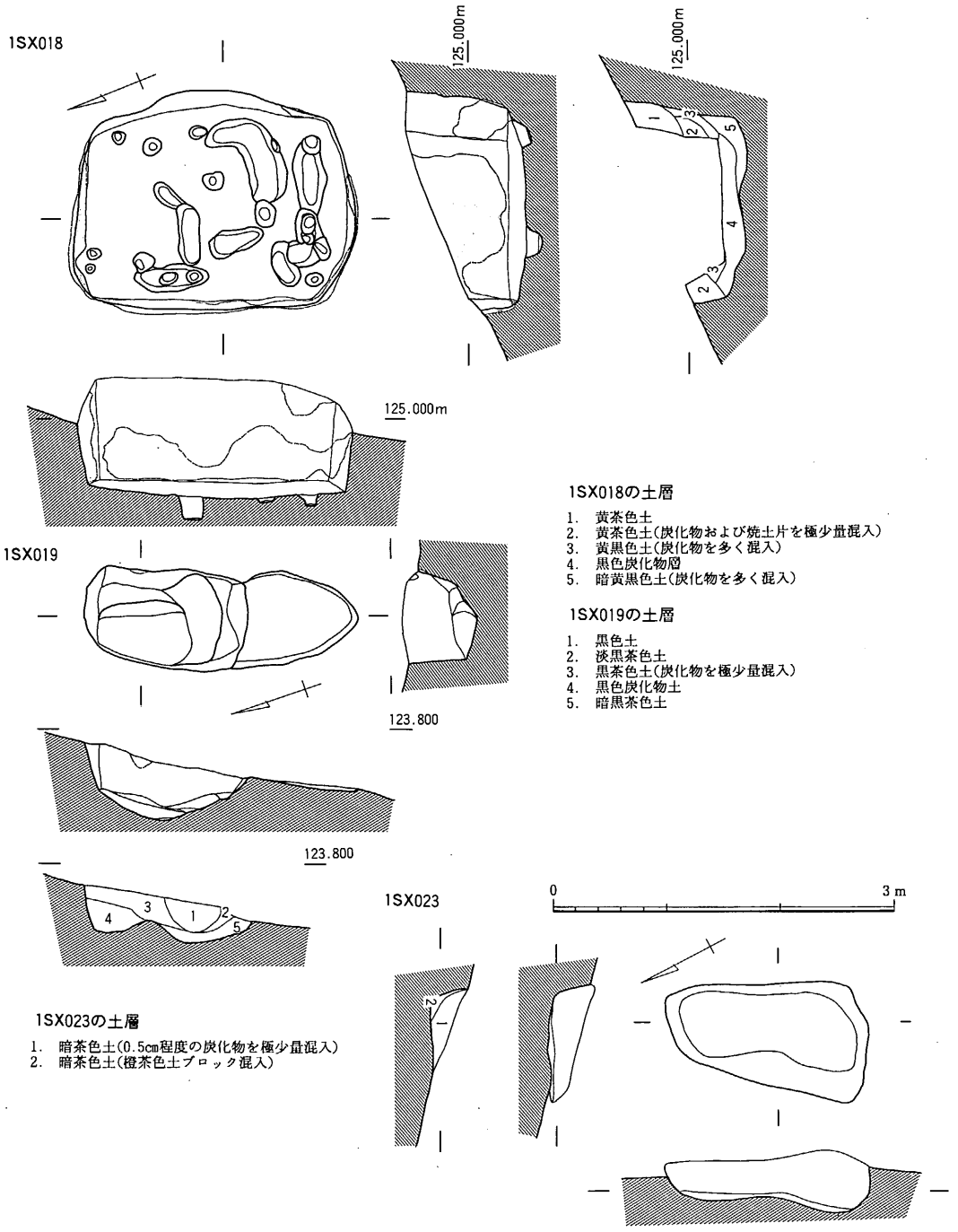


Fig.28　焼土壙実測図(3)（S＝1/60)

長軸0.99m、短軸0.58m、深さ0.295mを測り、やや崩れた形状を示している。壁面における焼け面は、斜面上位から遺構の半分を包み込むように残存しており、床面までの焼けた状況は確認できなかった。なお壁面の焼け状況から判断して、一部削り取られたような状況が看取でき、遺構の機能が終わった後に削られたと考えられる。

(4) 溝 状 遺 構

1SD010 (Fig.19)

長さ約10mを測り、斜面を段造成する形で形成されている。この遺構には上部からの自然堆積によって覆われており、徐々に埋没したものと考えられる。この遺構堆積層である1層を除去した段階で1SX028を検出した。また溝の最下層である第7層除去時に土師器・坏b (Fig.30-1) が出土している。

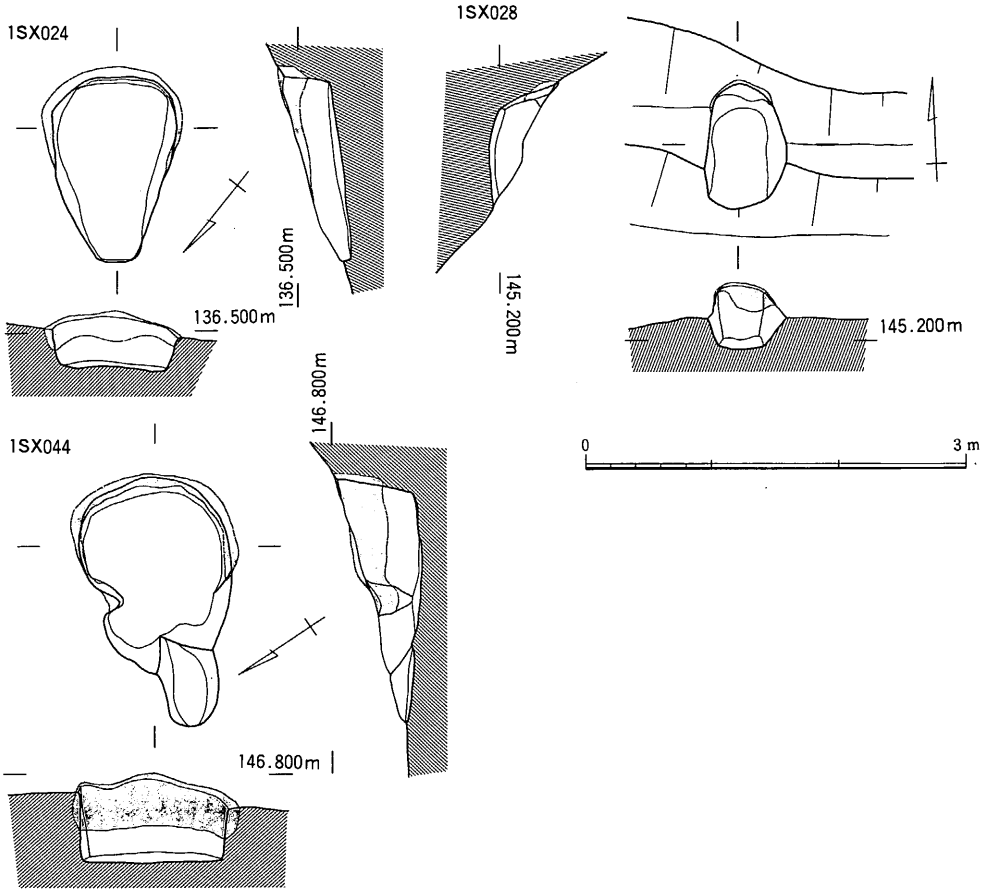


Fig.29 焼土壙実測図(4) (S=1/60)

3) 遺 物 各 説

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・各種陶磁器・銭貨があり、出土量は少ないものの高雄山の土地利用の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができた。

1SD010（Fig.30）

土師器

坏ｂ（１） 底部のみの破片で、残存器高2.4cm・底径7.0cmを測り、内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。底部外面の処理は、回転糸切りによって処理されており、色調は明赤褐色を呈している。

1SX015（Fig.30）

陶 器

壺Ⅳ－１類（２） 口縁部のみの破片で、推定口径6.65cmを測り、内面は明赤褐色、外面は茶灰色を呈しており、内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。同様の破片資料が、1SX015・１層、1SX021より出土しており、何らかの埋納遺構が1SX015に所在した可能性がある。

土師器

坏ａ（３・４） ３は、口縁部のみの破片資料であり、推定口径11.9cm・残存器高2.7cmをそれぞれ測る。内外面ともにヨコナデによって仕上げられており、内外面ともに明白黄色を呈している。

４は、推定口径13.1cm・器高2.45cm・推定底径9.35cmを測り、３同様にヨコナデによって内外面を仕上げている。また底部外面の処理は、回転糸切りによって処理されており、内外面ともに明赤褐色を呈している。

1SX016（Fig.30）

陶 器

甕（５） 口縁端部を上方へ立ち上げる形態を有するもので、推定口径21.0cm、残存器高2.3cmを測り、内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。また色調は、内外面ともに明赤褐色を呈しており、内面には自然釉が付着している。胎土は炭化物粒を極少量含み、ビスケット状の質状況を示している。

1SX028（Fig.30）

染付磁器

椀（６） 体部の破片で、外面に回転ヘラ削りの痕跡が残る。釉調は、やや青味がかった透明の乳白色を呈する釉で、微粒子状の黒色物質を極少量混入する白色の素地に掛けている。内面には、やや暗い青色の呉須を使って文様が描かれているが、どのような文様かは判断できない。呉須にややにじみが見られる。

1SX032（Fig.30）

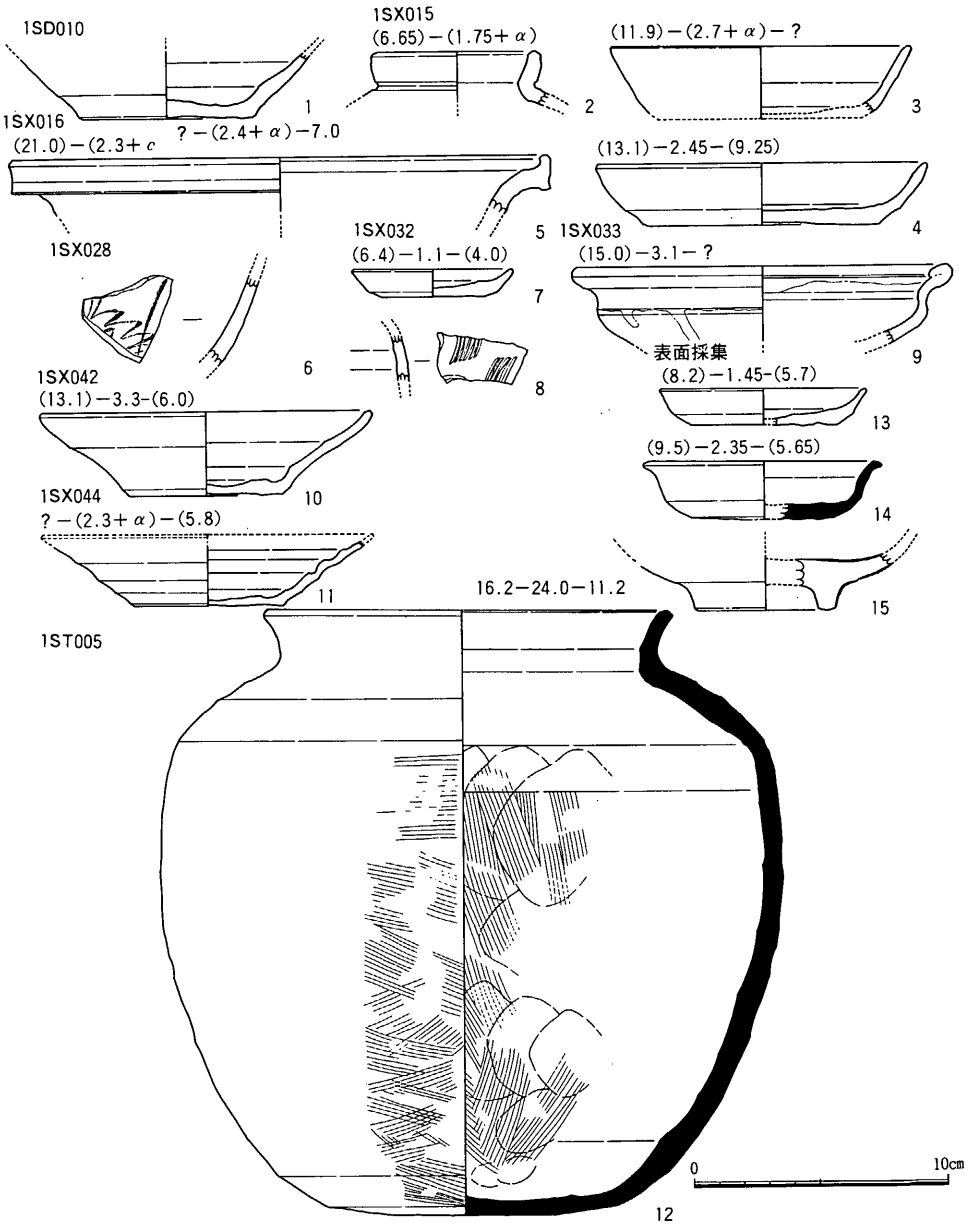


Fig.30　石穴遺跡出土遺物実測図(1)（S＝1/3）

土師器

小皿ａ（７）　推定口径6.4cm、器高1.1cm、推定底径4.0cmを測る。内外面ともにヨコナデによって成形されており、底部内面には不定方向のナデが為されている。底部外面には板状の圧痕が残るのみで、処理の方法に関しては不明確である。色調は、内外面ともに明白茶褐色を呈している。

青白磁

梅瓶？（８）　小破片のため器種は不明確だが、外面に櫛状のものによる文様が描かれている。釉調は、淡青白色で細かい貫入がある。素地は灰白色を呈し、気泡を含んでいる。

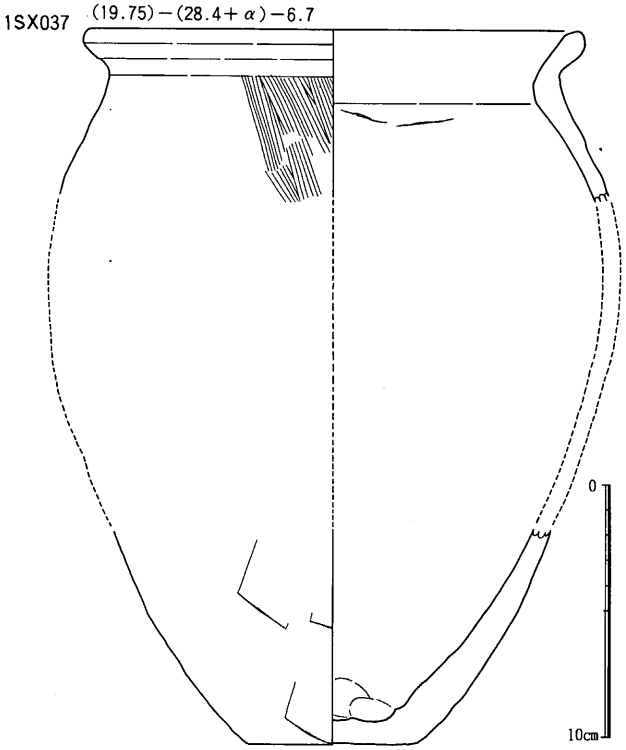


Fig.31　石穴遺跡出土遺物実測図(2)（S＝1/3）

1SX044

土師器

坏ｂ（11）　口縁部を欠損するもので、残存器高2.3cm、推定底径5.8cmを測る。内外面ともにヨコナデによって仕上げられており、上方からの外圧による凹凸が内面に顕著に見られる。また底部外面の処理は回転糸切りによって為されており、板状の圧痕が見られる。色調は、内外面ともに明赤褐色を呈している。

1ST005

須恵器

甕（12）　口縁部を欠損するもので、残存器高23.2cm、底径11.2cmを測る。内面には当て具によるとみられる凹凸痕跡が残り、刷毛によって当て具の痕跡が丁寧に消されている。外面は、刷毛によって仕上げられている。色調は内外面ともに暗灰色を呈しており、内面の体部中位から上位にかけて褐色の物質が付着している。やや軟質の焼きで、還元がやや不良である。

1SX037（Fig.31）

弥生土器

甕（1）　推定口径19.75cm、推定器高28.4cm、底径6.7cmを測り、内面はナデ、外面は縦方向の刷毛によって仕上げられている。また口縁部はヨコナデによって仕上げられており、体部内面に接合の痕跡が残存している。色調は、内面・暗黄褐色、外面・暗赤褐色を呈する。

1SX033（Fig.30）

陶　器

椀（9）　口縁端部を折り曲げ肥厚させるもので、推定口径15.0cm、残存器高3.1cmを測る。黄白色から黄緑色の釉を口縁部にかけ、素地色調は明赤褐色で精選された素地を有している。内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。

1SX042（Fig.30）

土師器

坏b（10）　推定口径13.1cm、器高3.3cm、推定底径6.0cmを測り、内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。底部外面の処理は、回転糸切りによって処理されている。色調は、内外面ともに明赤褐色を呈している。

表面採集（Fig.30）

土師器

小皿a（13）　推定口径8.2cm、器高1.45cm、推定底径5.7cmをそれぞれ測り、内外面ともにヨコナデによって成形し、底部内面を不定方向のナデによって仕上げている。底部外面は回転糸切りによって処理し、板状圧痕が残存している。内外面ともに色調は、暗茶褐色を呈している。

須恵器

小坏a（14）　推定口径9.5cm、器高2.35cm、推定底径5.65cmをそれぞれ測る。内外面ともにヨコナデによって成形し、底部内面に不定方向のナデの痕跡が残る。色調は内外面ともに黒青灰色から白青灰色を呈し、還元度も良好である。

青　磁

椀（15）　高台のみの破片で、淡青緑色で細かい貫入のある釉調を示し、内面および高台外面までかけている。外面は回転ヘラ削りの痕跡が確認でき、細かい黒色の鉱物を極少量混入するものの精選された灰白色の素地を有している。

4）小　　結

「太宰府旧跡全図・北図」中に記載がある「高尾山城」に係わる調査ということで、発掘調査を実施したが、明確な形での山城に係わると考えられる遺構は確認できなかった。強いて上げるならば、石1SD010が山城に関係すると考えられなくもないが、可能性の段階であり、「高尾山城」に係わる地形踏査の結果からある程度の「縄張り」の遺構は明らかであるものの、今後高雄山の調査が進展することで明らかになってゆくものと考えられる。

今次調査によって検出された遺構・遺物に関して特筆すべきものとして、火葬施設と考えられる遺構ならびに、付帯する可能性が高い方形の壇状遺構がある。火葬施設と考えられる焼土壙は、宮ノ本遺跡をはじめ丘陵ないしは山間部を発掘調査すると、必ずといってよいほど検出される遺構であり、遺構内には床面付近に炭化物が堆積し、壁面の上部が過度の焼成による硬化現象を起こしているという共通点があるものの、遺構内から遺物が出土せず、また数基群集する程度で性格を考えるための材料が極めて薄い遺構である。考古事象のみからの判断は不可能であったため、自然科学分析を行なったものの「洗骨」による再葬墓である可能性を指摘されるにとどまっており、火葬施設とするには、まだ時期尚早の感が否めない。しかし、付帯すると考えられる方形壇状の遺構より、骨細片が混入する土層が数層確認され、また合わせて炭化物も検出されていることを考えると、少なくとも今次調査によって検出できた、これらの焼土壙が火葬のための施設であると考えられる蓋然性が高いともいえよう。また、方形壇状遺構（石1SX015）の性格については、遺構南側に造り出しの段状の遺構が形成されており、立地についても丘陵末端の最頂部に位置し、太宰府が一望できる好位置にある。合わせて攪乱に伴なって出土したものであるが、遺構中央部より渡来銭が数枚出土していること等から、骨細片に係わる何らかの祭祀行為が為された場と考えられ、あらためて周辺に散在している焼土壙の性格が、「焼き場（火葬施設）」である可能性が高いことを示唆している。しかし各地で検出されている焼土壙が全て火葬施設であると断定しているのではなく、その立地や出土する遺物、また遺構の形状等様々な要素を含めた検討が必要であると考える。いずれにしても、今次調査によって検出された遺構が、中世太宰府における葬送儀礼の一形態である可能性が高いと考えられる。　　（中島恒次郎）

6. 今王(いまおう)遺跡　第２次調査

1) 調査に至る経過

平成３年４月に八尋測量事務所から宅地造成の届け出が出され、当該地区における文化財の有無について照会があった。この地域は周知の遺跡（今王遺跡）の範囲に入るため同年７月に試掘調査を実施し、部分的ではあるが遺構の残存が認められたため、本調査実施について八尋測量事務所と太宰府市教育委員会のあいだでその日程、費用等について協議を行ない、平成３年度中で調査を行なうことで合意した。

遺跡は昭和56年度に太宰府市教育委員会が発掘調査を実施した今王古墳群第２号墳に隣接する位置にあたり、この古墳の調査が今王遺跡第１次調査となるところから今次の調査を第２次調査として扱うこととした。

調査地は、太宰府市高雄４丁目4165－１他に所在し、現地での発掘調査は平成４年２月７日から15日まで行ない、調査面積は約400㎡である。試掘調査は山本信夫、本調査は狭川真一が担当した。

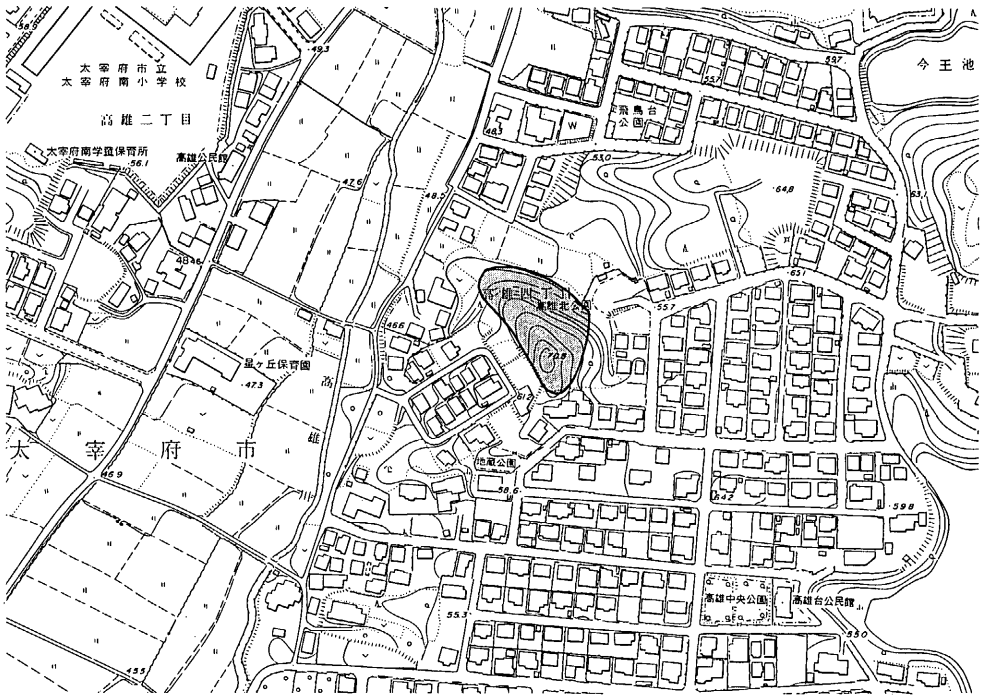


Fig.32　今王遺跡第２次調査位置図（S＝1/5000）

なお、調査地の地形を含めた測量図作成は、機械素図段階までをアジア航測株式会社福岡支店に委託した。清絵および検査は調査担当者が行なった。

2) 遺 構 各 説

調査地は、宝満山と太宰府の平野の間に南北に横たわる標高50～80mの低丘陵の南半部で、現在の高雄の集落を臨み西北へ瘤状に突出した尾根上に位置する。尾根の最頂部は標高70m程で現状は東および南側を宅地造成によって失っている。この宅地造成された丘陵は、弥生時代の甕棺群で知られる吉ヶ浦遺跡である。

遺構は尾根の頂部からやや下った西側斜面上位に展開しており、古墳時代の土壙5基を検出した。調査区の下半部は大きな段落ちとなっており、後世に扱われた可能性がある。また、北側斜面中位に平坦部があり、遺構の存在する可能性があったためトレンチを設定したが、顕著な遺構は検出されなかった。

(1) 土　　壙 (Fig. 33)

2SK001

斜面中最も上位に位置する。長さ1.31m、幅1.00m、深さ0.16mを測り、形状は隅丸長方形を呈する。土壙埋土上位の中央付近に炭化物の集中する部分があるほかは淡茶白色土の単一層である。出土遺物はなかった。

2SK002

調査区中位に位置し、一部は調査区外にのびている。長さ2.40m以上、幅1.30m、深さ0.18mを測り、溝状の長い形状を呈している。埋土は淡茶白色土の単一層で、須恵器、土師器の破片が若干量出土した。

2SK003

調査区下位に位置し、伐採時とみられる重機による攪乱で大半を失っている。長さ3.0m、幅0.6m、深さ0.55mを測り、埋土は暗茶灰色土で、若干の須恵器、土師器の破片を含んでいた。2SK004と同一の遺構であった可能性がある。

2SK004

調査区下位に位置し、伐採時とみられる重機による攪乱で大半を失っている。長さ2.1m、幅0.9m、深さ0.55mを測り、埋土は暗茶灰色土で、若干の須恵器、土師器の破片を含んでいた。2SK003と同一の遺構であった可能性があり、本来は長さ約5.0m、幅約2.5m以上の大きな竪穴状遺構であった可能性が強い。

2SK006

調査区上位に位置し、別の土壙に切られている。長さ2.00m、幅1.65m、深さ0.23mで不整方形を呈する。埋土は暗茶灰色で、須恵器、土師器の小片が含まれていた。

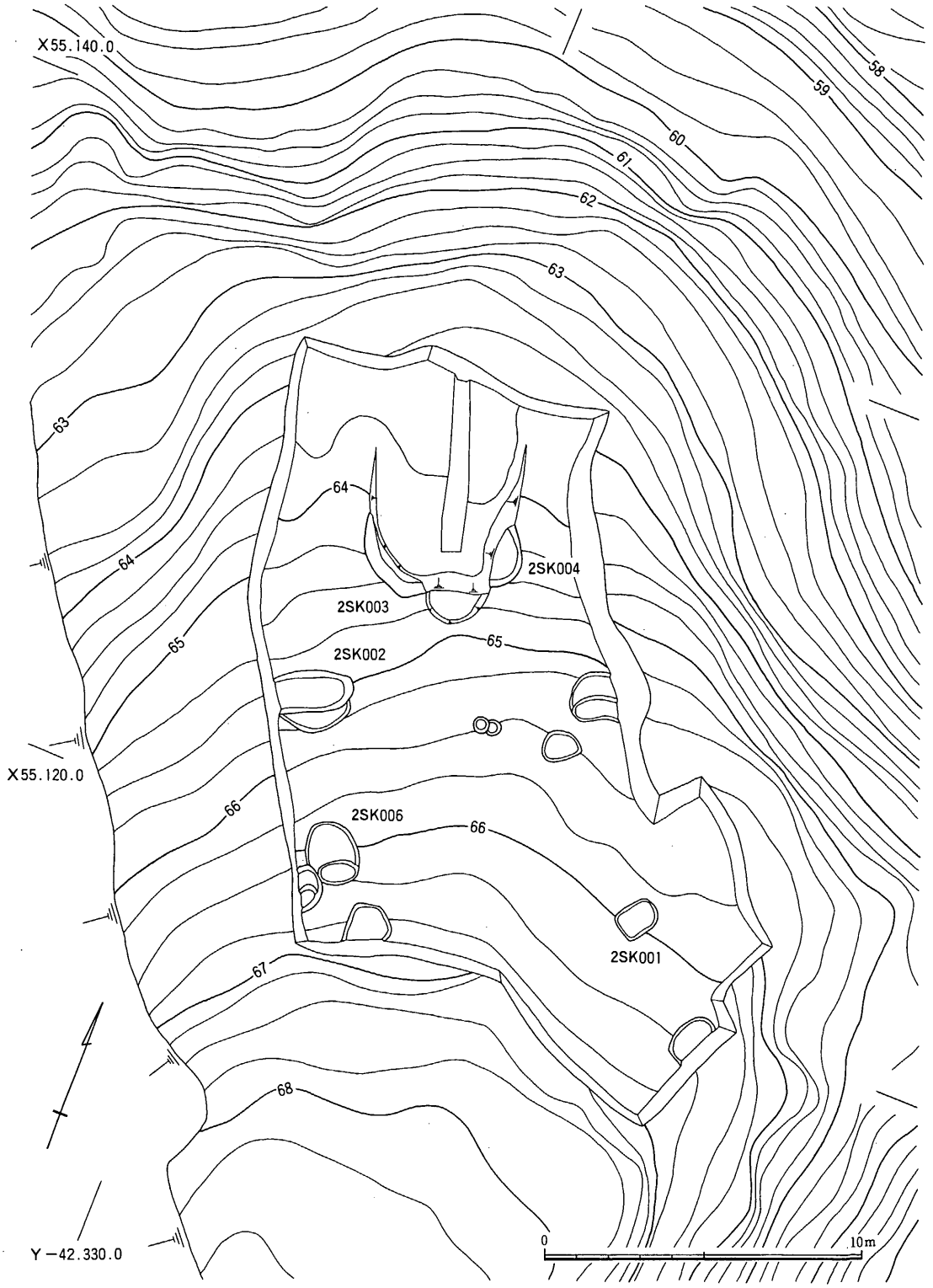


Fig.33　今王遺物第２次調査遺構配置図（1：200）

(2) その他の遺構

調査区内には上記した土壙と同じ埋土を有する淡茶白色土や暗茶灰色土を埋土とする溝状の遺構やピットが展開するが、いずれも浅く出土遺物も無いため、年代や性格を決定できなかった。

（狭川真一）

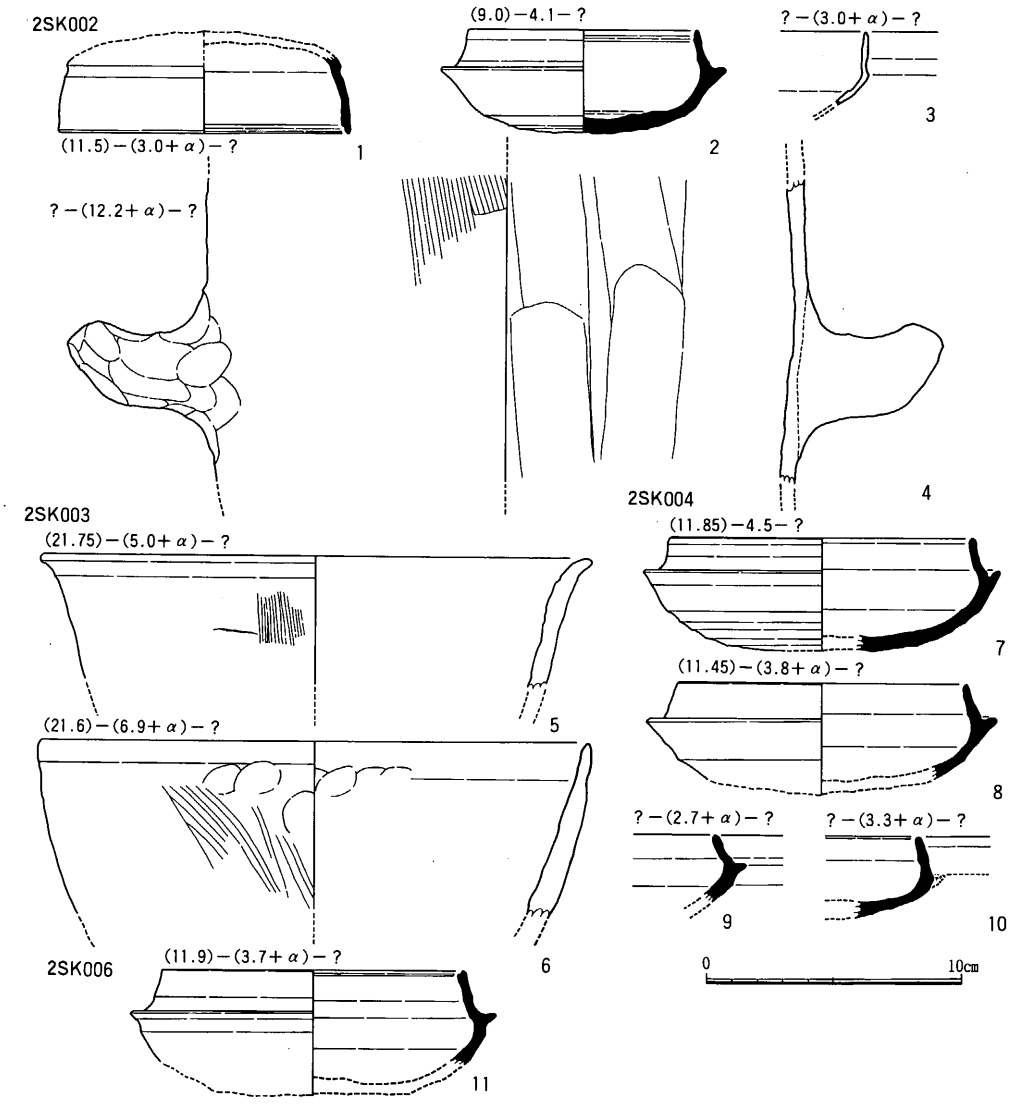


Fig.34　今王遺跡出土遺物実測図（S＝1/3）

3) 遺 物 各 説

古墳時代の遺物を中心として、少量であるが弥生時代の遺物が出土している。

2SK002（Fig.34）

須恵器

蓋（1） 推定口径11.5cm、器高3.0cmを測り、内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。口縁端部内面を内側に凹めた形状を呈しており、全体的にやや丸みをもった形状を示す。色調は、内面・淡黄白灰色、外面・淡青灰色を呈している。焼成ならびに還元の度合は良好である。

坏（2） 推定口径9.0cm、器高4.1cmを測り、やや丸い体部形態を有し、口縁端部内面に凹線を巡らせている。底部外面のみ回転ヘラ削りによって仕上げ、他の部分はヨコナデによって仕上げられている。色調は、内面および口縁部外面は淡黄白灰色、外面は淡青白灰色を呈している。また焼成および還元の度合は良好である。

土師器

坏（3） 小破片資料で、器表面の剝離が著しいため、調整痕跡は観察できない。色調は内外面ともに明赤褐色で、焼成は不良。

甑（4）大型の甑で、太く重みのある取っ手を貼り付けている。内面は縦方向のヘラ削り、外面は縦方向の刷毛によって仕上げられている。色調は内外面ともに明赤褐色を呈し、外面が一部黒色に変質している。焼成は不良。

2SK003（Fig.34）

土師器

甕（5・6） 5は直立気味に立ち上がる体部形態を有し、口縁部をやや外反する。内面は剝離が著しく調整は不明、外面は縦方向の刷毛によって調整されている。色調は内外面ともに明赤褐色を呈している。推定口径21.75cm、残存器高5.0cmを測る。6は、推定口径21.6cm、残存器高6.9cmを測り、やや内湾するような体部形態を有している。器表面の状態が著しく悪いため調整痕跡は不明確であるが、外面にやや粗目の刷毛によって仕上げた痕跡ならびに、内外面に指頭圧痕をとどめている。色調は内外面ともに明赤褐色を呈している。

2SK004（Fig.34）

須恵器

坏（7～10） いづれも丸い口縁端部形態を有するもので、底部外面を回転ヘラ削りによって仕上げ、他の部位はヨコナデによって仕上げている。

Tab 1 出土須恵器法量

	口 径	器 高	底 径
7	(11.85)	4.5	—
8	(11.45)	(3.8)	—
9	—	(2.7)	—
10	—	(3.3)	—

2SK006（Fig.34）

須恵器

坏（11）　口縁端部に凹線を巡らすもので内外面ともにヨコナデによって仕上げている。色調は内面灰白色、外面淡青灰色を呈し、焼成および還元の度合ともに良好。　（中島恒次郎）

4）小　　結

検出された遺構の時期は、出土遺物から概ね6世紀前半頃と判断される。現状では旧地形を知り得ないのでこの丘陵の背後がいかなる状況であったのか分からないが、隣接する尾根上には6世紀前半から後半まで開口していた横穴式石室を有する今王2号墳が過去に調査されている。また今次の調査地の西南裾部には今王1号墳（未調査）も知られており、この丘陵一帯が6世紀代の古墳群であったことがわかる。このことから今回の調査地もこの古墳群の一角に位置するものと見られ、こうした古墳群との関連で遺構を理解してゆく必要があろう。今王2号墳は消滅してしまったが、その背後の丘陵は一部ながら現存しており、将来の調査の機会を待って一連の遺跡として理解し、追及してゆく必要があろう。　（狭川真一）

Ⅳ. おわりに

古都大宰府の調査のみならず、近年周辺地域（佐野地区土地区画整理事業周辺等）の調査が進展し、大宰府を取り巻く歴史的な環境というものが次第に明かになりつつある。今回報告した諸遺跡によって、従来注目されていた吉ヶ浦遺跡をはじめ、高雄山城跡など弥生時代から中世に至る高雄地域の歴史の一端が明かになった。しかし、高雄地域の大半が宅地造成という開発の波に既に呑まれており、文化財の存在を想定できる地域は大半が失われているといっても過言ではない。そのような中において実施された調査成果は、高雄地域の歴史を考えるうえにおいて、貴重な資料を提供したことになる。

（付記）

暑い日も寒い日もただひたすらに発掘調査を共に行ない、今回報告した石穴遺跡第１次調査をはじめ、数多くの太宰府市の文化財を、破壊から救う手助けをしてくださった斉藤徳美氏が、平成５年死去された。技師一同、心から御冥福をお祈りいたします。

付　　編

1. 吉ヶ浦遺跡出土人骨鑑定

2. 石穴遺跡における残存脂肪分析

3. 高　雄　山　城　跡

4. 方形壇状遺構の性格について

1. 吉ヶ浦遺跡出土の人骨鑑定

永 井 昌 文（九州大学名誉教授）

(1) K１人骨（１号甕棺出土人骨）

(a) 出 土 状 態

接口式甕棺に埋封されて、頭骨は上甕から、頸椎以下その他は下甕から出土した。姿勢は膝を曲げた仰臥屈葬である。赤色顔料の付着はない。

(b) 保 存 状 態

頭骨は後半を欠失し、下顎も下顎角部が無い。軀幹の骨は頸椎の少量と他は四肢主要長骨12本のうち８本の骨体部が残存し、そのうち３本が右側で５本は左側である。やや左側の残りが良い。

残存歯式は下記の通りである。

８７×５×３２１	１×３×××○×
×××××××××	×××××××××

×……歯槽閉鎖 ○……空歯槽
●……遊離歯

(c) 推定年齢 熟年

下顎は歯根周囲症があったらしく歯身は全て脱落し、歯槽萎縮が強い。それも病変は後歯より近心方向に進行したらしく、上顎臼歯の咬耗はMartinの１度であるのに前歯は２度である。上顎臼歯は若くして対向歯を失い磨耗が少ないのであろう。一方、冠状縫合の癒合は進んでいるので両者を勘案して熟年とした。

(d) 推定性別 男性

眉弓、乳称突起の発達、それに眼窩上縁の厚みなど、いずれの観点からも男性であることは疑いを容れない。大腿骨の太さもこれを裏付けている。

(e) そ の 他

顔貌は眼窩高く、鼻根の陥凹は少なく、顔高は高く北部九州弥生人の特徴をよく具えている。なお大腿骨骨体上部は比較的に扁平性が強いが、脛骨骨体中央のそれは著しくない。また歯の欠如は風習的抜歯によるものか疑わしい。

(2) K３人骨（３号甕棺）

(a) 保 存 状 態

１個を除き他は全て歯冠のみの遊離歯８個と、細片となった少量の四肢長骨片があり、これには２・３個の頭蓋骨片も含まれている。

歯 式

―― ２ １	――
――	２ ３ ４　６ ７ ８

(b) 推定年齢　成年

歯の咬耗は前歯・後歯ともにMartinの２度である。他に推定の根拠が無いが、成年と見てよいであろう。

(c) 推定性別　不明

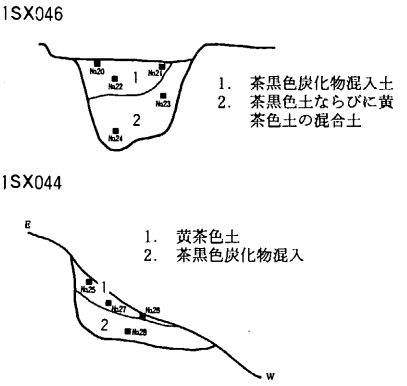
これだけの試料からは全く推定困難である。

2. 石穴遺跡における残存脂肪分析

中野寛子・明瀬雅子・長田正宏（㈱ズコーシャ）
中野益男（帯広畜産大学助教授）

(1) 土 壌 試 料（第1図）

石穴遺跡について出土した土壙内上層部から試料No.20およびNo.21、土壙内中層部上よりから試料No.22、同じ中層部から試料No.23、土壙内下層部から試料No.24を採取した。対照土壌試料の試料No.29、No.30およびNo.31は石穴遺跡内の別の地山から採取した。



第1図 土壙試料採集土層

(2) 残存脂肪の抽出

土壌試料74～1059ｇに3倍量のクロロホルム－メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム－メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

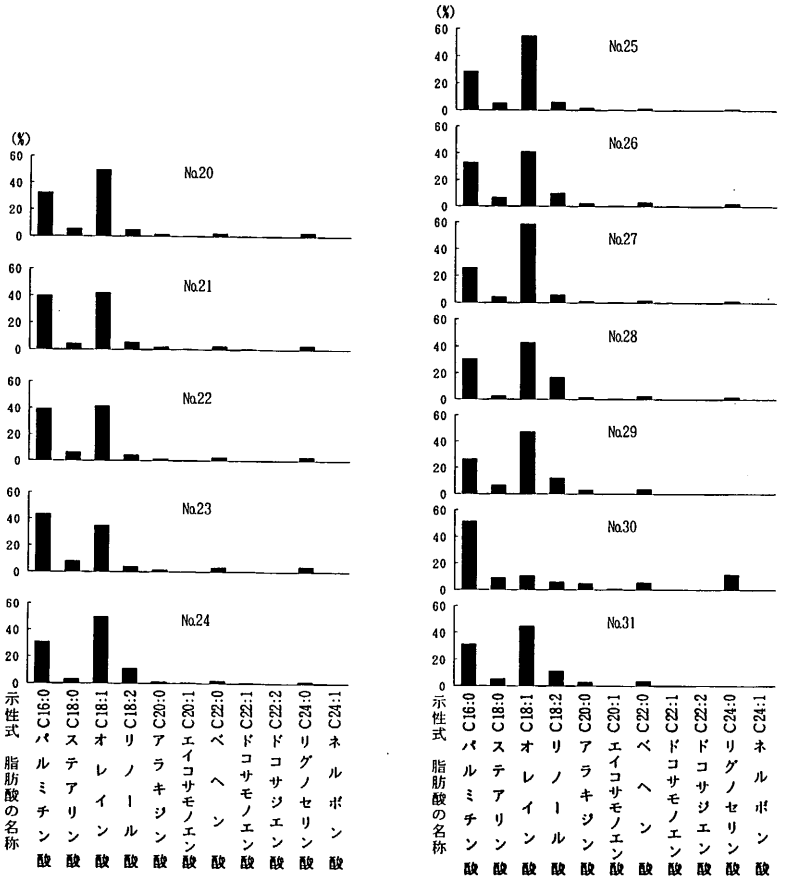
残存脂肪の抽出量を第2図に示す。抽出率は0.0066～0.0293％で、平均すると0.0119％であった。この結果は、検出土壙を土壙墓かどうか判定した北海道納内3遺跡の土壌試料の平均抽出率0.003％、宮城県摺萩遺跡の土壌試料の0.0030％、福島県堂後遺跡の土壌試料の0.0025％、北海道美沢3遺跡の土壌試料の0.0016％、兵庫県寺田遺跡の土壌試料の0.0016％、検出遺構を甕棺墓と判定した静岡県原川遺跡の土壌試料の0.0041％等と比較すると、かなり高いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

(3) 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）またはヘキサン－エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

残存脂肪の脂肪酸組成を第2図に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸（C18：2）、アラキジン酸（C20：0）、エイコサモノエン酸（C20：1）、ベヘン酸（C22：0）、ドコサモノエン酸（エルシン酸）（C22：1）、リグノセリン酸（C24：0）、ネルボン酸（C24：1）の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。



第2図　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

各試料中での脂肪酸組成を見てみると、石穴遺跡のA区SX046の土壙では5試料すべてがほぼ似通った植物性脂肪の残存を示唆する脂肪酸組成パターンを示した。中級脂肪酸のうち主要な脂肪酸はオレイン酸で約35～50%分布しており、次いで多いのがパルミチン酸で約32～43%分布していた。高級脂肪酸であるアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸は3つの合計で約4～9%の分布量で比較的少量であった。同じくA区SX044は前者の遺構と比較して、リノール酸含量が若干多いくらいで、他の試料はA区SX046の土壙中の試料とほぼ同じ脂肪酸組成パターンを示した。

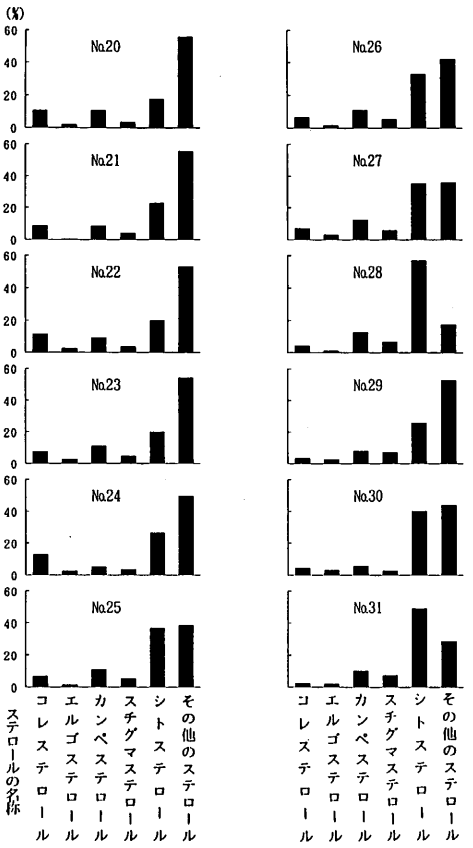
対照土壌試料である試料No.29、No.30およびNo.31は、試料No.29とNo.31がほぼ同じ脂肪酸組成パターンを示し、これは石穴遺跡の2遺構抽出試料のパターンとほぼ同じであった。試料No.30は同じ対照土壌試料でも他の2試料とは全く異なる脂肪酸組成パターンを示した。これは動物性脂肪

が残存する際の典型的な谷状の脂肪酸組成とよく似たパターンであった。

以上のことから、石穴遺跡の2遺構は、植物性脂肪が残存する植物腐植土である可能性が高い。

(4) 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸（1：1）を室素気流下で反応させてアセテート誘導体にした後ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第3図に示す。残存脂肪から10～20種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。



第3図　試料に残存する脂肪のステロール組成

A区SX046の土壙で試料No.20およびNo.22が分布比0.6以上を示し、他の試料No.21、No.23およびNo.24もその値が0.4以上でかなり高いものであった。A区SX044の土壙では、4試料いづれもが分布比0.2以下であった。対照土壌試料である試料No.29、No.30およびNo.31はいづれも分布比が0.1以下であった。

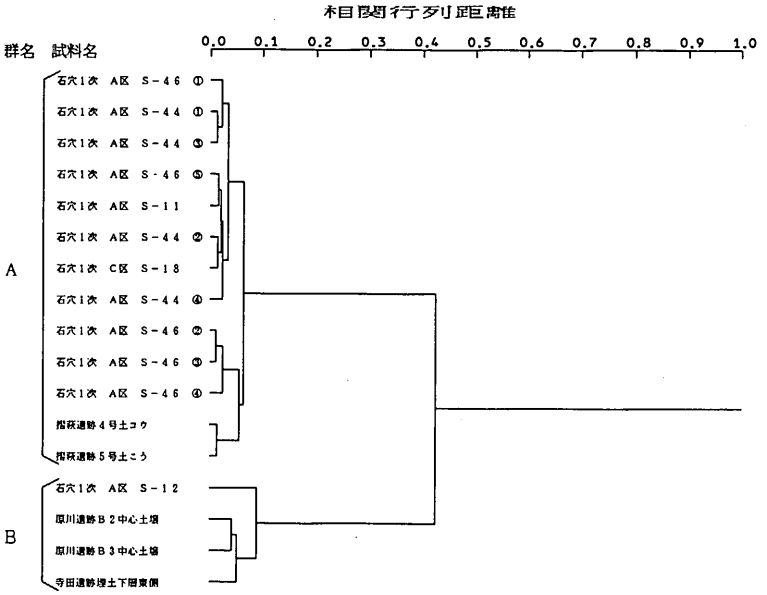
以上のことから石穴遺跡A区SX046土壙の試料には動物遺体の存在が示唆された。

(5) 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行なって各試料間の類似度を調べた。同時に摺萩遺跡、原川遺跡、寺田遺跡の試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして遺跡ごとに表わした樹状構造図を第4図に示す。

石穴遺跡では、対照試料である試料No.30を除くすべての試料が摺萩遺跡の試料と共に、相関行



第4図　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

列距離0.1以内でA群を形成し、試料No.30のみが原川遺跡、寺田遺跡の試料と共に相関行列距離0.15以内でB群を形成した。

以上のことから石穴遺跡の土壌は動物遺体を直接埋葬した時に検出される高級脂肪酸ベヘン酸、リグノセリン酸が検出されないにもかかわらず骨片が出土していることも考え合わすと、再葬墓である可能性がある。

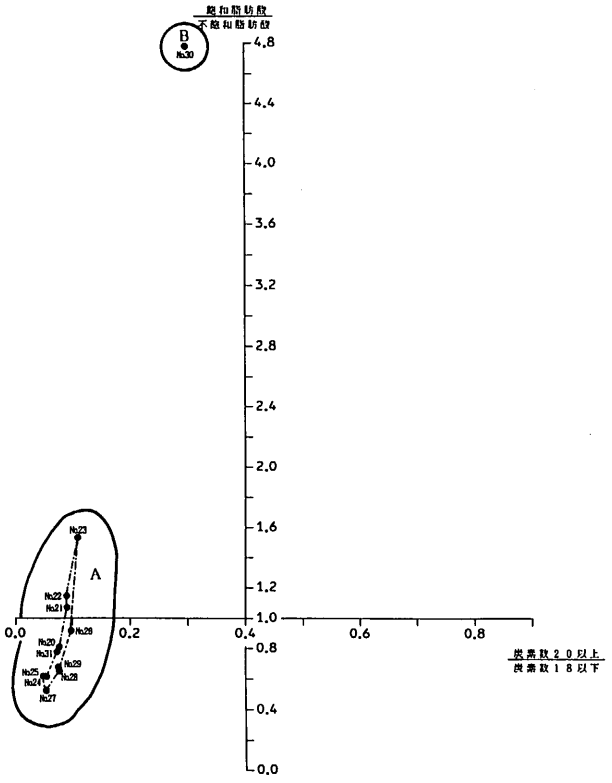
(6)　脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を遺跡ごとに第5図に示す。

図から判読できるように、石穴遺跡抽出試料は試料No.30を除くすべての試料がA群に属し、第2象限から第3象限にかけて分布した。試料No.30は単独でB群を形成し、第2象限の原点から離れた位置に分布した。

以上のことから石穴遺跡抽出試料中には、植物腐植に由来する脂肪が残存していた可能性が高い。対照試料No.30に動物性脂肪の痕跡が認められたのは、土壌の攪乱により動物性脂肪が混入したとも考えられる。



第５図　試料に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

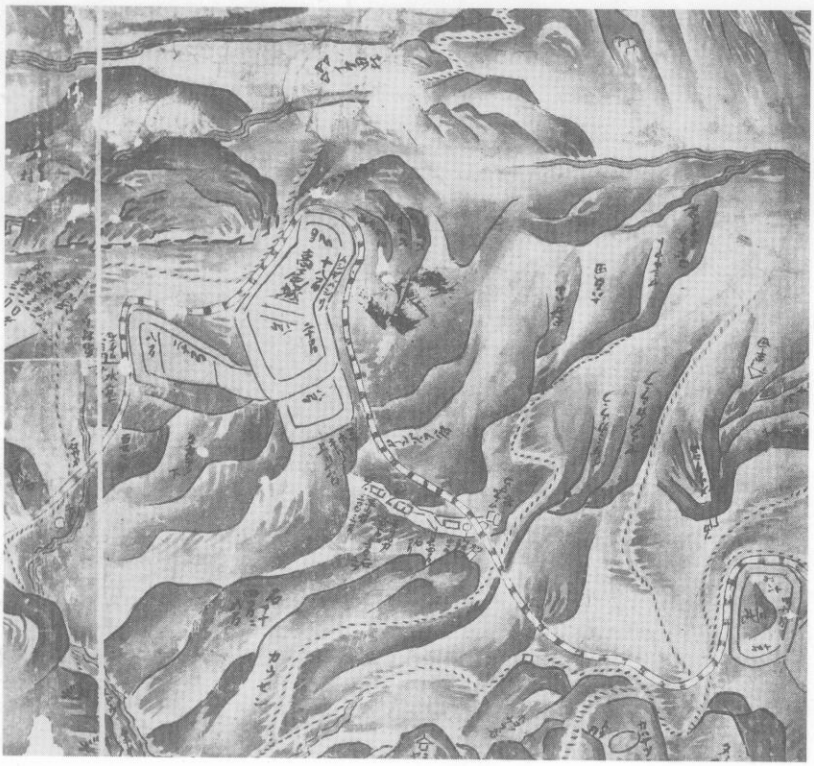
(7) ま　と　め

石穴遺跡にて検出された遺構の性格を判定するために、遺構内外の土壌試料の残存脂肪分析を行なった。残存する脂肪酸および脂肪酸組成の分布に基づく数理解析とステロール分析の結果を総合すると、石穴遺跡Ａ区SX046およびSX044土壙は脂肪酸分析とステロール分析の結果が完全に一致しなかったが、洗骨した再葬墓である可能性が高いと考えられる。

3. 高雄山城跡

山村信榮

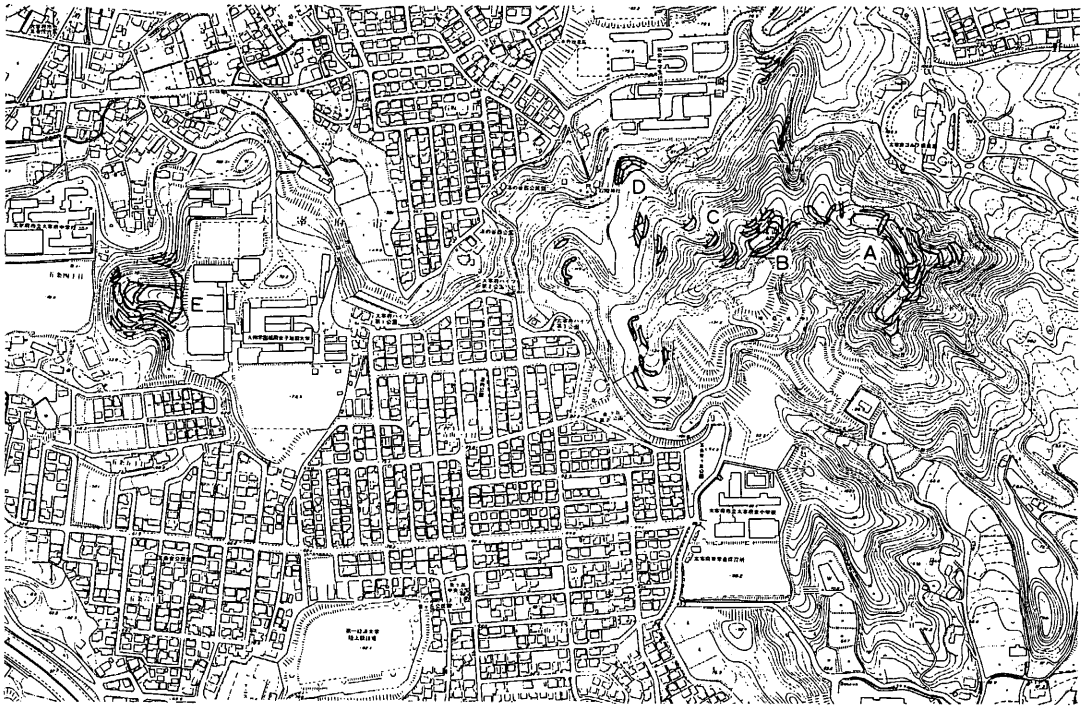
「筑前国続風土記」巻之二十四によれば「高尾山　宰府村にあり。薩摩勢岩屋の城を責めし時、秋月勢此高尾山に陣取しといふ。」とあり、また、同巻の岩屋古城の記述中には「薩摩より来たりし両大将（島津義久、兵庫頭）、太宰府に著て、高尾山に陣す。相従ふ国士先（中略）寄手は凡五六萬人もあらんと見えて夥し。岩屋のふもと、つき山、横山、国分、二日市、宰府迄、尺地のひまもなく陣をとる。」と見え、天正十四（1586）年九州平定をもくろんだ薩摩の島津氏が北に侵攻し、筑後、肥前を平らげるなかで傘下にした筑紫氏系秋月氏を先兵にたて筑前に攻め入り、筑前を抑えていた豊後大友系の高橋氏の岩屋城を攻めるため、筑紫氏系の秋月氏に本営を築かせたのがこの「高尾山」城であった。



第１図　太宰府旧跡全図北図中における高雄（高尾）山城

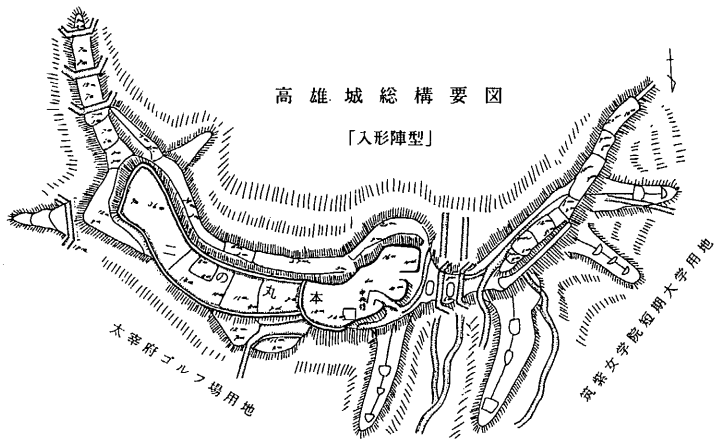
「高尾山」城の位置については直接的には文化年間頃に成立したといわれる「太宰府旧跡全図」中に位置的記載があり（第１図）、江戸後半期時点での伝承が正しければその原位置は今回発掘調査をした石穴遺跡のある高雄山にあたる。

高尾山城についての調査は天保十四（1843）年に秋月藩士大倉種周が当時の測量機器を使用して作図したものが唯一のものであった。[1] 近年、久留米工業大学の木原武雄氏がメジャー略測による縄張りの概念図を提示している（第３図）。[2]



第２図 「高尾」山城関連遺構略図（1/10,000）

山城の現況は周辺に住宅地とゴルフ場が迫り、北側の斜面は短大のキャンパス内公園の造成によって部分的に攪乱され、南側斜面は不燃物処理施設建設のため削平を受けている。山中には溝状、段状の人為的造成が随所に認められ、天正期の山城築城に関連するものもあると思われる（第２図）。



第３図 高雄城総構 木原案

造成による平坦面で面積が広いものは山の東寄りの頂部に20m×５m程のものが３箇所隣接してあり、直交する堀切り状の溝とそれに連結する帯状にそれらを取り巻く平坦面によって構成されている（第２図A）。

平坦面上には高さ20cm、一辺５ｍほどの方形の土壇が認められる。これから西に孤状に続く尾根線上にも点々と段造成と堀切りが続き、最高峰でまた長方形の広い平坦面と帯状平坦面とで形成される造成が密な箇所がある（第２図Ｂ）。この尾根から北に降りる谷には階段状の造成がある（第２図Ｃ）。この谷に添う尾根の北端部には溝と段造を組み合わせた遺構がある（第２図Ｄ）。また、ここから西に500ｍ離れた太宰府中学校と福岡女子短期大学の間に残された丘陵上にも堀状の溝と段造成からなる遺構群が存在する（第２図Ｅ）。これらは高雄山とは谷を一つ隔てた丘陵に属するが関連する可能性が大きい。

天正十四（1843）年の岩屋城攻めの後、島津が筑前の仕置きの中で高雄城の処置をいかに行なったかは不明であるが、筑紫家が所有した近世資料には「同（三笠）郡内、一、高尾ノ城　番持」とあり[3]、岩屋城攻め後、暫くは維持管理されていた可能性がある。しかし、翌年には豊臣勢が九州に進攻するのに伴ない、まもなく島津勢が撤退し、結局、この城をめぐっての攻防戦は行なわれず、短命な城砦であったことが想像される。

今回は踏査による略図の作成に留まったが、主要な郭の部分は遺存状態もよく、将来的には保存に向けた測量などの調査を行なってゆきたい。

1 「内閣文庫大倉喜太郎献納本について」副島邦弘1982（「森貞次郎博士古希記念古文化論集」）
「筑前秋月城跡４」甘木市教育委員会1984
2 「肥前城廓史」木原武雄1992（「「佐賀学」を考える」佐賀大学教育研究学内特別経費による研究報告書）
3 「筑紫氏所領城数覚書」（「佐賀県史料集成古文書編」第28巻1987佐賀県立図書館）

※　なお、「太宰府旧跡全図、北図」の本書掲載について、所有者である木村明敏氏より御快諾いただいた。心より御礼申し上げます。

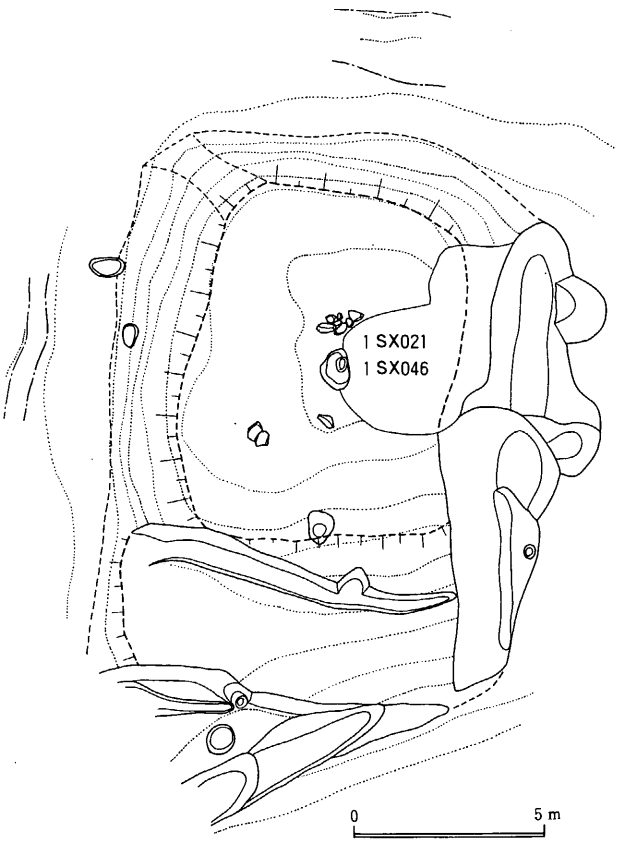
4. 方形壇状遺構の性格について

狭川真一

石穴遺跡で検出された方形壇状遺構を理解する一助として、本稿を用意した。直接これを理解できる類例は知見になく、性格を他の類例から探ることとしたい。

1. 石穴遺跡方形壇状遺構の概要

本文と重複する部分もあるが、ここで簡単に当該遺構を整理しておきたい（第1図）。今回検出された方形壇状遺構（1SX015）は、南北15.0m、東西12.5m、高さ約1mを測り、2辺を溝によって区画され、南側にはテラス状の遺構が設けられている。壇状遺構を構成する盛り土は、骨片を含んだ層が2層確認されており、その間に一度整地を行なった形跡がある。また、地山および整地の各面から掘り込まれた不定形土壙（1SX021・046）は両者とも壇状遺構のほぼ中央に位置しており、土壙の断面形状を加味すると標識（例えば木製の卒塔婆様のもの）を立てていたことが想定される。いずれも骨を含む土層に先だって構築されているとともに、同一の空間を同一の用途で使用しているものの、途中何らかの要因で一旦整理し、再使用したと考えられ、標識も同じ位置付近に立て替えたものであろう。使用の期間は明らかでないが、かなり長期にわたって使用されていた可能性も考えておく必要があろう。また、骨片は小片化しており、一体分がまとまった状況で出土しておらず、方形壇状遺構の上に小片化した骨を置いた（蒔いた）ものと理解される。土層の厚さからして1層に対し、かなりの回数の散骨が想定される。なお不定形土壙における残存脂肪分析の結果では再葬墓としての理解が示されるが、火葬骨



第1図　1SX015実測図（1/200）

が多量に蒔かれたとするとおそらくは同様な成果が得られることが予想され、動物遺体を直接埋葬したときに得られるデーターとは異なった状況であった事実はこのことを物語っていよう。

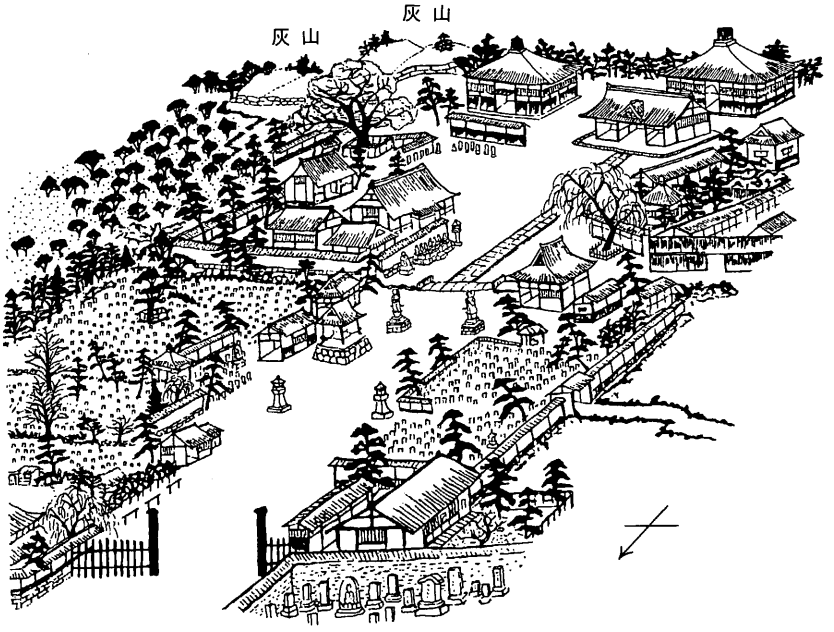
さらに発掘調査は行なわれていないが、同一の尾根上に複数の壇状遺構の存在が確認されている。規模・形状・立地など共通する点が多く、同様の性格の遺構がいくつか存在していたものと理解できよう。

こうした所見からの遺構を検討する視点は、1) 壇状を呈する遺構で墳墓の可能性もあること、2) 細片化した骨が同一の空間にある程度の期間、蒔き続けられていることの2点を中心に考えてみたい。特に2)はこの遺構の性格を具体的に物語ってくれるはずである。

2. 壇状を呈する遺構の例

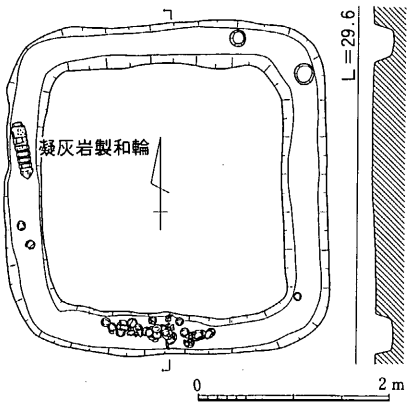
最初に骨や灰が山積みされているという極端な例から紹介しておく。

大阪の千日前といえば今はミナミの難波にほど近い大阪都心部で、商店街や大型店舗が所狭しと林立している。筆者のよく行く古書店もこの千日前にある。しかしながら明治維新前は墓地と火葬場と処刑場があった所で、かつて存在した大規模な斉場（千日墓所）には、数箇所に骨灰の山（第2図では「灰山」と呼んでいる）が形成されていた[1]。斉場で火葬された骨のうち骨壺に埋納できなかった骨を積み上げていたようであるが、こうした光景は都市部における共同墓地で明治頃まではよく見られた光景であったろう。火葬が浸透し定着する過程で、小片化した骨、余剰となった骨や灰の処分には苦慮したことが想像される。明治に



第2図　千日墓所の景観

入って国家神道による火葬の否定の際に様々な矛盾が生じたらしく、いくつかの記録にその辺りのことが記されている。その記録類には火葬によって生じた埋葬されない骨（記録には「灰」と記載されることが多い）の処分が問題になっており、そうした骨の集積場が墓地の一所に存在していたことが知られる。都市における死者全体の火葬を執行した場合に、溢れ出る骨の数はおびただしいもの（関西の場合全部の骨を拾骨しないのが主流である）であるが、火葬があるいは埋葬行為そのものが限られた集団に許されていた時代では、骨の余剰も少なく、単なる廃棄という行為ではない何らかの宗教的精神がその背景にあるならば、その位置もまた埋葬の場のひとつとして理解できるのではなかろうか。結果としての形状や基数は石穴遺跡の壇状遺構と似た形になることも予想できるが、中世における一地方の在り方を、近世末期、近代初頭における都市の状況と同じレベルで扱うことはできない。



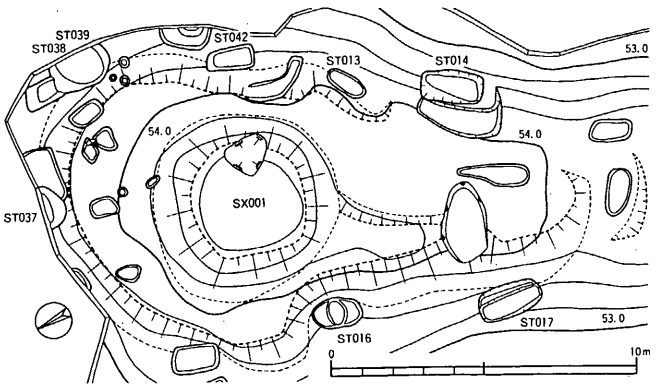
第３図　西陣町遺物SX13002（1/80）

さて、発掘調査された遺構からの類似のものを探してみたい。周溝を巡らし、盛り土を行なう遺構では早くから火葬塚というものが知られており、関連する遺構も検出されている。著名なものは京都府長岡京市西陣町遺跡のSX13002[2]（第３図）や京都大学構内遺跡のSX１[3]、三重県東庄内B遺跡[4]などが掲げられる。これらはおそらくは単体の遺体を火葬したのちその場を墳墓と定めたもので、後々に墓前祭祀が行なわれていたとしても追埋葬の可能性はほとんど考えられない遺構である。これらに対し、基壇状を呈する遺構で墳墓という理解のもとで報告されているものに、福岡県小郡市津古土取遺跡の例がある[5]。立地や形状、規模などかなり近似するものであるが、直接遺体を埋葬したであろう主体部が存在することや、盛り土中に検出される火葬骨がある程度の纏まりを示し、３号墓と称するものでは19箇所の火葬骨の集中地点が検出されている（第４図）。

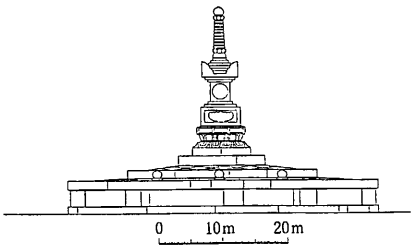


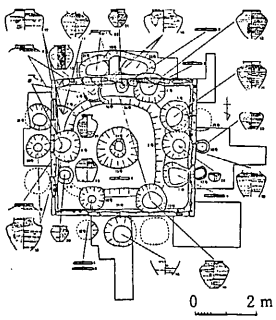
第４図　津古土取遺跡３号墓（1/200）

同一の空間へ次々と埋葬行為を繰り返して行く点ではかなり近似した性格のものと思われるが、墳墓としての性格以外に具体的な検討はなされていない。また太宰府市篠振遺跡[6]（第5図）や京都府大道廃寺遺跡[7]では墳墓群の中心にモニュメントとしての墳丘（基壇）状遺構が検出されている。筆者は篠振遺跡の性格を検討する際これを「塔」とみなし、墓地の標識的なあるいは総供養塔的な性格を考えた。この場合と石穴遺跡との違いは単体で存在していることと、やはり骨片の在り方に異なりを指摘せざるを得ない。石穴遺跡の場合は、この篠振遺跡の墳丘の性格を取り入れながらもさらに発展した理解のもので構築、利用されていると考えたい。



第5図　篠振遺跡の墳丘と墳墓群（1/250）





第6図　醍醐寺三宝院宝篋印塔

こうした観点から見た場合、基壇上に塔を建立し、その周りに次々と納骨していった例も参考になろう。こうした遺構の最も顕著な例は京都府醍醐寺三宝院墓地の宝篋印塔であろう[8]（第6図）。宝篋印塔は二重の壇上積み基壇上に建ち、その一重め基壇の平坦部分に反華を刻んだ台座つき宝珠を持つ板石が各面三箇所づつにあり、調査の結果これが石蓋状をなすとともに墓標的な機能を果たしていたことが判明した。つまり、板石を除去した段階で火葬骨を埋納した大甕が各地点に対応するように出土したのである。しかも追埋納が実施されていたことが判明しており、ひとつの宝篋印塔（調査結果ではある程度埋納が進んだ段階で建立されている）を中心に後々まで納骨の行為をし続けていたことが理解できた。

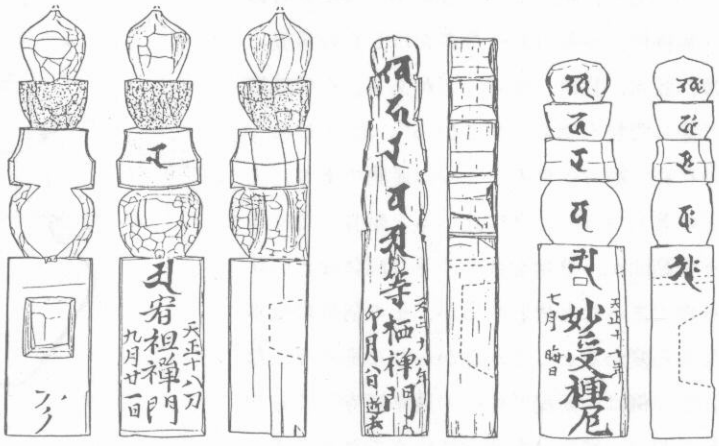
この遺構は石穴遺跡の遺構理解にとってかなり有効な資料と見做されるが、醍醐寺の僧という当時では階層の高い人物達の行為であり、直接これを理解するのは若干躊躇せざるを得ない。

3．納骨遺構の数々

さて、この章では中世の民衆がどのような行為、思想のもとで先祖の遺骨を扱っていたかを見ておきたい。小片化した骨を所定の場所に置く、または蒔くといった行為を当時の民衆レベルで想定できる中世の類例を以下に求めてみたい。骨が小片として扱われる場合、多くは火葬されたものが中心となることは言うまでもない。

奈良時代初頭に始まったとされる火葬は、現在までに流行、衰退を繰り返しているが、一般的な行程はあまり変化していない。屍体の火化→拾骨（これが行事化しているのは我が国の特色である[9]）→蔵骨→埋納の順がそれであるが、中世には骨を分骨し、本来の墳墓へ埋葬する以外に所定の寺院などに納骨する風習も見られた。納骨は所謂蔵骨行為に上積みされた文化現象で、その信仰は浄土教の浸透、社会的広がりの中で醸成されてきた強烈な浄土志向、西方憧憬によって生起されたものとされている[10]。





第７図　元興寺（上）と納骨五輪塔（1/3）

納骨行為は霊場と考えられている寺院に多く認められるところであるが、例えば高野山への納骨は『中右記』によって1108年頃までは確実に遡れそうである。堂内（地下）に納骨を行なう例では『醍醐寺新要録』にみえる圓光院への納骨があり、これは應徳２年（1085）に位置づけられる。しかしながらこれは一部限られた階層によってなされたものであり、庶民レベルへの浸透は鎌倉時代以降を待たねばならなかった。

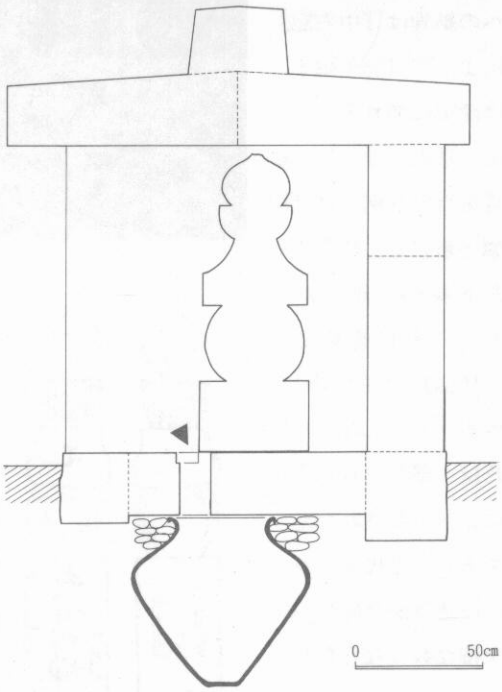
民衆が所定の寺院や堂に納骨する例として

骨の一部を木製の五輪塔などに埋め込み、堂内に打ち付けたり、投げ入れたりするものが知られている。奈良県元興寺極楽坊や福島県八葉寺などが顕著な例である。元興寺極楽坊では発掘調査の結果、鎌倉時代から江戸時代初期にかけての納骨信仰の資料が多数発見された（第７図）。最も盛んな時期は天文～天正年間であるという[00]。会津八葉寺は16世紀末以降の資料しか現存していないが、過去の火災等から考えても元興寺同様中世まで遡れるようである[01]。こうした納骨塔婆の残っている寺院およびその堂舎は、著名な所で法隆寺舎利殿、當麻寺曼荼羅堂（奈良）、六波羅密寺本堂（京都）、中尊寺金色堂（岩手）などがあり、近畿地方を中心としながらも全国的に流行した信仰であることがわかる。

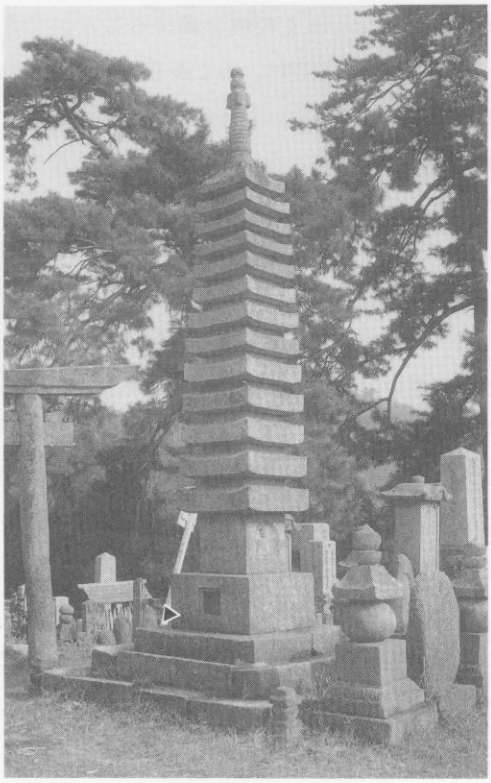
また、奈良県西大寺墓所の骨堂（こつんどう・第８図）は、堂の壁に開けられた穴から堂内に納骨塔婆や位牌などを投げ込むようになっており、壁には納骨五輪塔も打ち付けられている。堂内の中央には石造五輪塔が据えられていたようであり、納入品の調査結果では納骨容器（五輪塔形、曲物形）や骨箱をはじめ板塔婆、仏像、版木、貨幣、位牌などがあり、中世後期まで遡る資料も認められている[02]。こうした骨堂の存在も納骨信仰のひとつの産物であり、先ほどの著名な寺院などに比べると納骨してくる人々の範囲が、墓地を共有する共同体などの狭いものであったと思われるが、その信仰の根本はなんら変わるところがなかったであろう。なお骨堂の例は、新潟県佐渡の蓮華峯寺[03]にも知られており、建立は南北朝時代まで遡るとされる。



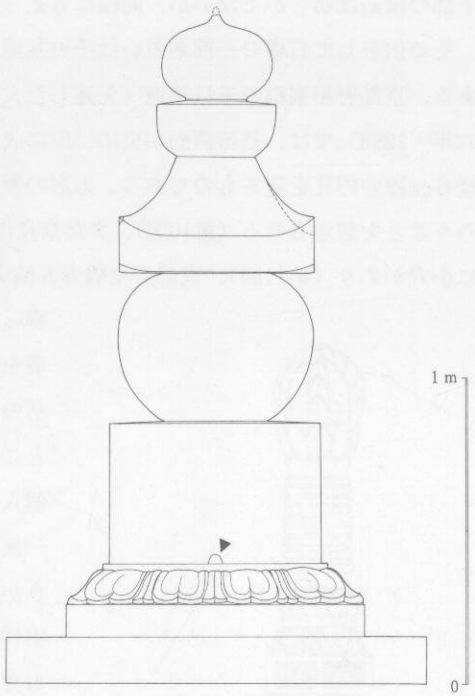
第８図　西大寺骨堂



第９図　文永寺石室・五輪塔と地下容器



第10図　千日墓地十三重石塔



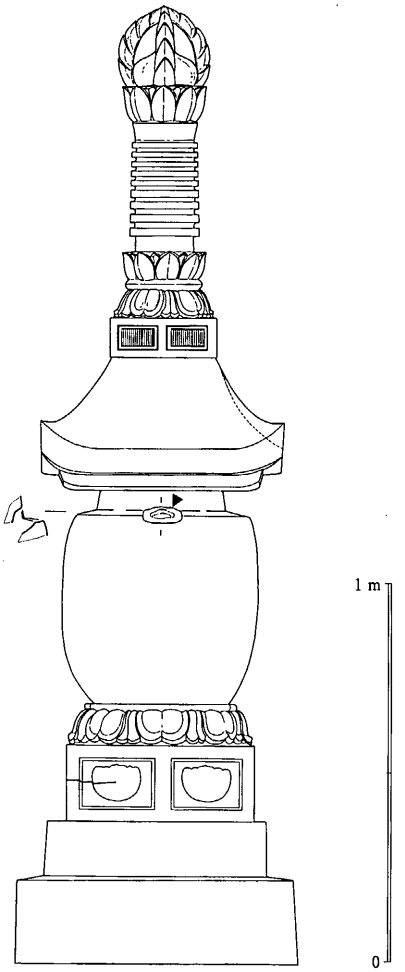
第11図　称名寺五輪塔実測図（1/25）

納骨は寺院や所定の堂に限らず、石塔などにも埋納される例がある。発掘調査が実施されて実態の知れるものとしては、長野県文永寺の例がある[04]。昭和61年に解体修理が実施され、石室および五輪塔の地下に骨片を埋納する大甕が検出された。さらに五輪塔下の床石には蓋を伴った穿孔があり、地下の大甕とつながっている。つまり先の骨堂と同様に骨片を分骨、埋納するための施設であり、甕の中からは焼骨片のほか、焼けた銭多数と小壺、土師器皿（いづれも穿孔部分から投入可能）などが出土している。石室・石塔の成立年代（弘安六年・1283）から最も新しい出土遺物の年代（寛永通宝）までにかなりの開きがあるが、随時納骨を繰り返していった結果とみれば至極当然のことであろう。納骨の主体を成していたのは、銘文にみえる神氏一族の可能性があり、ごく限られた集団の納骨所として機能していたものと考えたい（第９図）。

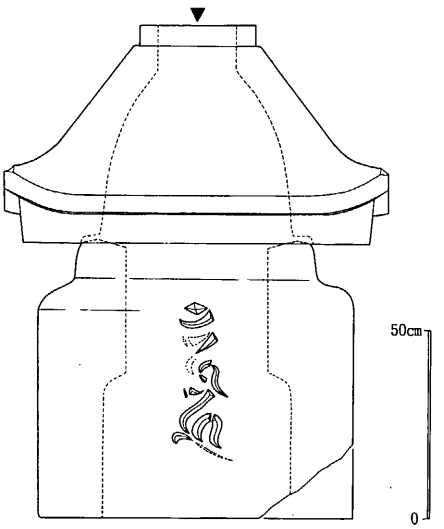
石塔に納骨したであろう類例は、下部の構造が明らかなものとしては、滋賀県鏡神社石造宝篋印塔（鎌倉時代中期）がある[05]。解体修理に際して地下から小石室が発見され、人骨片、土器片などが混在して検出された。これには穿孔がなく追納を目的としたものかははっきりしない。山梨県棲雲寺宝篋印塔（文和二年・1353）では塔下に大甕が埋置されていたことが知られ、塔に「普同

塔」と記されている[09]。この銘文は塔および塔と大甕の関係を考えるうえで興味ある資料である。

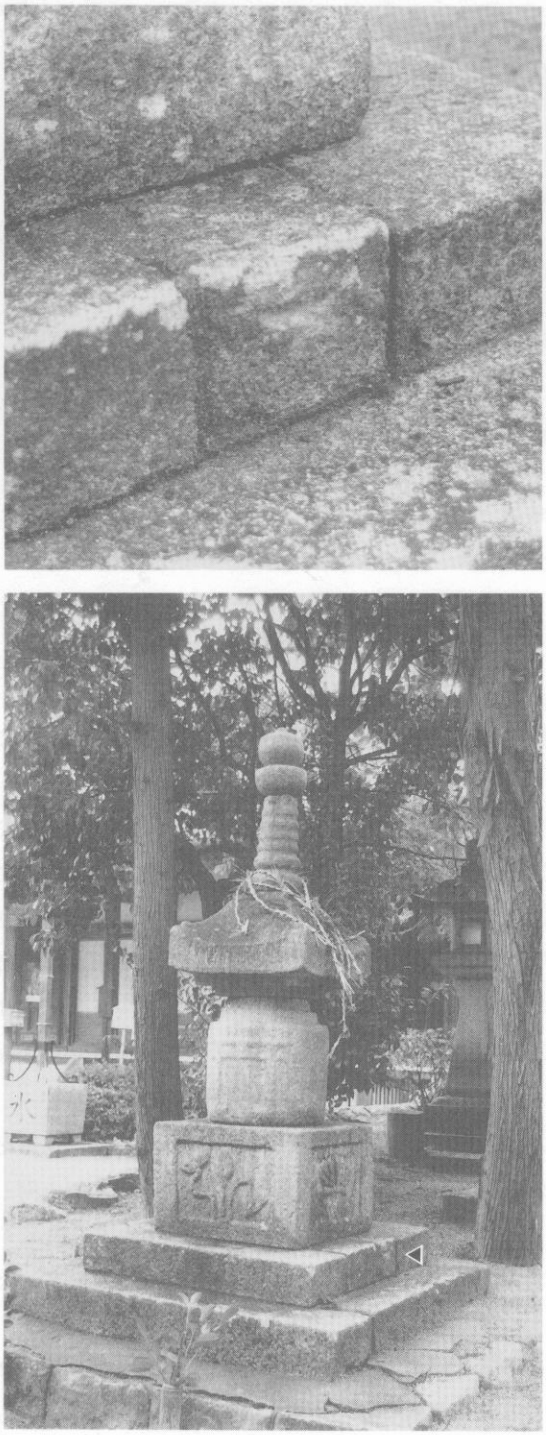
下部の構造は明らかでないが、同様に考えられる資料はかなり多くの例を掲げることができる。その例として石塔の一部あるいはその基壇の一部に小さな穴を設け、そこから納骨するものがある。京都府相楽郡の千日墓地（先述した大阪の千日墓所とは異なったもの）十三重石塔（永仁六年・1298）では、基壇側面中央に二段に成形された方形の奉籠穴を穿ち、その穴の下片中央に径6㎝程の円孔を造るものである。方形の奉籠穴と円孔との段差はそこに蓋が存在していたであろうことを想定させる（第10図）。また奈良市称名寺五輪塔（鎌倉時代末期）では、地輪下位中央に小穴があり（第11図）、京都府泉橋寺五輪塔（鎌倉時代末期）では反華座下位中央に小穴を穿っている。九州では大分県国東半島財前家墓地国東塔をはじめ多数の同形式塔に穿孔が認められる。国東塔の場合、塔身の上位、所謂頸部に粗雑な穿孔の多いところから後補の可能性が指摘されている[07]。当初は個人の墓塔として建立されたものが納骨信仰に伴って一族単位での納骨を既存の石塔に実施したものであろうか。ここでは大分県照恩寺国東塔（正和五年・1316、第12図）の例を提示しておく。こうした類例にみられる穿孔の規模は、直径数㎝程度のものがほとんどで火葬された骨片程度でないと納入が不可能である。した



第12図　照恩寺国東寺実測図（1/25）



第13図　山王堂宝塔実測図（1/20）

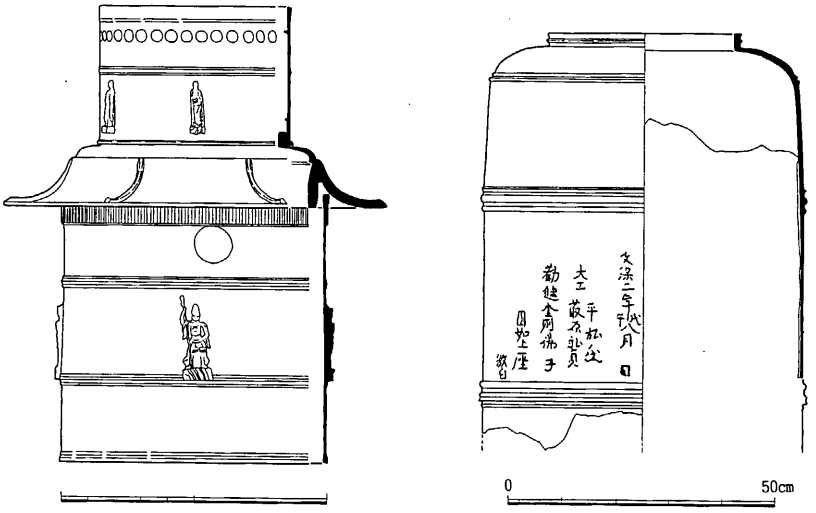


第14図　千原神社宝塔

がって同時に納入される品々も西大寺骨堂のような位牌や仏像のようなものは入れられず、古銭程度の供献に留めざるを得なかったと思われる。また、外見上ほとんど分からないが、基壇の一部で石材が取り外し可能な構造を呈しているものがある。滋賀県千原神社宝塔（文保三年・1319）、同兵主神社宝塔（鎌倉時代後期）などがそれであり、基壇の一部を加工して把手状の彫り込みを作り、取り外しを目的としていることは明らかで、おそらく基壇下部には多量の骨を埋納できる施設が存在していたのであろう（第14図）。千原神社では石塔を移転する際に骨壺が出たと言われている。また大分県長木墓地国東塔はこの地域では珍しく蓮台の一部が蓋となっており、当初から追納を目的としていたことを窺わせる資料である。なお先述の文永寺例もこの範疇である。

石塔の外見上全く分からない構造となっているものもある。笠部（火輪）あるいは相輪（風空輪）が取り外され、そこから納骨したとみられる資料である。構造からみた推定であるが、岩手県中尊寺山王堂宝塔は笠部、塔身（基礎欠失）ともに内部が空洞になっており、相輪が取り外されそこから納骨することが可能な構造といえる（第13図）。石塔の規模から見て内部の空洞はかなり大きく、塔自体が容器としての役割を兼ねていたものと考えられる。同様な例で納経を目的としたものに島根県南八幡宮の納経鉄塔（永正十七年・1520）や岐阜県真禅院鉄塔（應永五年・1398、第15図左）、

兵庫県千光寺鉄塔（文保二年・1318、第15図右）があることを付記しておく[08]。



第15図　真禅院鉄塔（左）と千光寺鉄塔

こうしてみると、鎌倉時代後期になって石塔が多く建立される時期になると、それを利用したかたちで納骨が各地で定着してくるようである。13・14世紀にはいって爆発的に増加の傾向をみせる火葬墳墓の隆盛と呼応していることは興味深い。

納骨を行なった人物は現在のところ一部の例を除いて具体的には判明していないが、元興寺や西大寺、八葉寺といったところではその寺院に近在する一般庶民が多く納骨に訪れているようである。石塔への納骨も、石塔自体が個人の墓標としての役割だけでなく、講集団によって建立されたものも知られ（奈良県忍辱山墓地五輪塔には「一結衆造立」の銘がある）、墓地を構成する都市や村落に関わる民衆によって維持されてきたことが窺えよう。同一の場所に家族をはじめとする同一共同体の構成員が常に埋納され続けて行く行為が想定され、またそうした事が当時の人々にとって意味ある行為であったと思われる。

その意味を窺える資料に『中外抄』がある。康治二年（1143）九月二十五日の記事に、「又骨をは、先祖乃骨置所ニ置ケハ、子孫乃繁昌也」とみえ、12世紀中頃の平安貴族の間では、先祖と同じ場所に骨を置けば、子孫繁栄が約束されると考えられていたことが窺える[09]。これが後の民衆レベルにどの程度浸透していったかは明らかではないが、12世紀にすでにこうした考え方のあったことは知っておく必要があろう。

さらに、ここで想起されるのが先の漆雲寺塔の表面に刻まれた「普同塔」である。「普同塔」は「海会（かいえ）塔」と呼ばれるもので、次のように解釈されている。長くなるが仏教辞典から引用すれば、

衆僧の納骨塔なり。又普同塔、或は普通塔とも云ふ。衆流の海に曾合する如く、衆僧の骨を一所に合祀するが故に此の名あり。禪林僧寶傳第三十黄龍佛壽清禪師の条に「公遺言して骨石を海曾に蔵せしむ。生死も衆を隔てざることを示すなり」と云ひ、また禪林象器箋殿堂門に「海曾塔亦是れ普同塔なり。蓋し海衆と同じく一穴に曾するなり」と云へる是れなり。現今存するものは五輪の石塔にして、表面に海曾塔と銘し、後方に孔あり、之より骨を入れて下部の石龕に收むるなり[20]。

こうした思想の現われとみられる遺構は、さきに述べた京都府醍醐寺三宝院墓地宝篋印塔の調査[8]や、一部納骨ではなもいのの大分県白潟遺跡十三重石塔の調査[21]が知られ、いづれも基壇まわりに次々と納骨、蔵骨行為を繰り返しており、同じ場所への墳墓造営にこだわる人達の行為が見て取れる。

これが民衆にまで根ざした思想であるかは明確ではないが、多くの人が自らに関連ある先祖と死後同一の穴に入り、永く共に次世で暮らすことを夢見ていたとしても不思議ではない。ただ現代では夫婦や親子でありながら、墓を共にすることを嫌う人も多くこの心理は理解できないかも知れない。

4. 方形壇状遺構の性格

遺構の形態はおおきく異なるが、小片化した骨を所定の場所に納骨するという立場から、いくつかの類例を見てきた。石穴遺跡の方形壇状遺構もこうした納骨における所定の場所としての役割を果たしていたものと理解したい。第1次調査区内には火葬を実施したと想定される遺構も伴っており、拾骨、蔵骨の行為のほかに、余剰となった骨を処分するにあたり、方形壇状遺構を設定しそこを場として散骨したのではなかろうか。その意識のなかに同一の場所に同一の集団が埋納しつづける納骨の行為に近いものを見て取ることができよう。

また、基壇状の遺構を恣意的に形成し、しかも墓地の最も高所に造営したことは、その遺構自体が墓地のモニュメントとしての機能も併せ持っていたと考えられる。先述したとおり太宰府市篠振遺跡で検出した墳丘状遺構の機能がその顕著な例であり、篠振遺跡では骨の検出はなかったが、刀子や古銭が供献されており墓地の中心的存在であったと解釈される。石穴遺跡のものも立地の上ではその機能も付加することができるのではなかろうか。霊場的な寺院や堂が無くとも、何らかの構築物（特に「塔」と理解されるもの）をもって同様な行為を行なっていることを理解しておきたい。

方形壇状遺構について簡単に検討してきた結果、中世の墓地造営におけるひとつの形態およびその精神的背景をおぼろげながら見て取ることができた。拙文が遺構理解の一助になれば幸いである。文末になったが本稿作成にあたり、㈱元興寺文化財研究所の藤澤典彦・岡本広義・高橋平明の各氏には資料の提供と多くのご教示を得た。また京都大学埋蔵文化財センターの五十川伸矢氏、佐賀県神埼町教育委員会の桑原幸則氏からは関連資料の実測図の提供を受け、関連事項についてご教示いただいた。感謝申し上げる次第である。（1993年5月11日 稿了）

註)

(1) 大阪千日墓所および近代の火葬については次の書物を参考にした。

A 浅香勝輔・八木澤壮一『火葬場』1983 大明堂

B 岡本良一・内田九州男『道頓堀非人関係文書』1976 清文堂出版

C 橋爪紳也『明治の迷宮都市』1990 平凡社

(2) 「長岡京跡右京第130次（7ANKNC地区）調査概要－右京五条三坊十四町・西陣町遺跡」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集 1985 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

(3) 岡田保良・吉野治雄「京大理学部遺跡BE29区の調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1979 京都大学埋蔵文化財センター

(4) 「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告5）1970 三重県教育委員会

(5) 片岡宏二『津古土取遺跡』（小郡市文化財調査報告書 第59集）1990 小郡市教育委員会

(6) 狭川真一ほか『篠振遺跡』（太宰府市の文化財 第11集）1987 太宰府市教育委員会

(7) 増田孝彦「豊富谷丘陵遺跡」『京都府遺跡調査概報』第1冊－四 1982 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

(8) 増田孝彦「醍醐寺三宝院墓地」『仏教芸術』182号 1989 毎日新聞社

(9) (1)A文献に同じ

(10) 藤澤典彦「納骨信仰の展開」『日本仏教民俗基礎資料集成』第二巻 1978 中央公論美術出版 以下納骨に関する部分はこれを参考にした。

(11) 岩崎敏夫『会津八葉寺木製五輪塔の研究』1973 八葉寺五輪塔調査委員会

(12) (財)元興寺仏教民俗資料研究所『西大寺骨堂遺物』1970

(13) 戸根与八郎「蓮華峯寺骨堂」『仏教芸術』182号 1989 毎日新聞社

普請帳研究会『佐渡国蓮華峯寺骨堂解体修理報告書』1984 ほか

(14) 小林正春ほか『重要文化財 文永寺石室・五輪塔修理工事報告書』1987 重要文化財 文永寺石室・五輪塔保存修理委員会 なお報告書中での解釈と今回筆者が行なった解釈は一部が異なっており、この点については別に詳細を述べる必要があろう。

(15) 『重要文化財 鏡神社宝篋印塔修理工事報告書』1976 滋賀県

(16) 小野正文「凄雲寺出土の常滑大甕」『丘陵』第10号 1984

(17) 桑原幸則氏のご教示による。

(18) 南八幡宮……三宅敏之「遺跡と遺構」『新版仏教考古学講座』第6巻 1977 雄山閣

真禅院・千光寺……京都大学五十川伸矢氏のご教示による。

(19) 水藤真『中世の葬送墓制』1991 吉川弘文館

(20) 『望月仏教大辞典』

(21) 賀川光夫・小田富士雄『白潟遺跡』1958 佐伯市教育委員会

図版出典一覧）

（第１図） 実測原図に加筆後清絵

（第２図） 橋爪紳也『明治の迷宮都市』1990 平凡社 掲載の図版を改変後清絵

（第３図） 註２）報告書の図を転載

（第４図） 註５）報告書の図を転載

（第５図） 註６）報告書の図を転載

（第６図） 註８）報告書の図を転載

（第７図） 写真は筆者撮影（昭和44年）、図は『日本仏教民俗基礎資料集成』第二巻から転載

（第８図） 筆者撮影（昭和57年）

（第９図） 註14）報告書の図を改変後清絵

（第10図） 筆者撮影（昭和46年）

（第11図） 元興寺文化財研究所 岡本広義氏原図を清絵

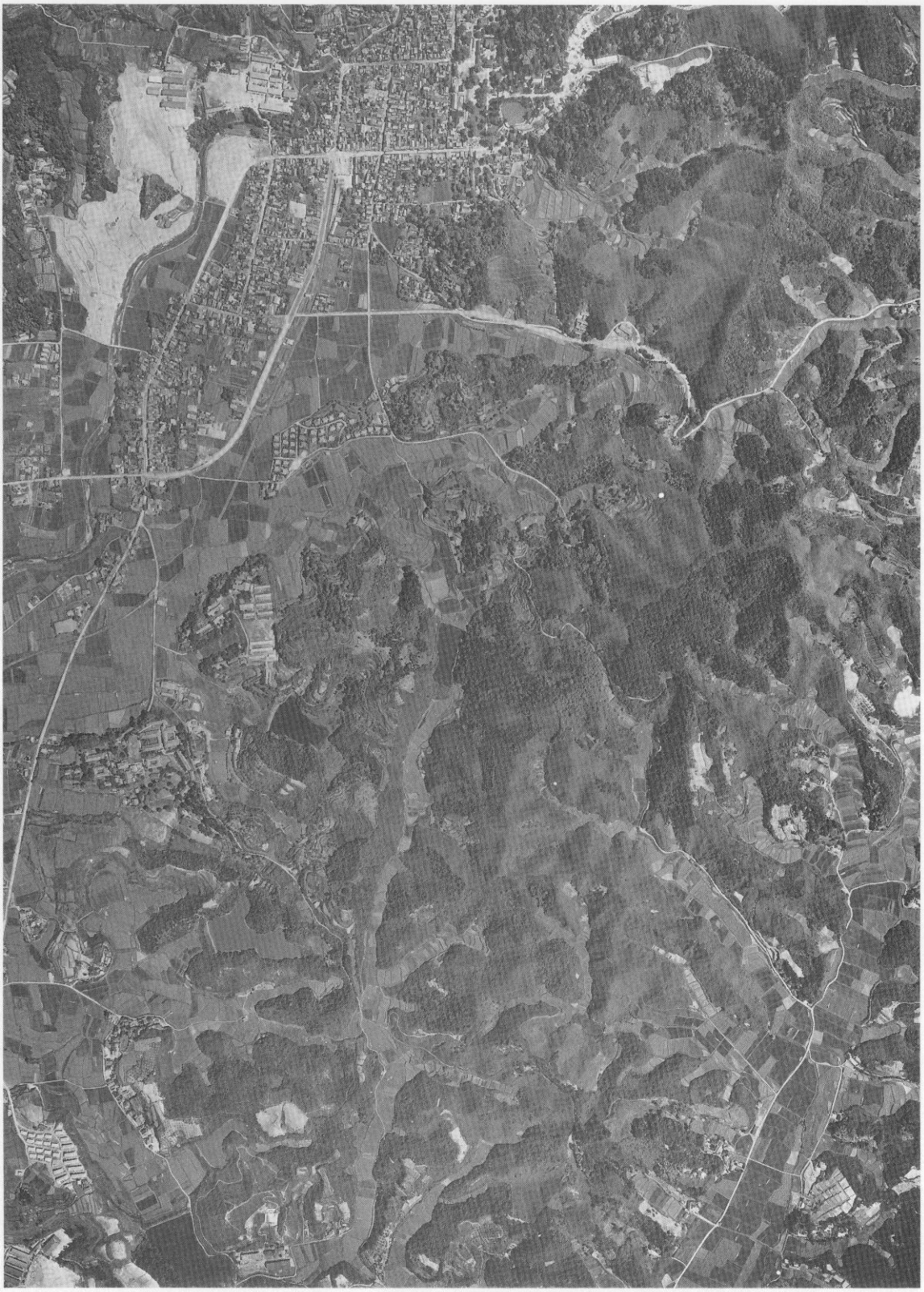
（第12図） 桑原幸則氏原図を清絵

（第13図） 筆者原図を清絵

（第14図） 筆者撮影（平成５年）

（第15図） 京都大学　五十川伸矢氏提供

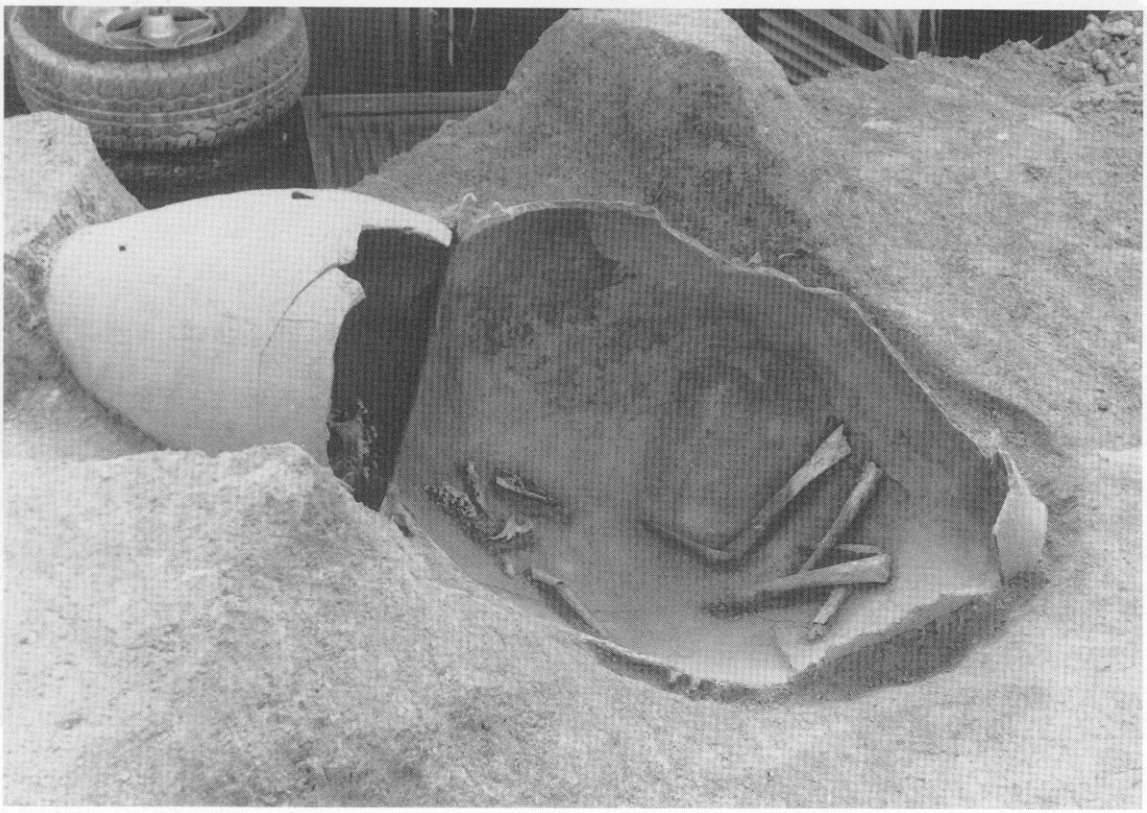
PLATES



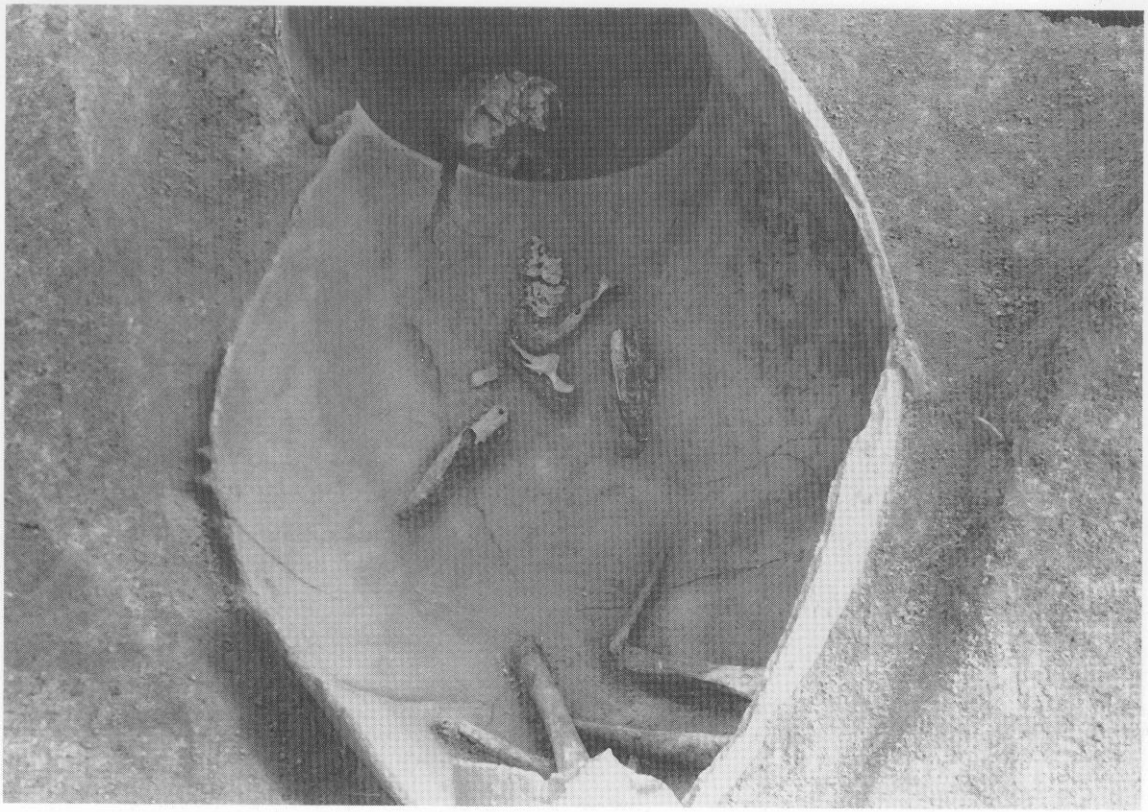
高雄周辺航空写真



2ST001甕棺出土状況（南西から）



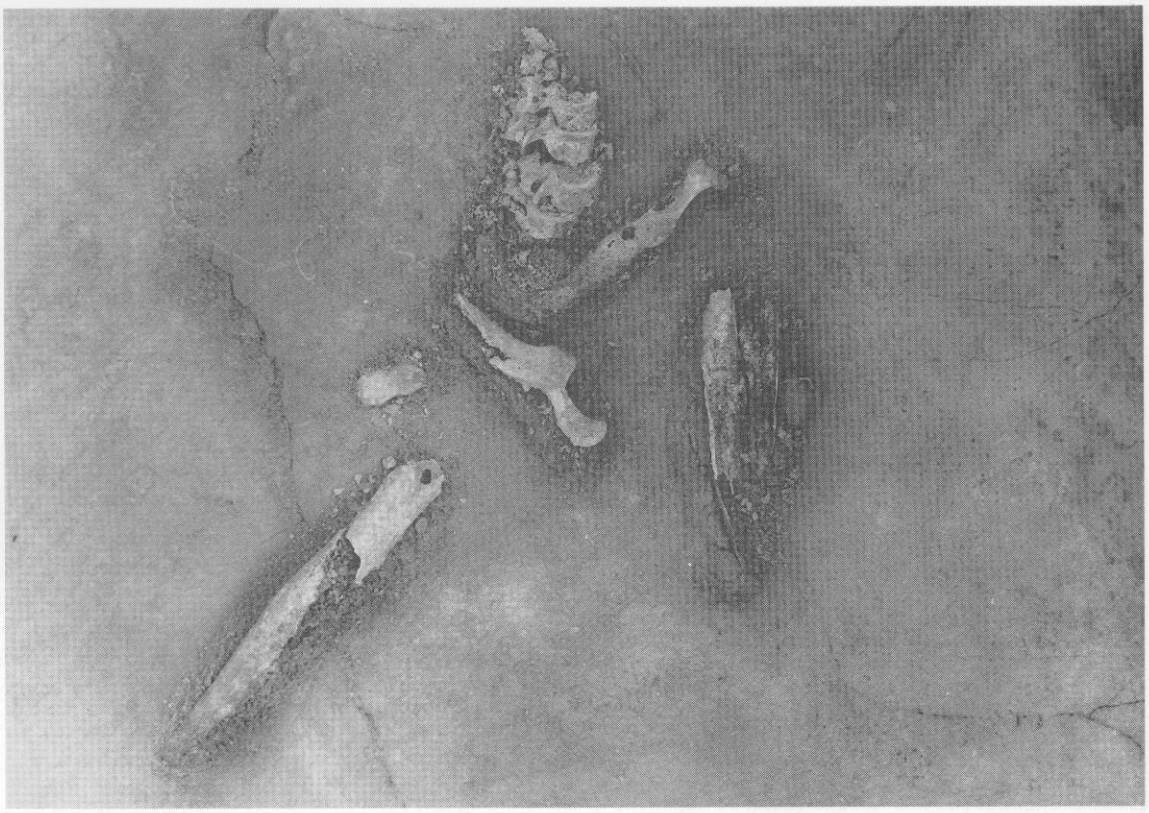
2ST001甕棺出土状況（北から）



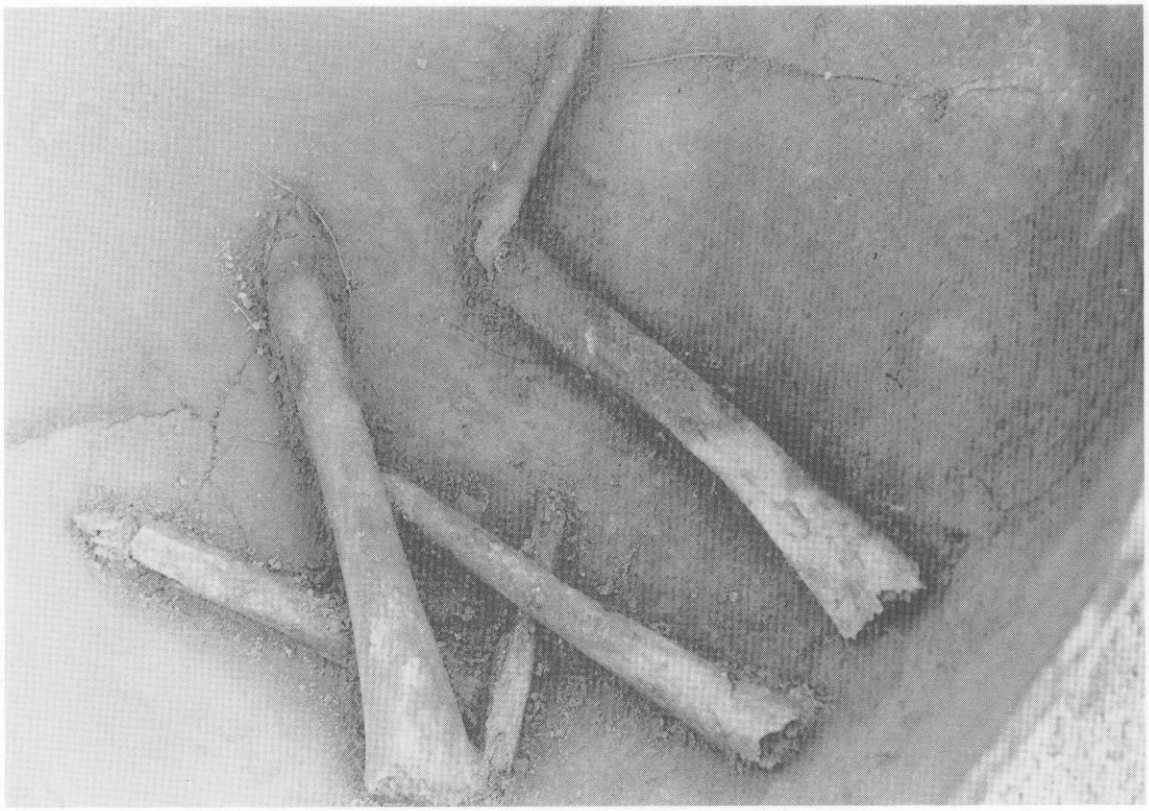
2ST001甕棺人骨出土状況 (1)



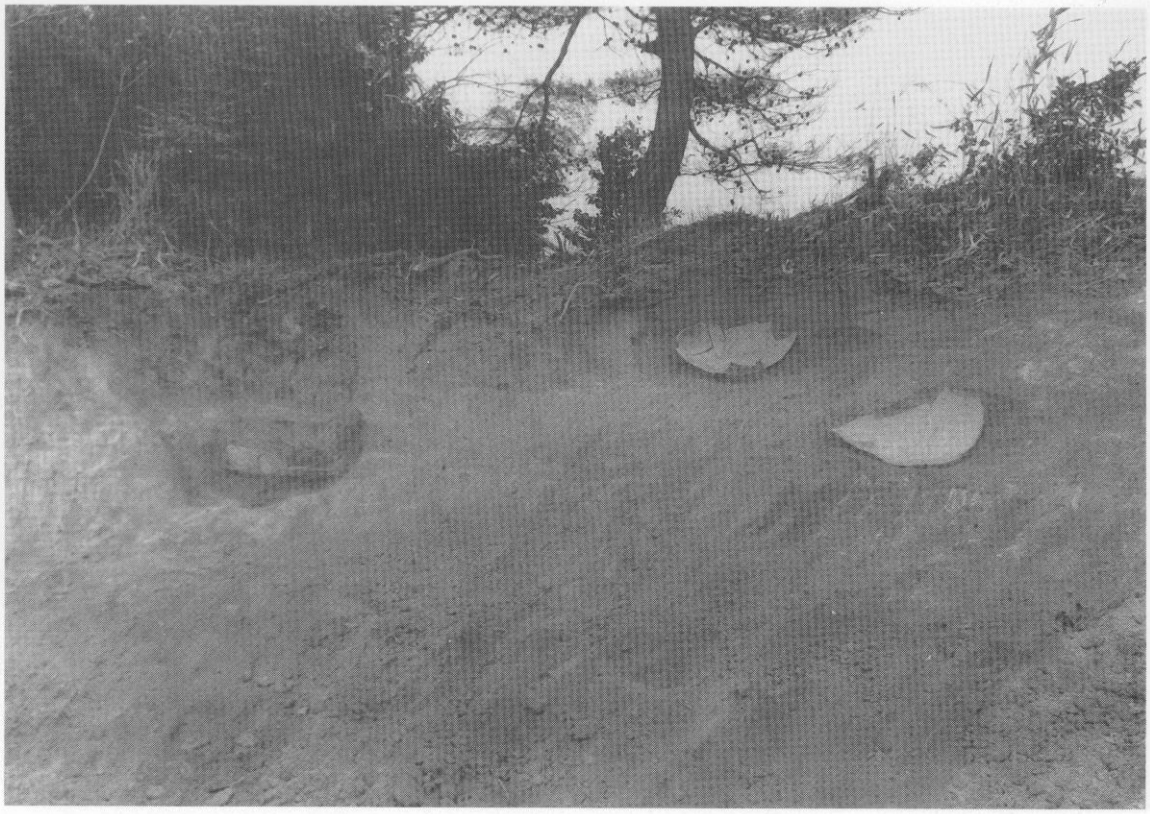
2ST001甕棺人骨出土状況 (2)



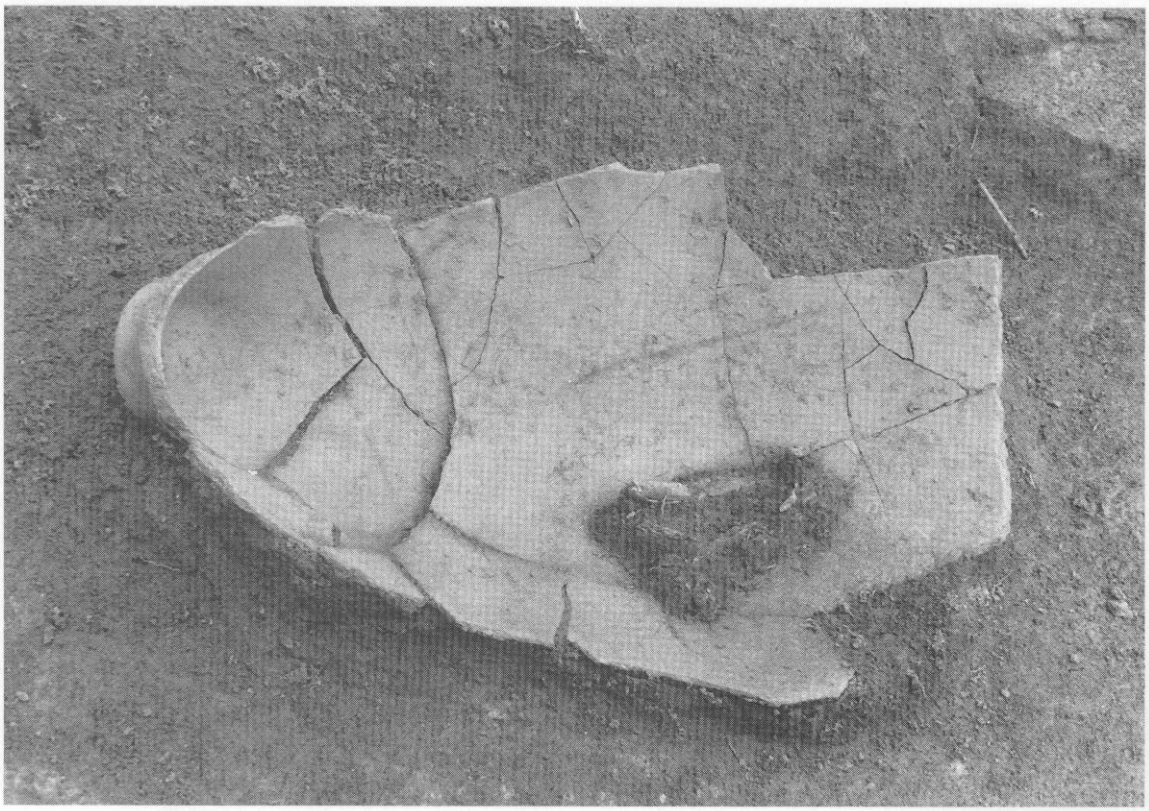
2ST001甕棺人骨出土状況（3）



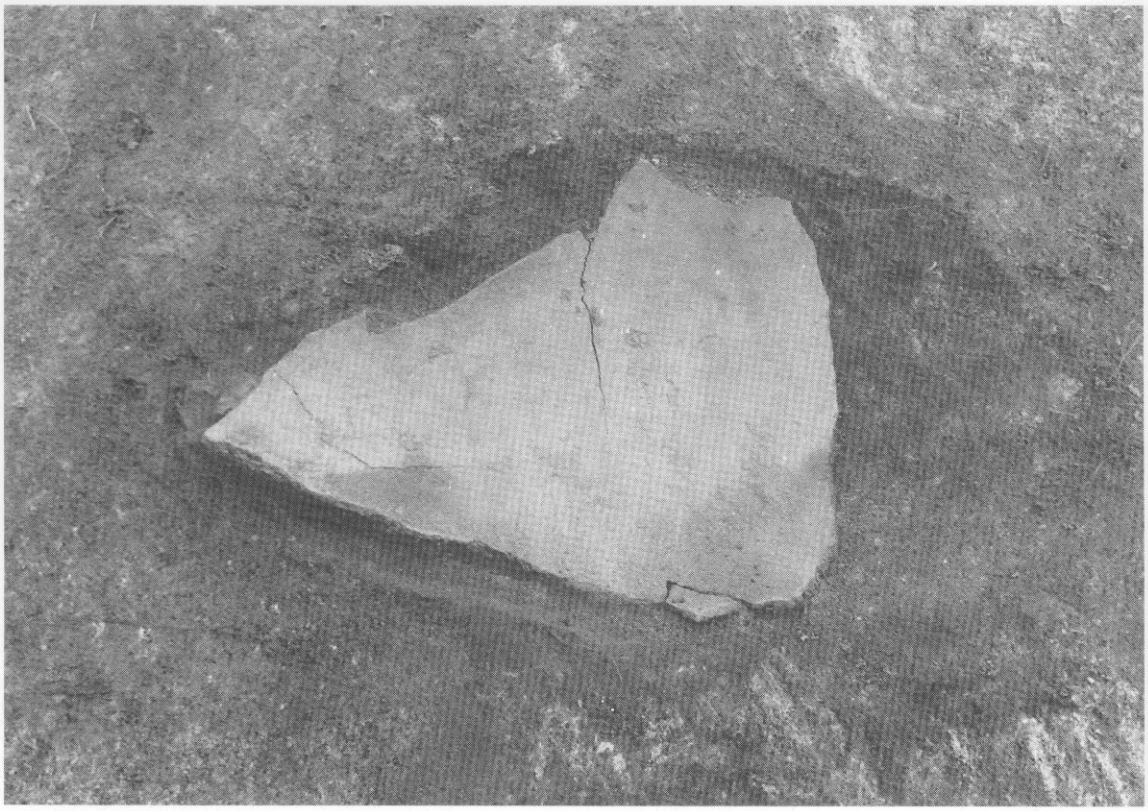
2ST001甕棺人骨出土状況（4）



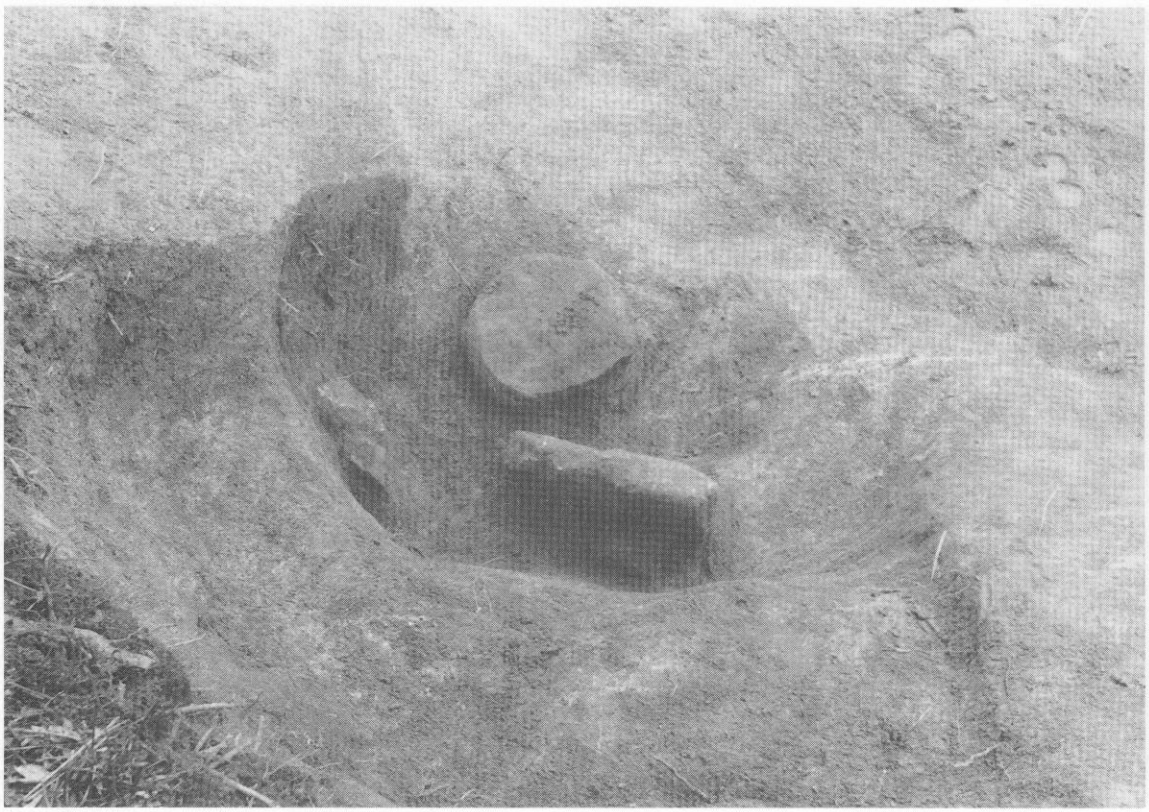
2ST002・3甕棺および土壙検出状況（南東から）



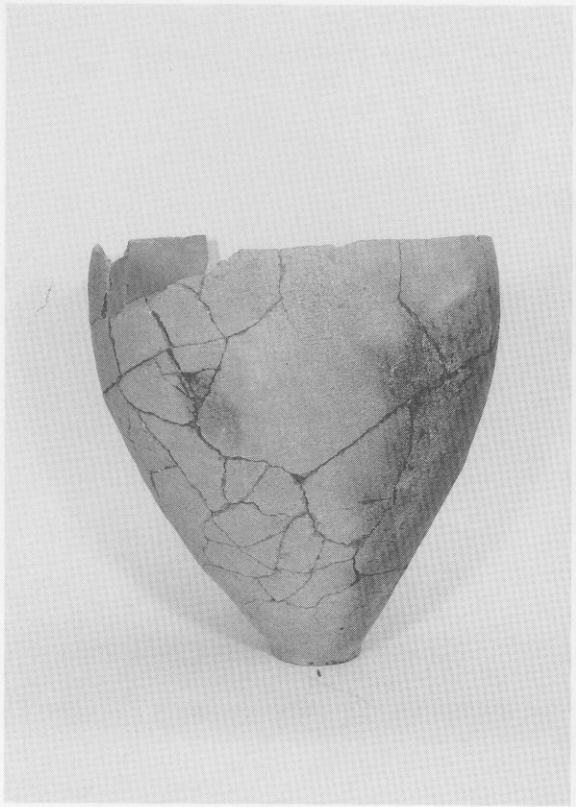
2ST002甕棺出土状況



2ST003甕棺出土状況



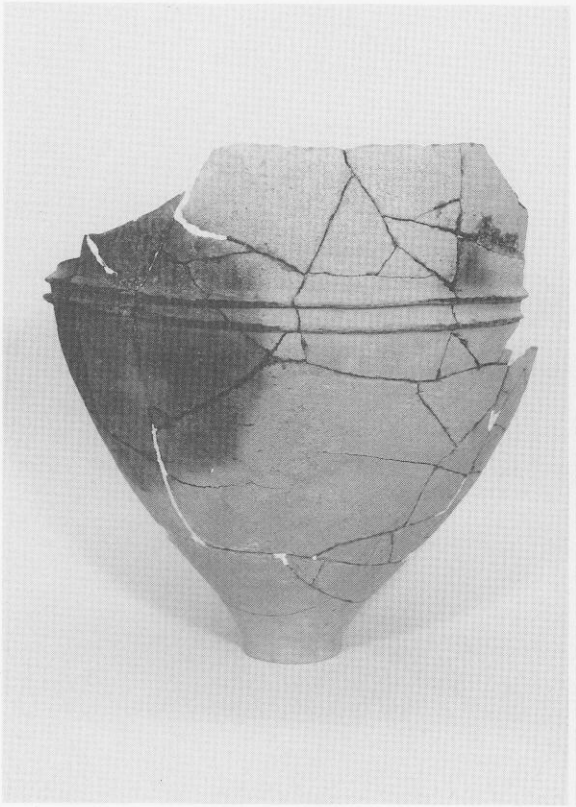
2SK005完掘状況



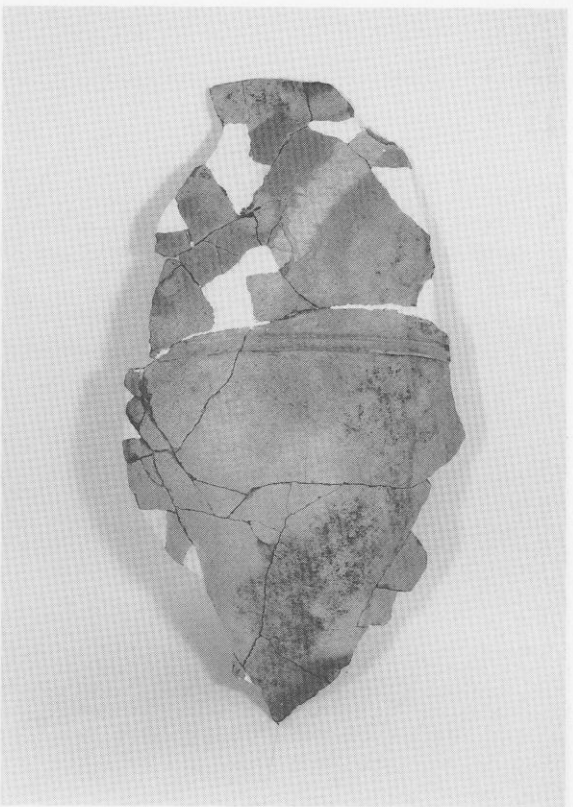
2ST001甕棺上甕



2ST001甕棺下甕



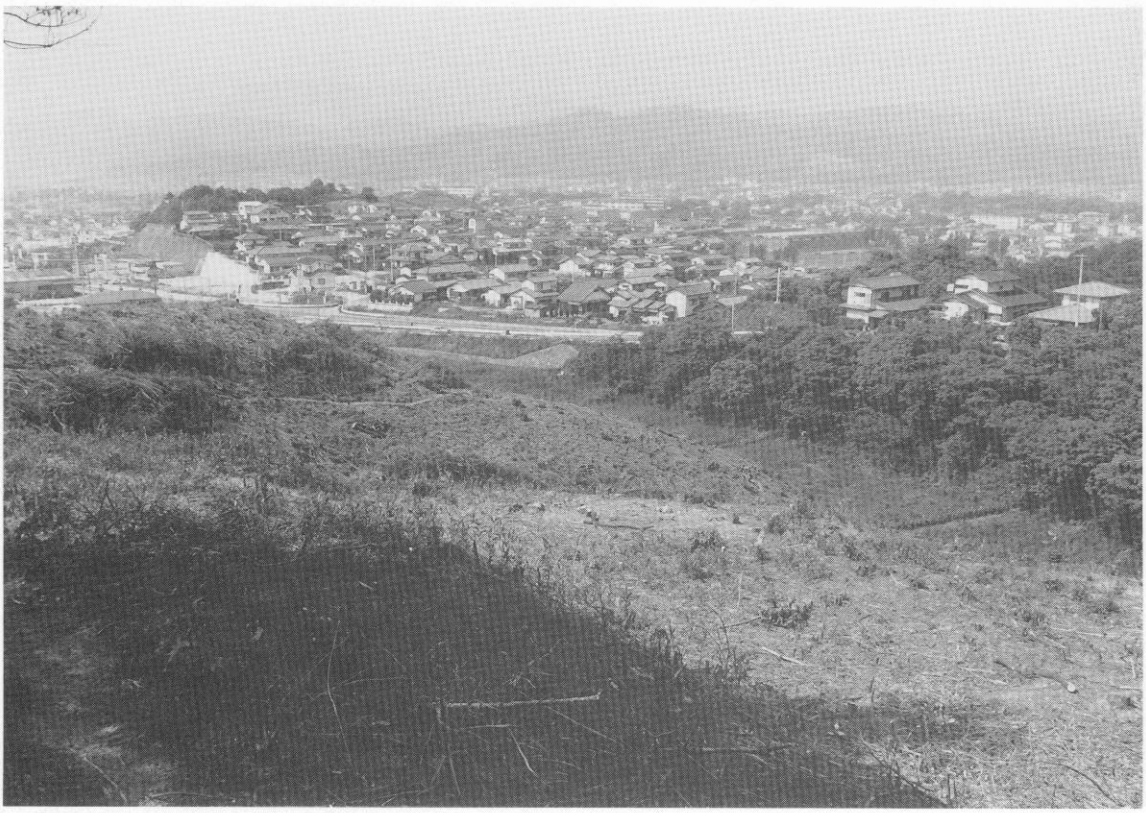
2ST003甕棺



2ST003甕棺



発掘調査前Ⅰ区（南より）



発掘調査前Ⅱ・Ⅲ区（北より）

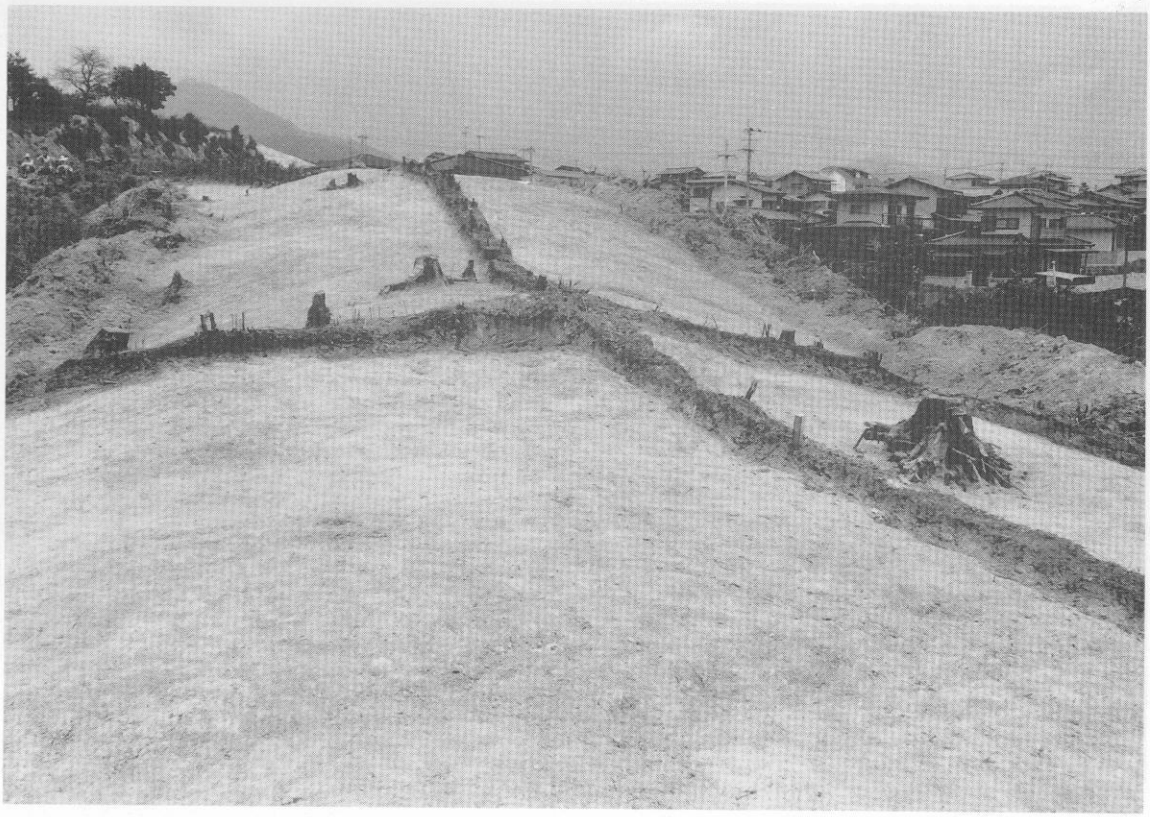


Ⅰ 区（西より）



Ⅱ 区（東より）

PL10 渡 内 遺 跡



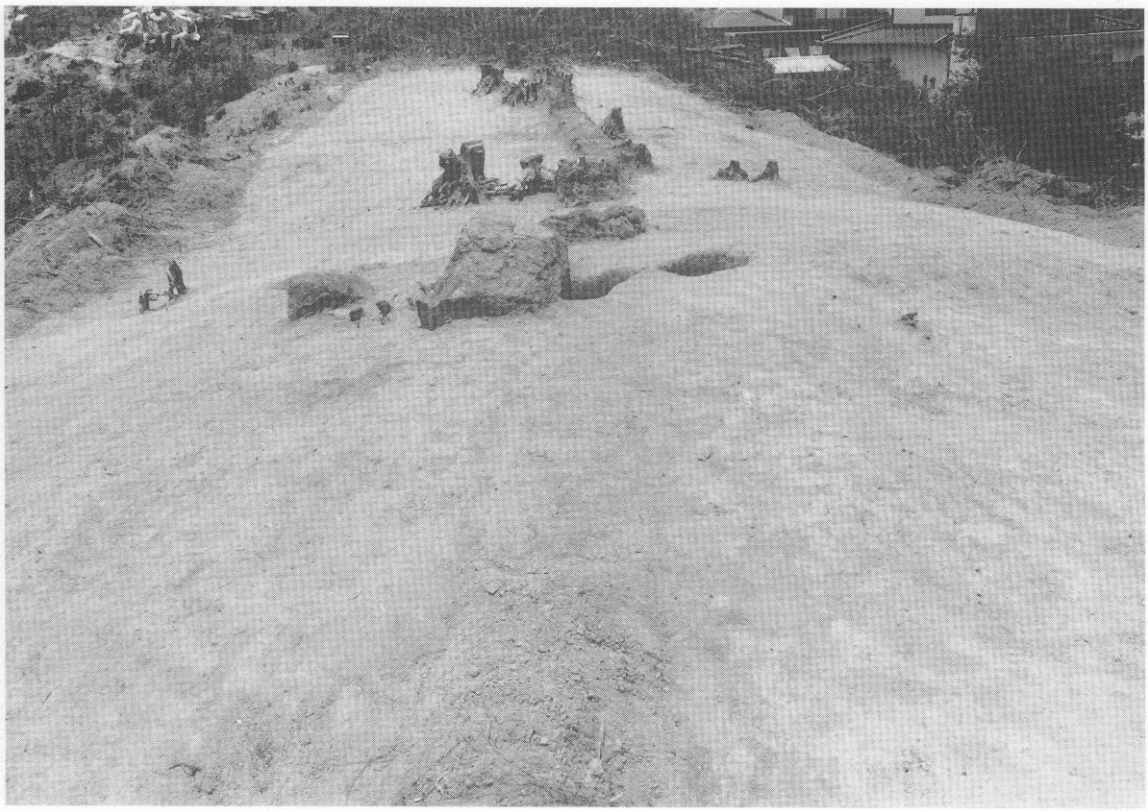
Ⅱ区南部（南西より）



Ⅱ区南部（南東より）

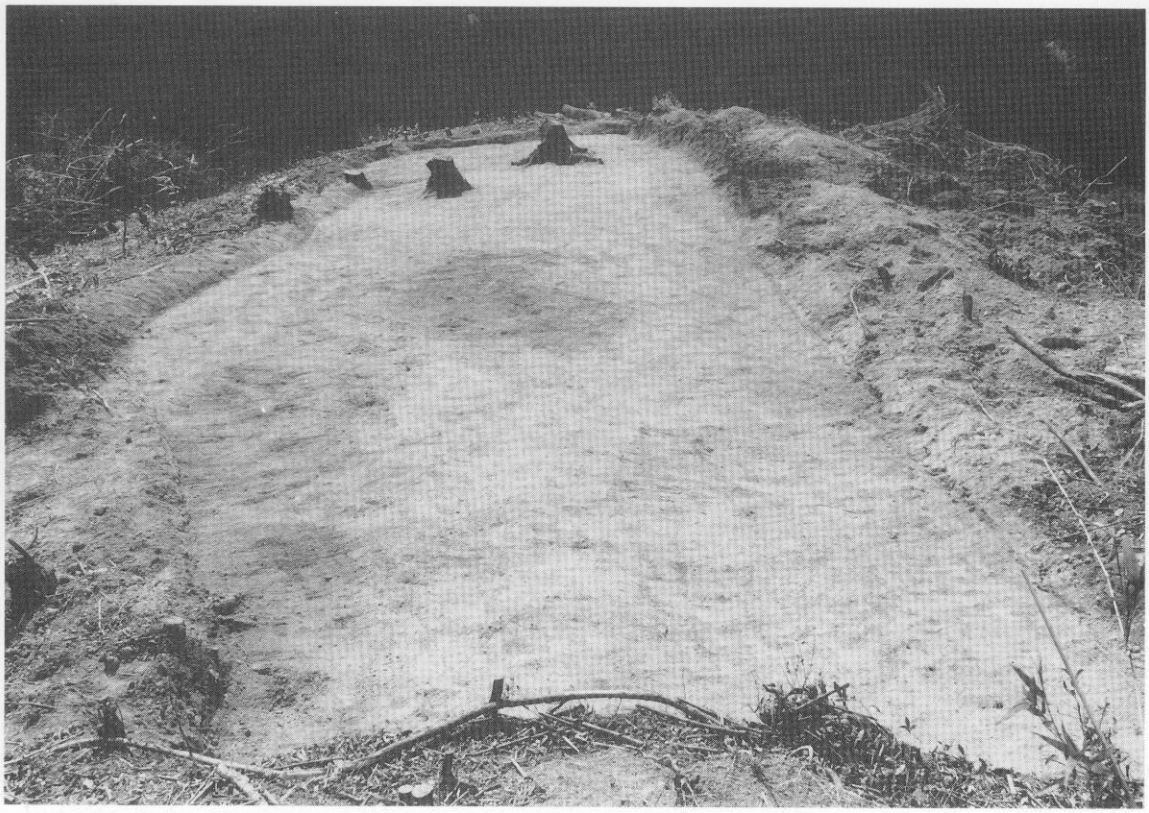


Ⅱ区北部（北より）



Ⅱ区北部（南より）

PL12　渡　内　遺　跡



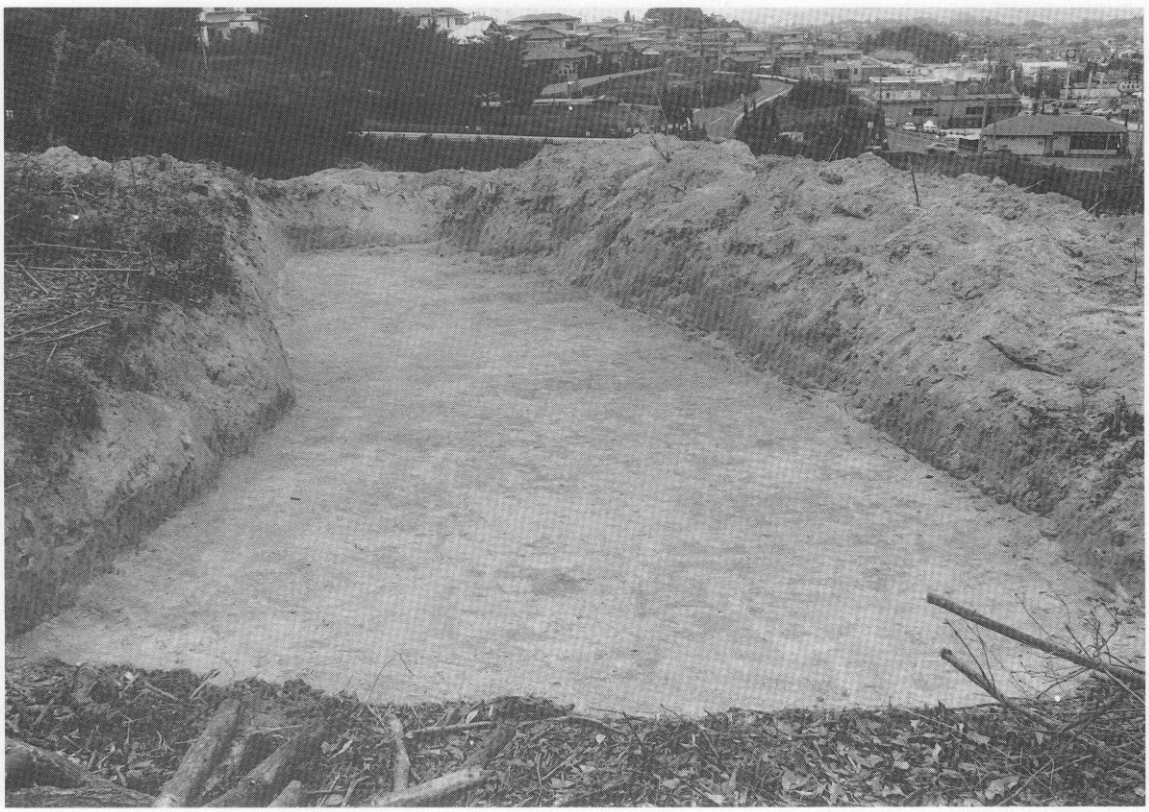
Ⅲ　区（東より）



Ⅲ　区（西より）



Ⅳ 区（東より）



Ⅳ 区（西より）

PL14　渡　内　遺　跡



V　区（南より）



V　区（北より）



下高尾遺跡全景（1）（東から）



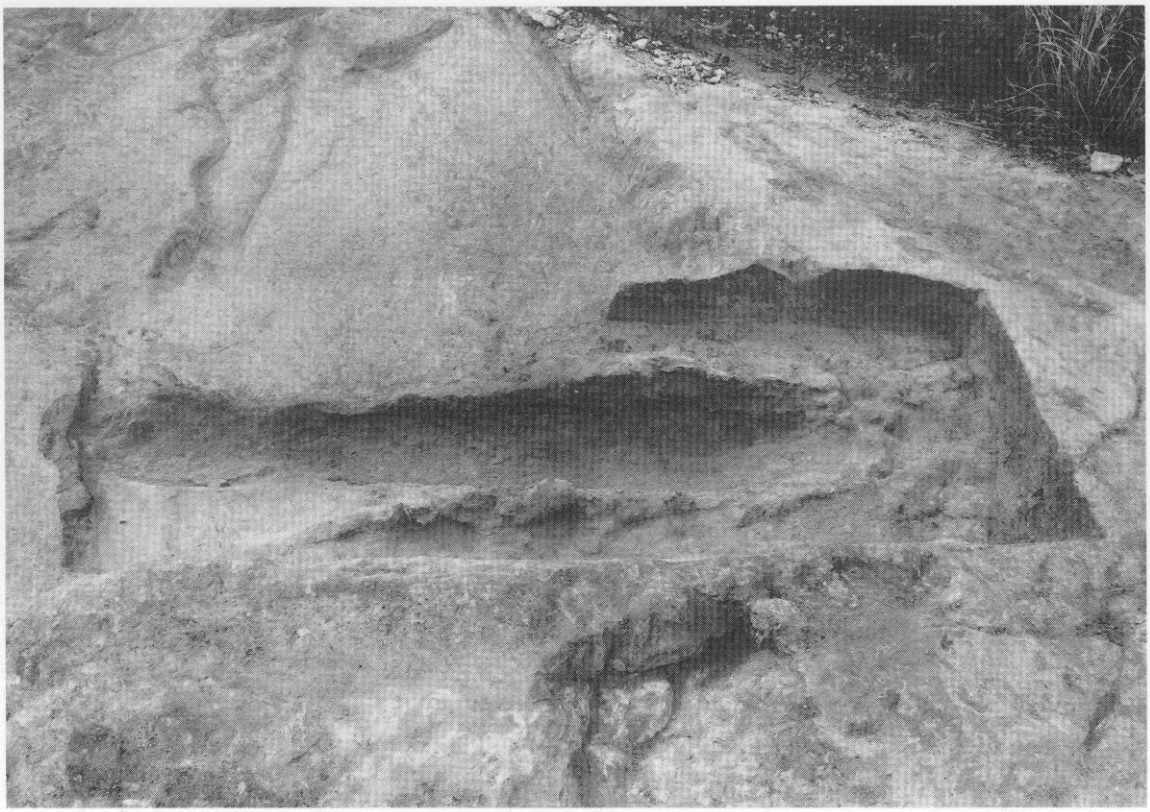
下高尾遺跡全景（2）（北東から）



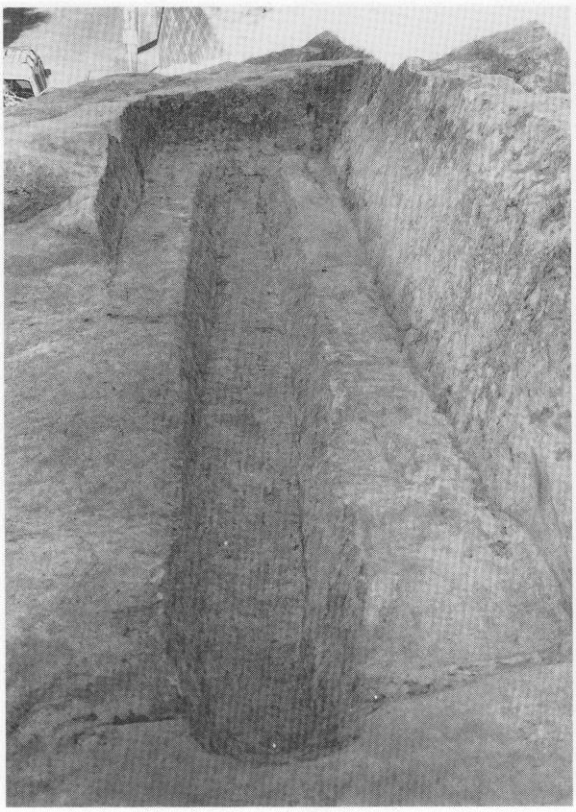
下高尾古墳主体部全景（空中写真）



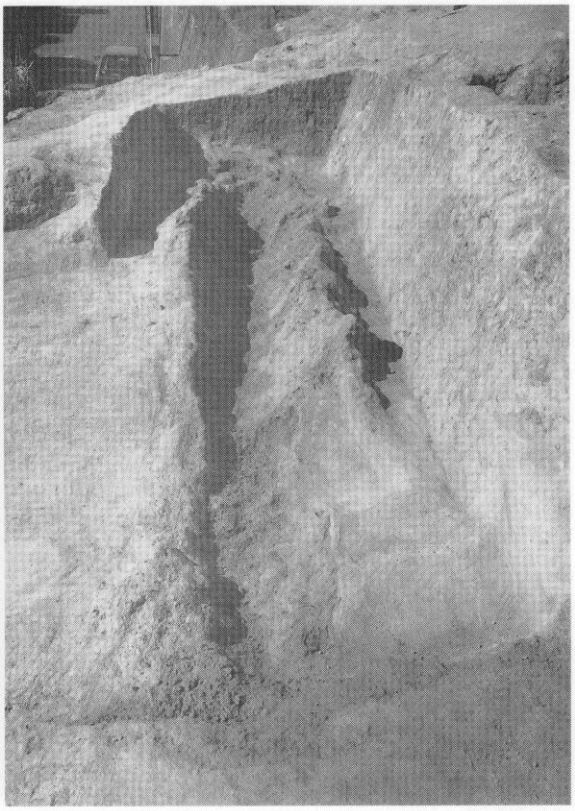
土壙全景（空中写真）



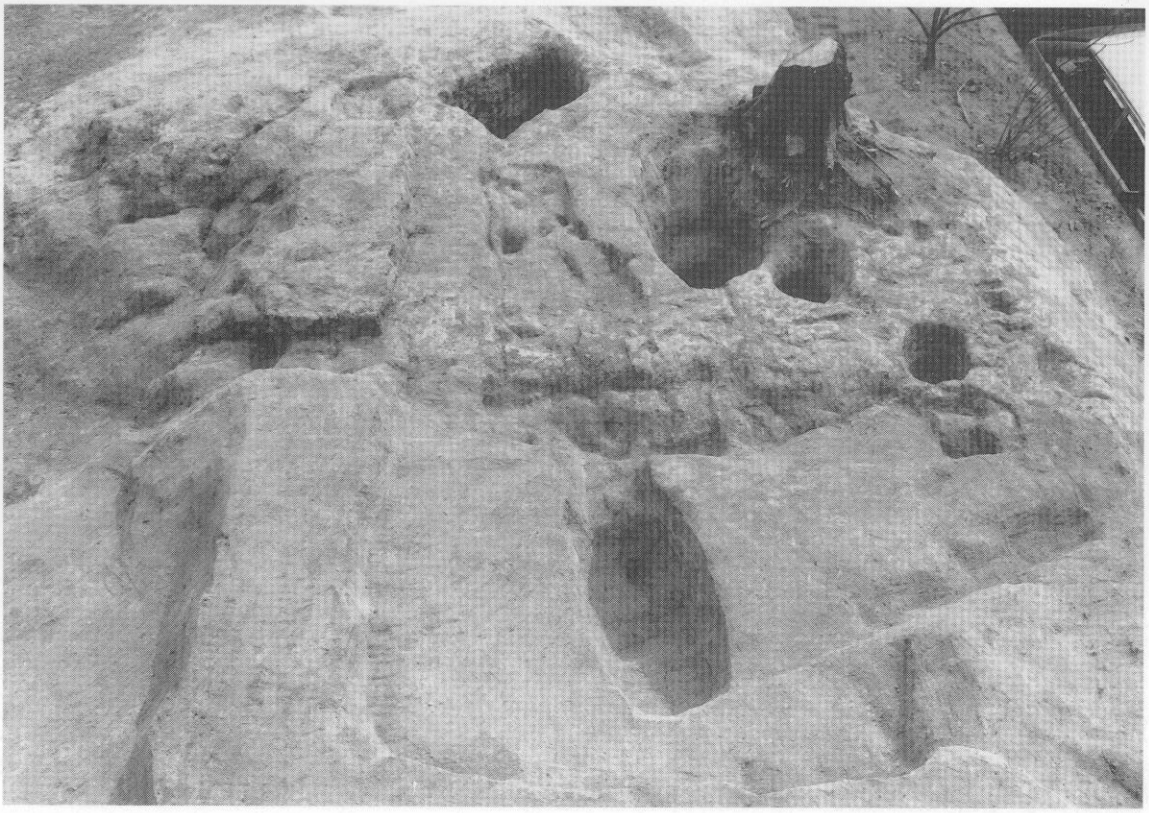
主体部粘土槨出土状況（北東から）



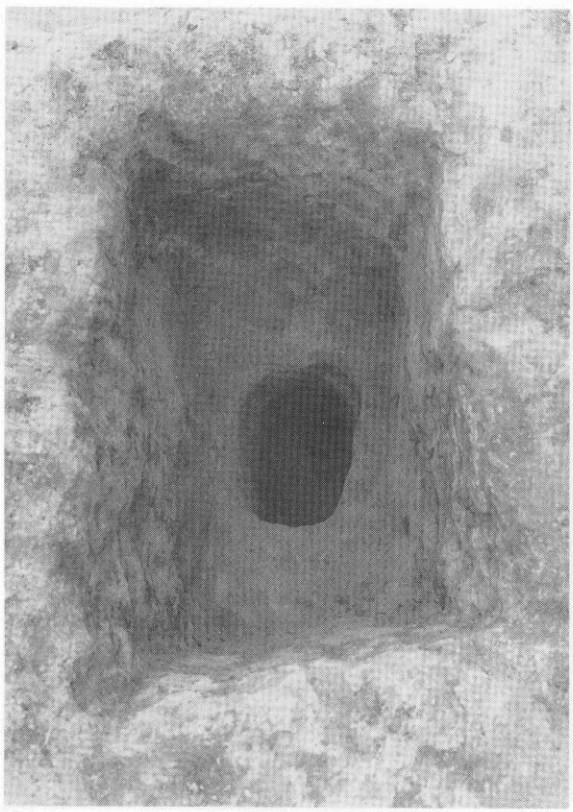
主体部完掘状況（南東から）



主体部粘土槨出土状況（南東から）



土壙完掘状況（西から）



1SK005完掘状況（北から）



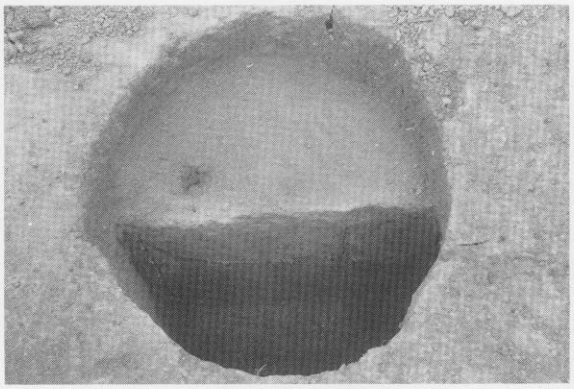
1SK004完掘状況（東から）



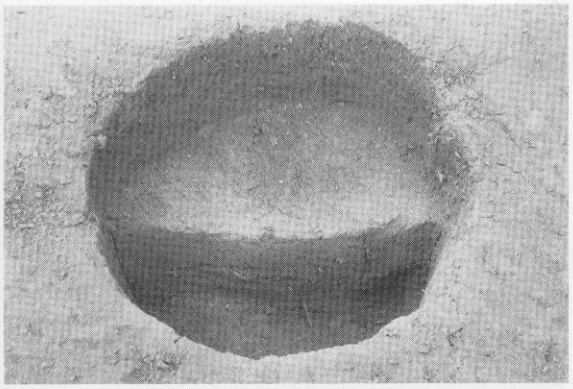
五条遺跡全景



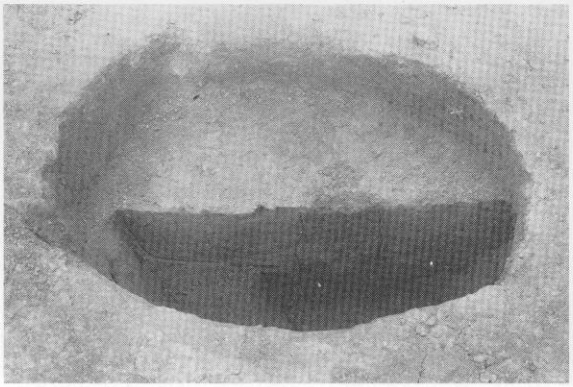
1SB001検出状況



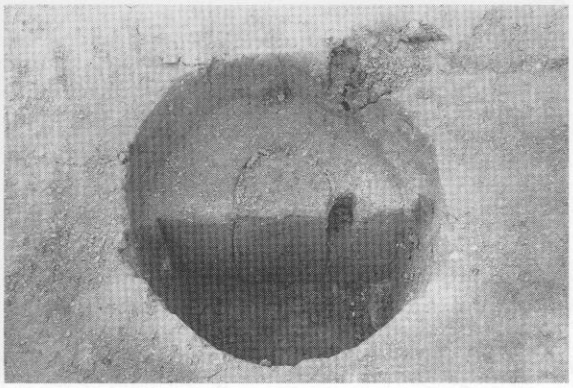
掘　方(a)



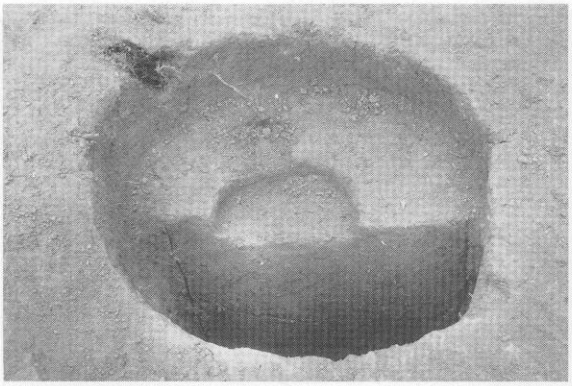
掘　方(e)



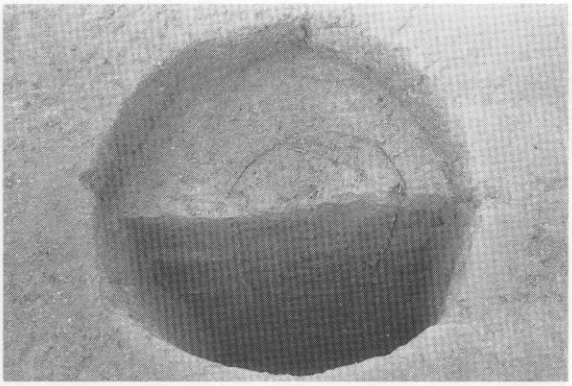
掘　方(b)



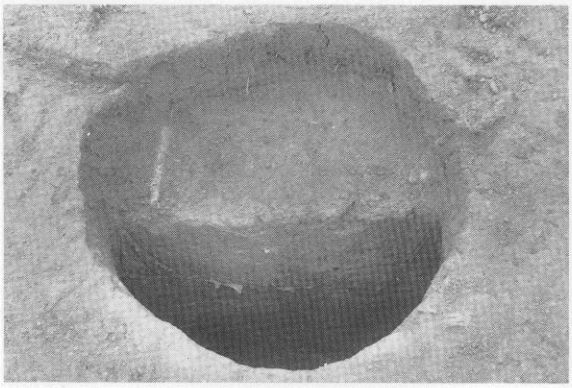
掘　方(f)



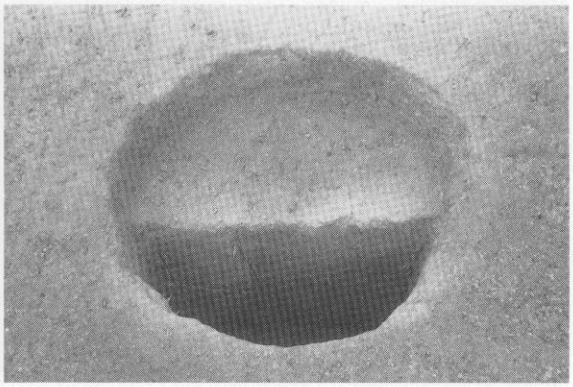
掘　方(c)



掘　方(g)

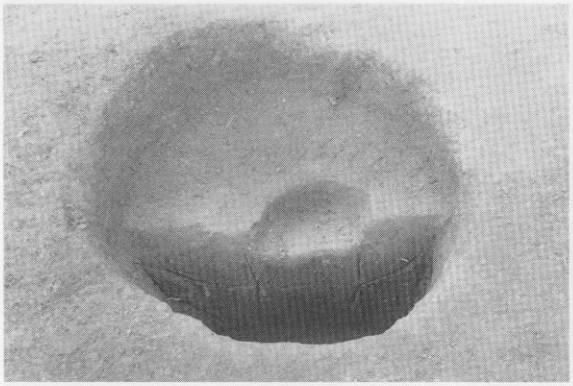


掘　方(d)

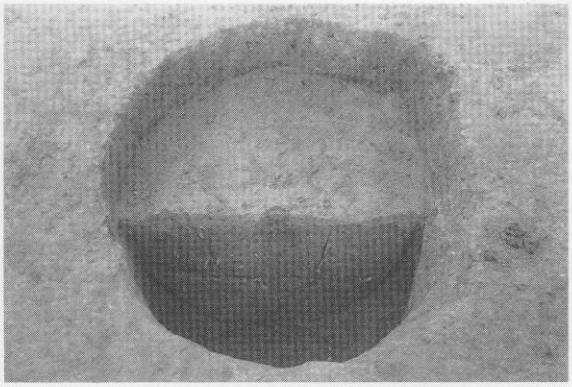


掘　方(h)

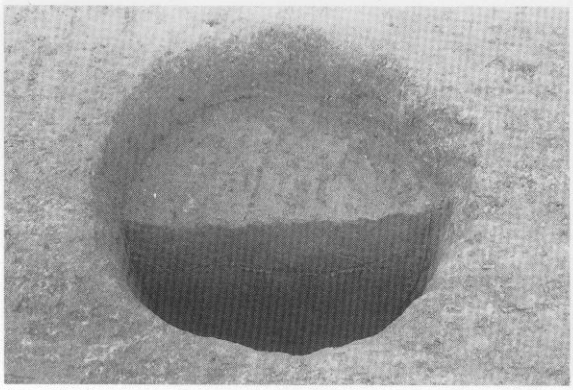
（1 SB001 土層観察）



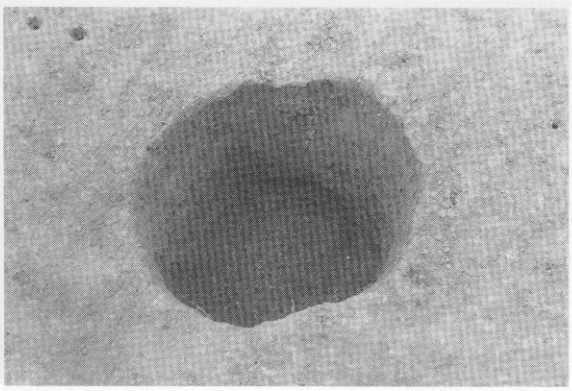
掘　方(i)



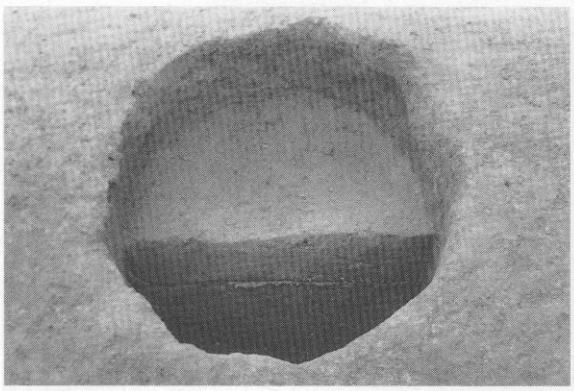
掘　方(l)



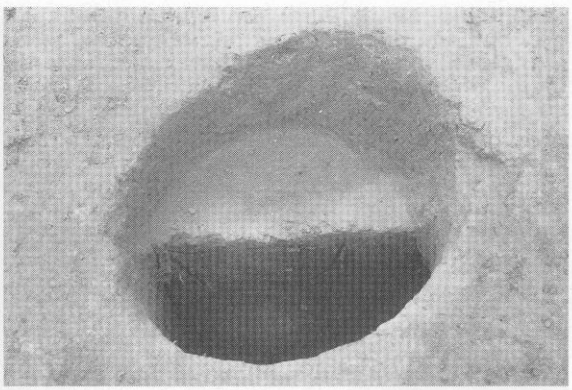
掘　方(j)



掘　方(m)



掘　方(k)



掘　方(n)

（1 SB001 土層観察）

PL22 石 穴 遺 跡



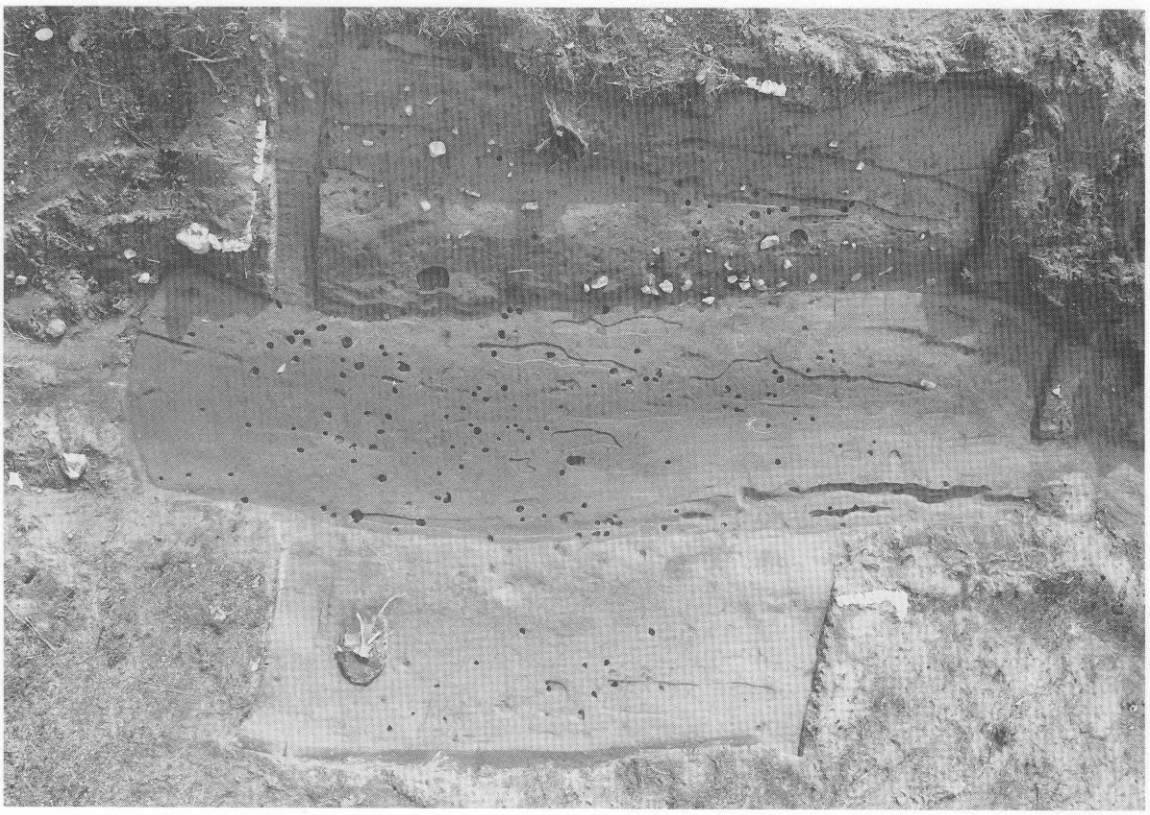
石穴遺跡調査全景



石穴調査A区全景

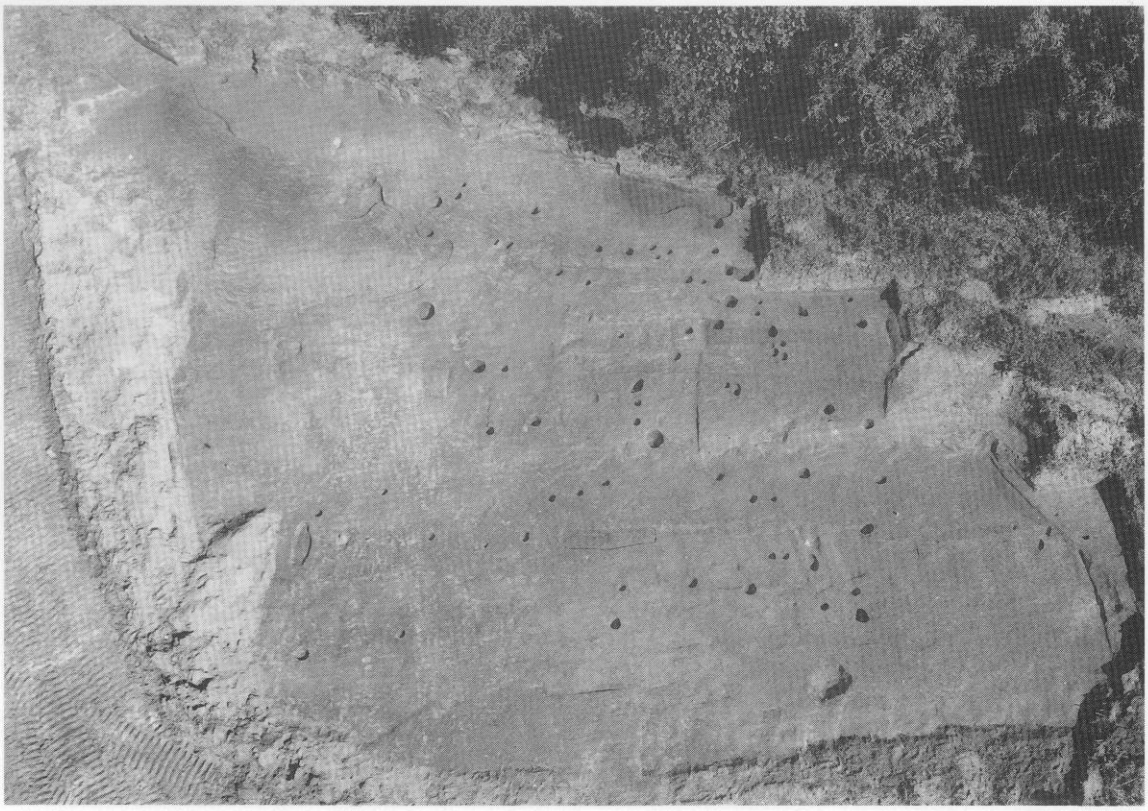


石穴調査B区全景

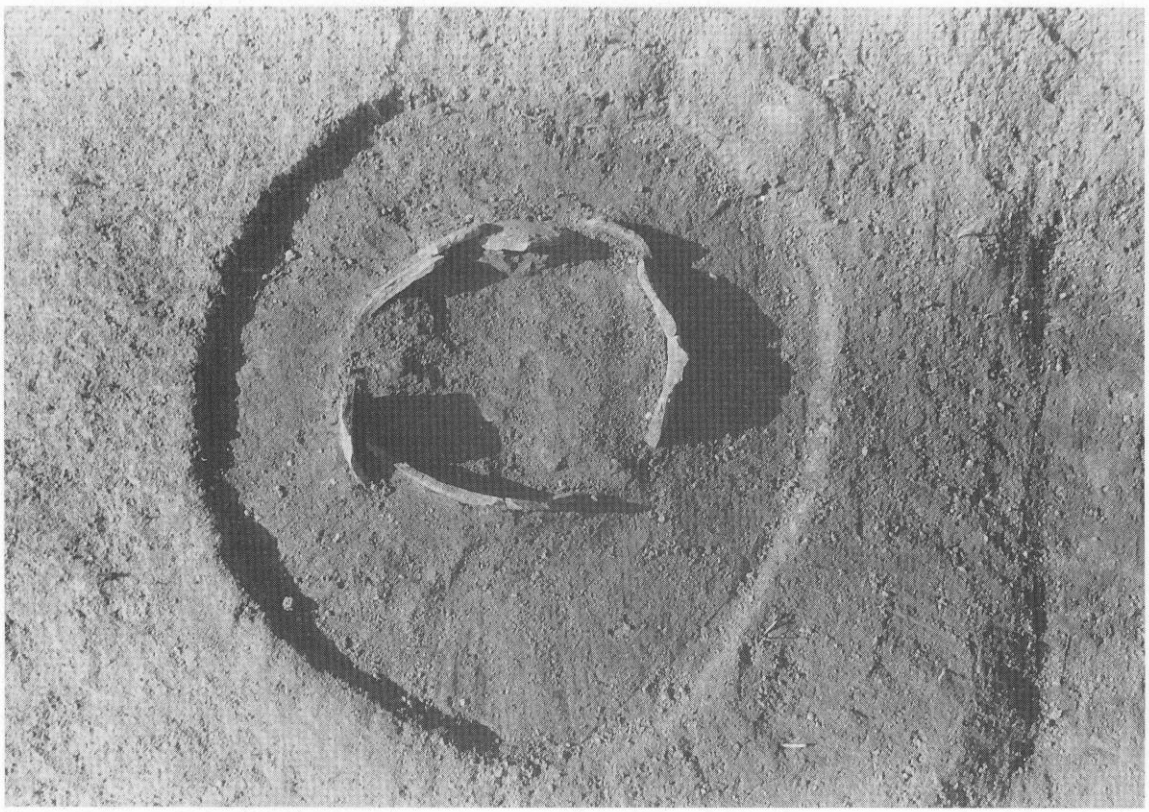


石穴調査C区全景

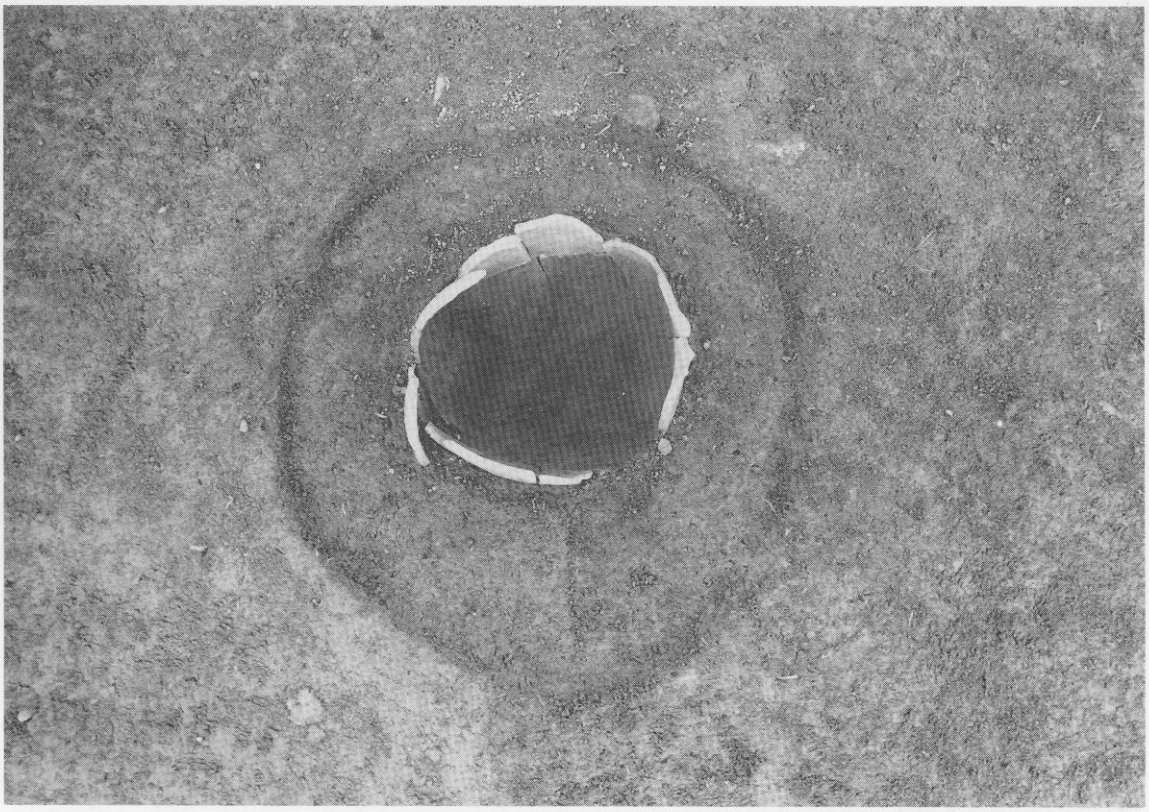
PL24　石　穴　遺　跡



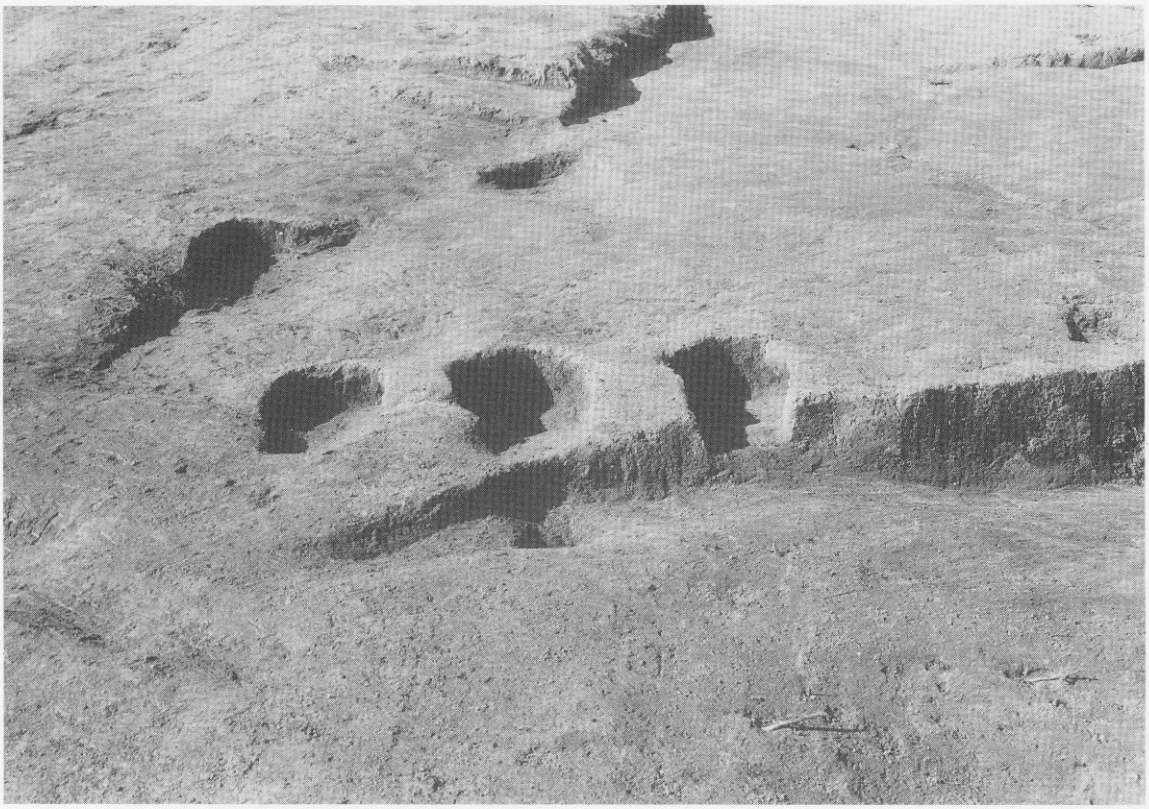
石穴調査D区全景



1ST005　検出状況（南から）



1ST005　火葬骨除去状況（南から）

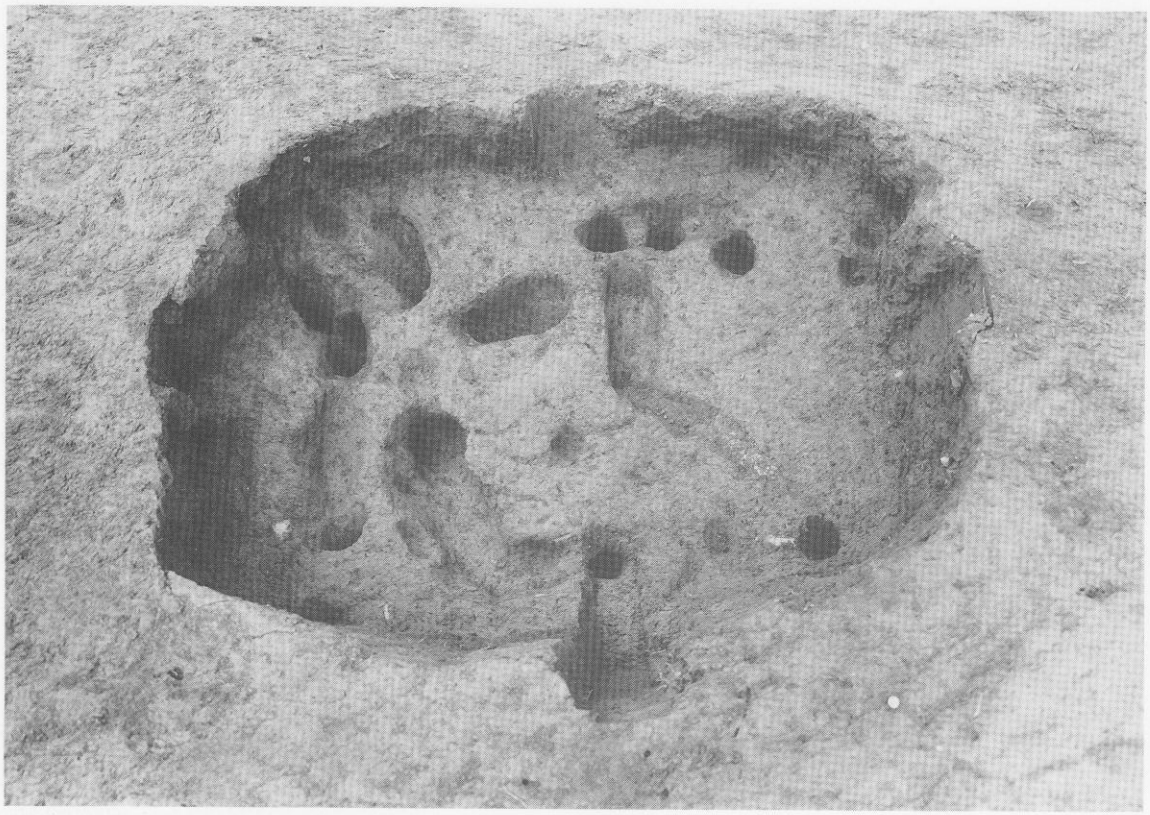


1ST006～008　完掘状況（南から）

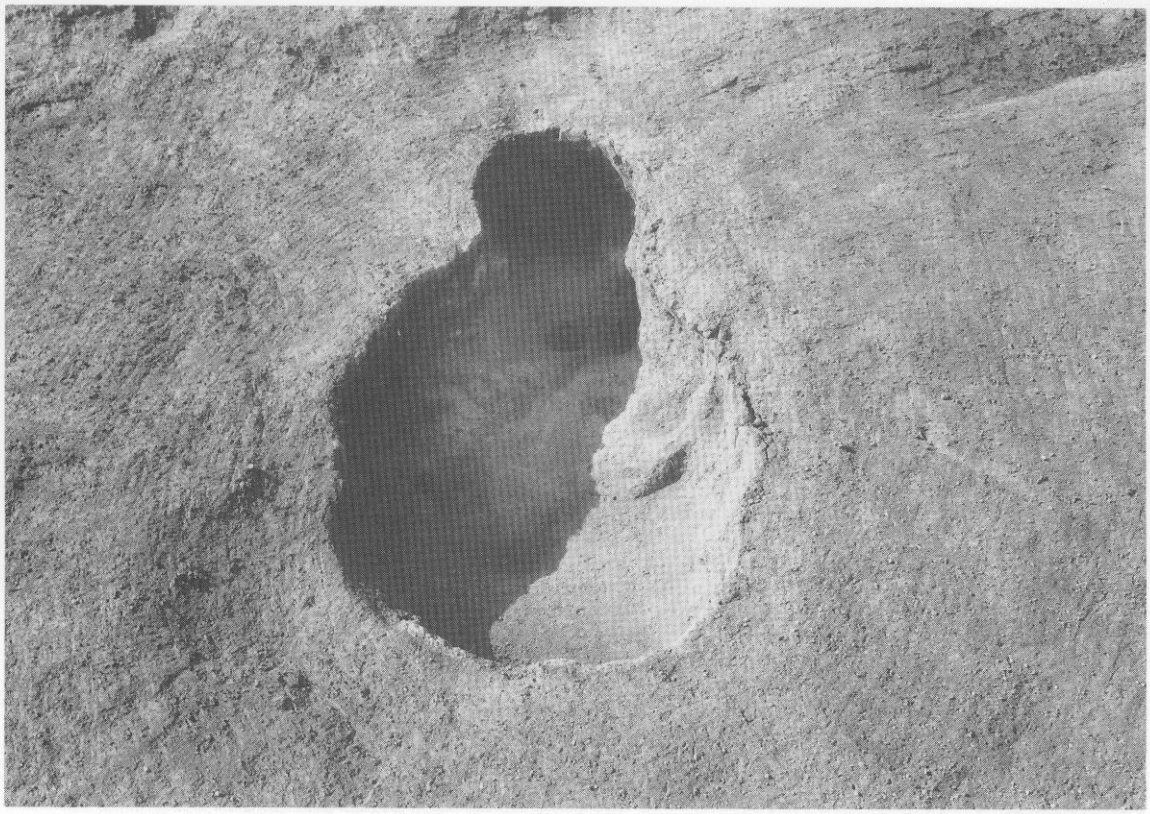
PL26 石 穴 遺 跡



1SX006～008　完掘状況（南から）



1SX018　断 割 状 況

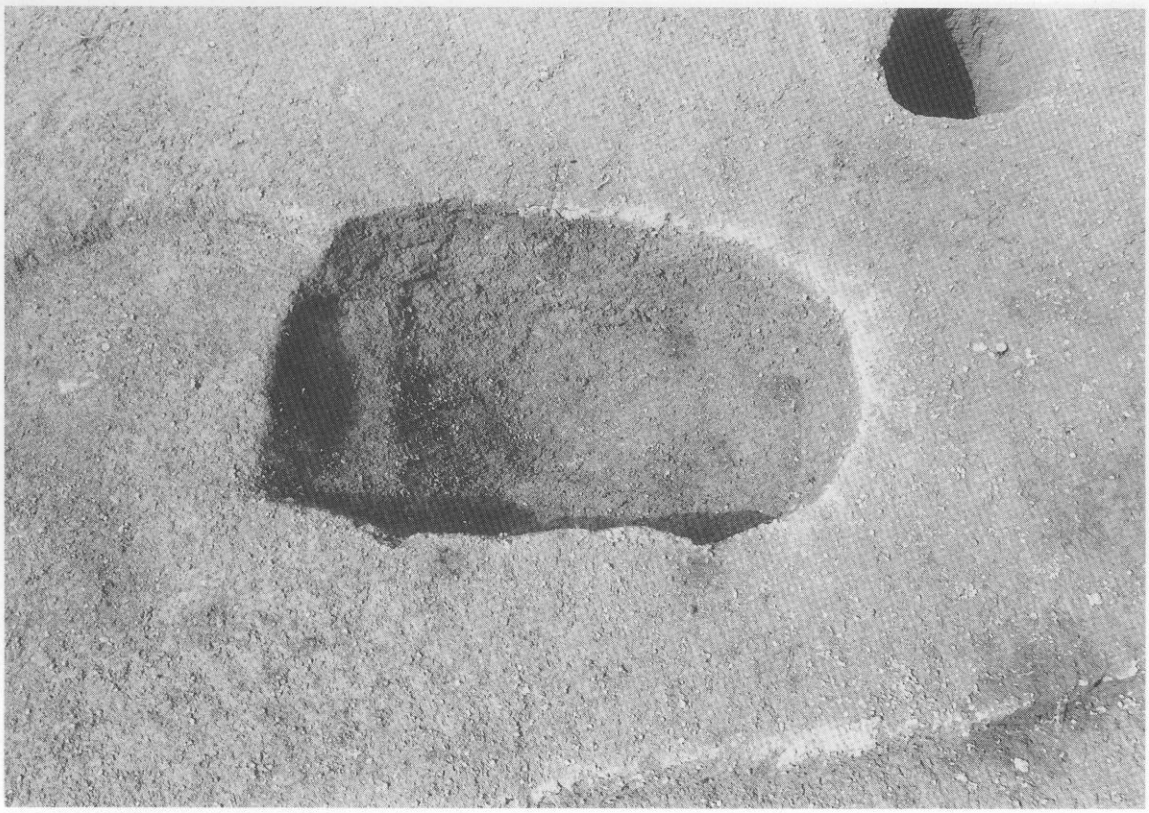


1SX012 完 掘 状 況

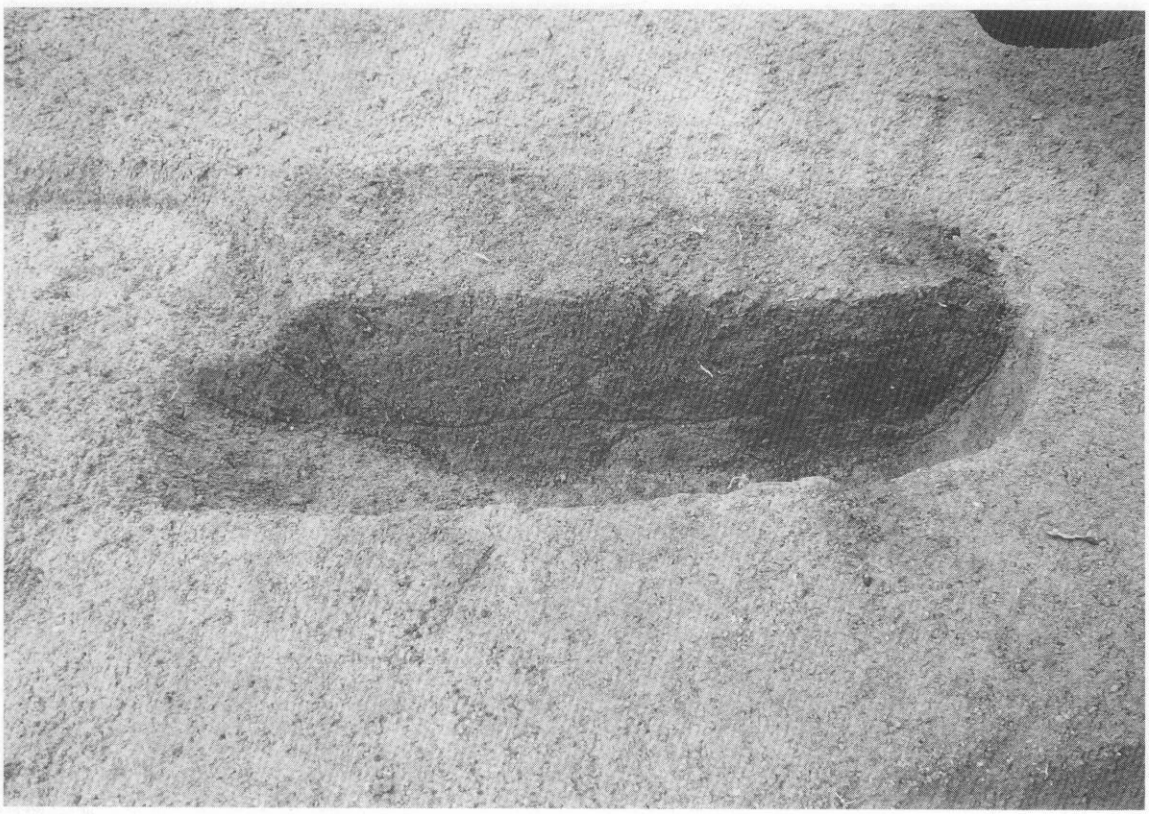


1SX012 土 層 観 察

PL28 石 穴 遺 跡



1SX019 完 掘 状 況



1SX019 土 層 観 察

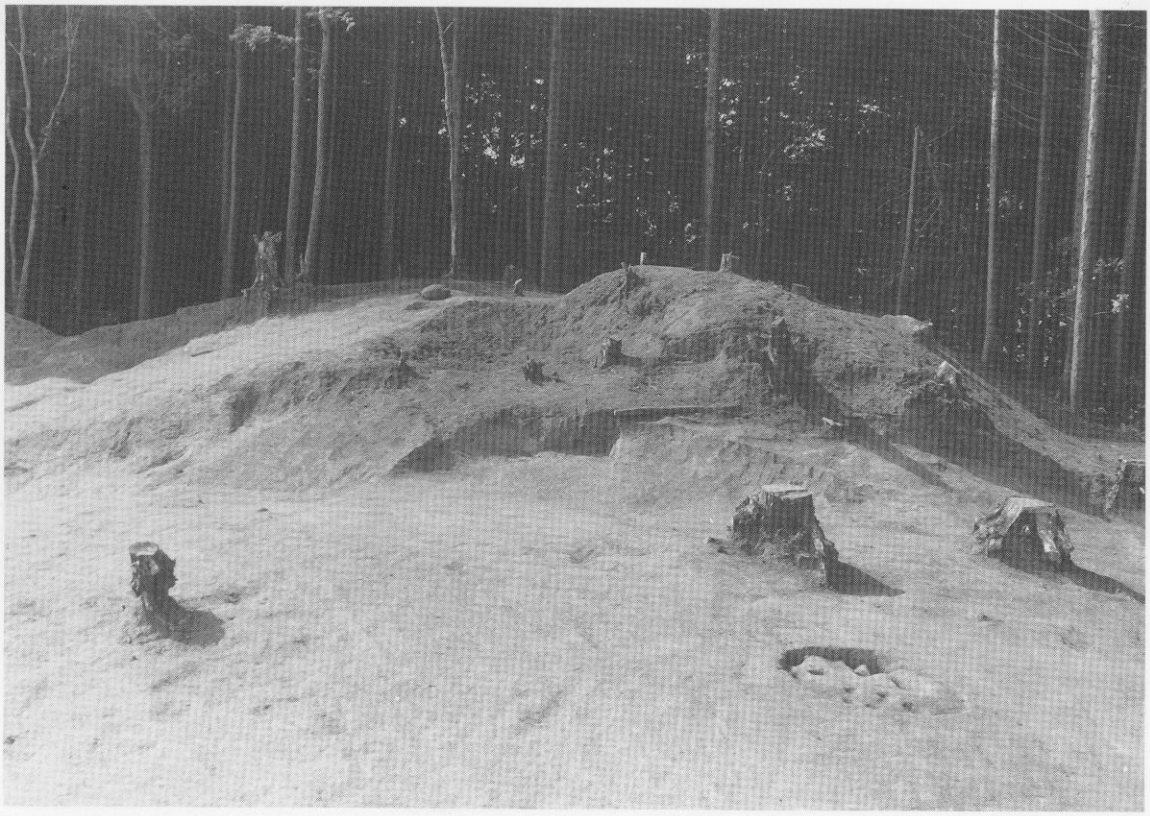


1SX044　完掘状況（南から）



1SD010　土層観察（西から）

PL30　石　穴　遺　跡



1SX015　表土除去状況（東から）



1SX021　検出状況（東から）



1SX015　3層除去状況（東から）

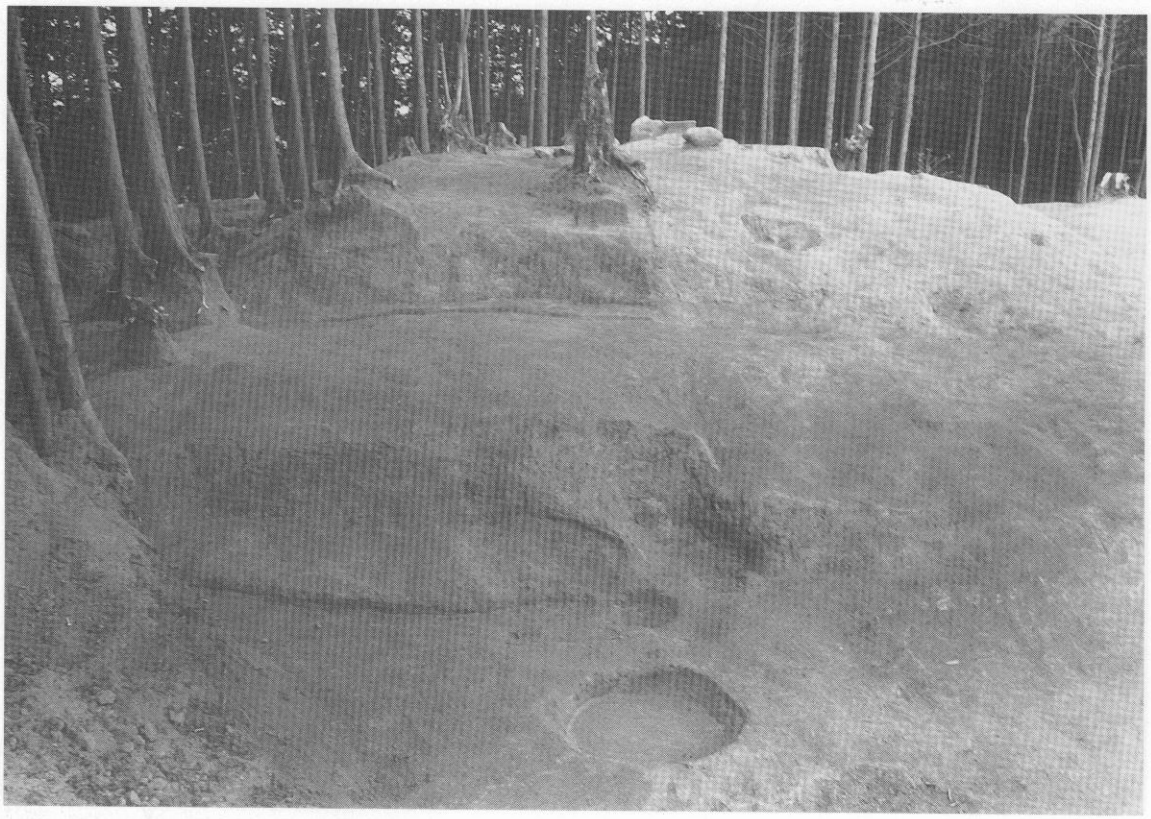


1SX015　完掘状況

PL32 石 穴 遺 跡



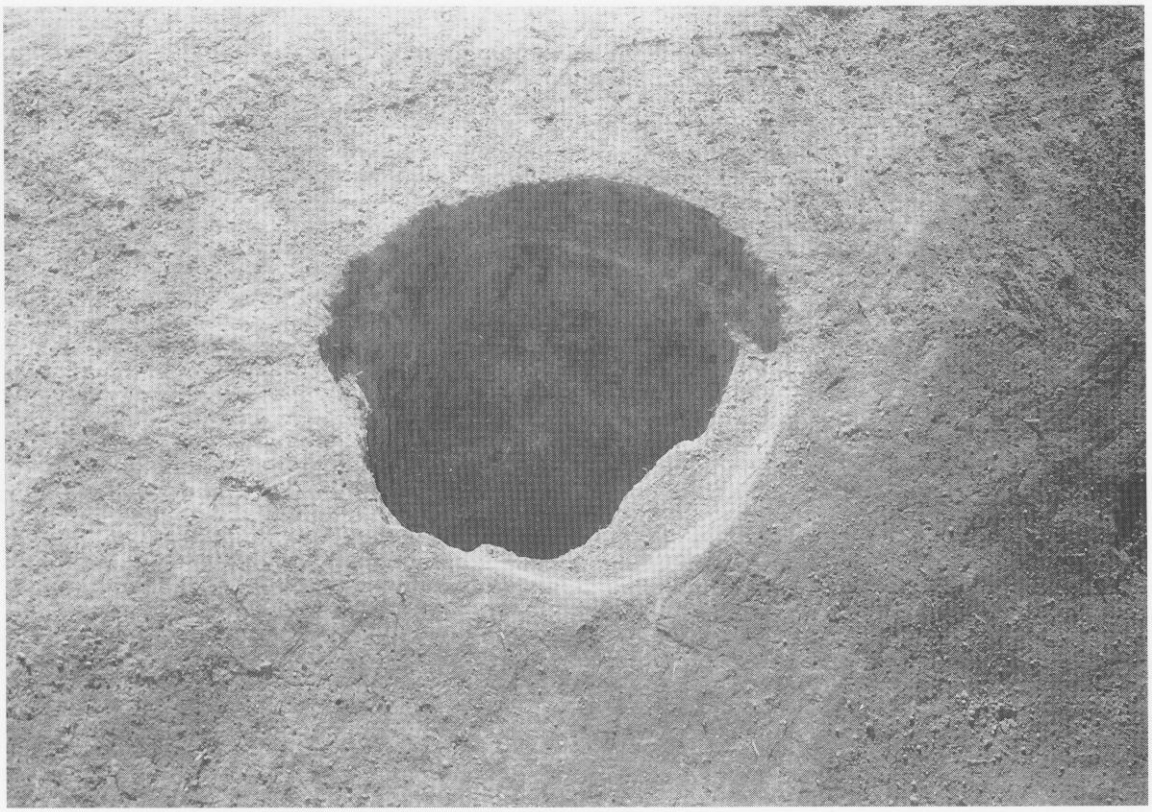
1SX015　完掘状況（南から）



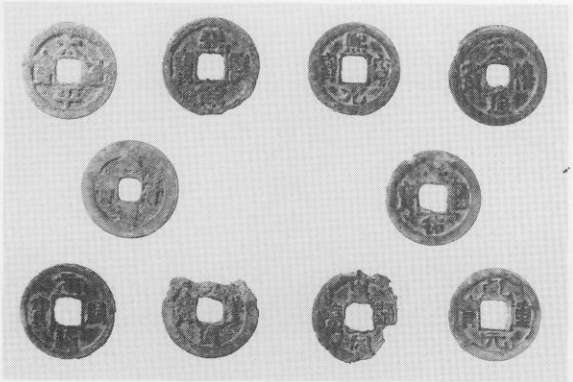
1SX015　南側段部（南から）



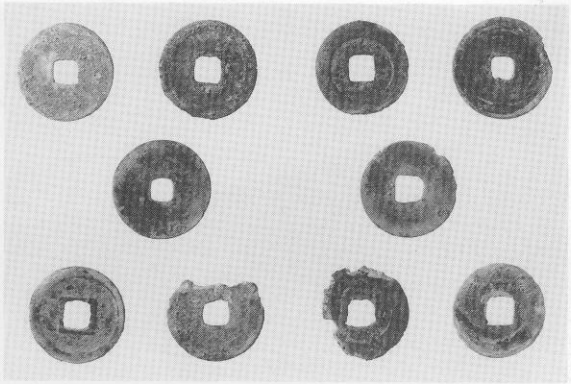
1SX015　南側段部土層観察（西から）



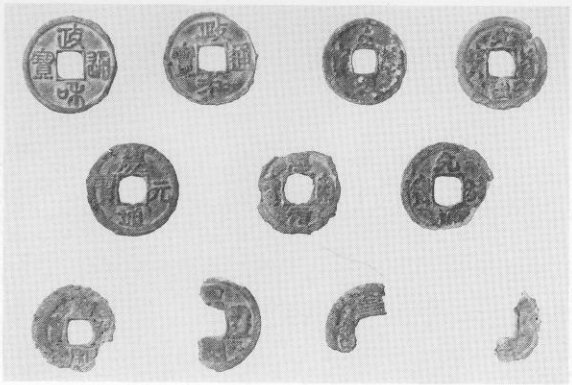
1SX046　完掘状況（北から）



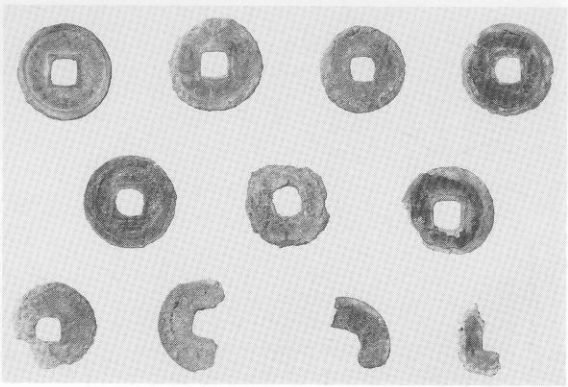
1SX015 出土渡来銭(1)（表）



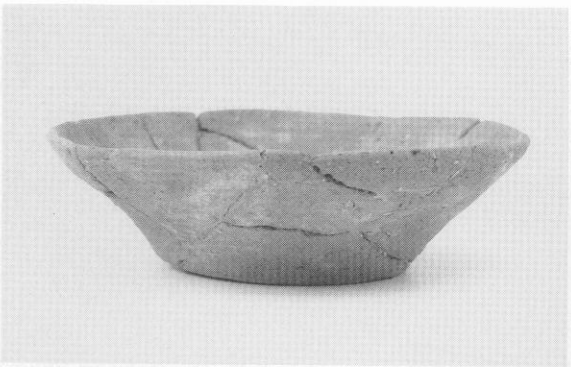
1SX015 出土渡来銭(1)（裏）



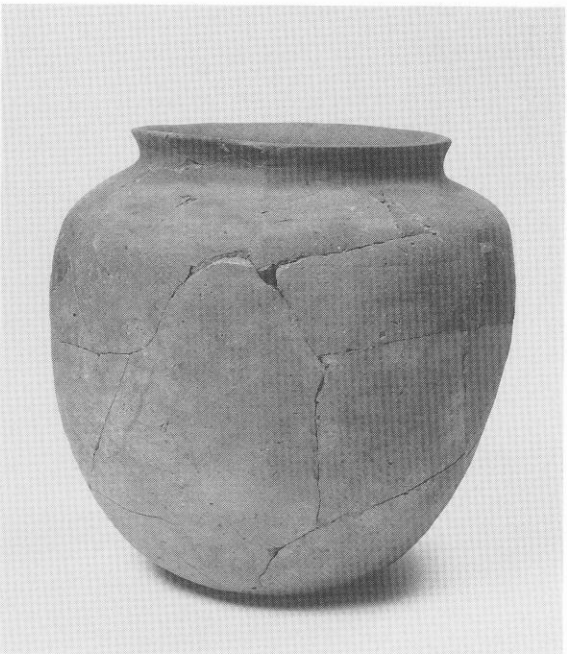
1SX015 出土渡来銭(2)（表）



1SX015 出土渡来銭(2)（裏）



1SX042 出 土 土 師 器



1ST005 出土須恵質土器



1ST044 出 土 土 師 器



調 査 区 遠 景



調査区空中写真

PL36　今　王　遺　跡



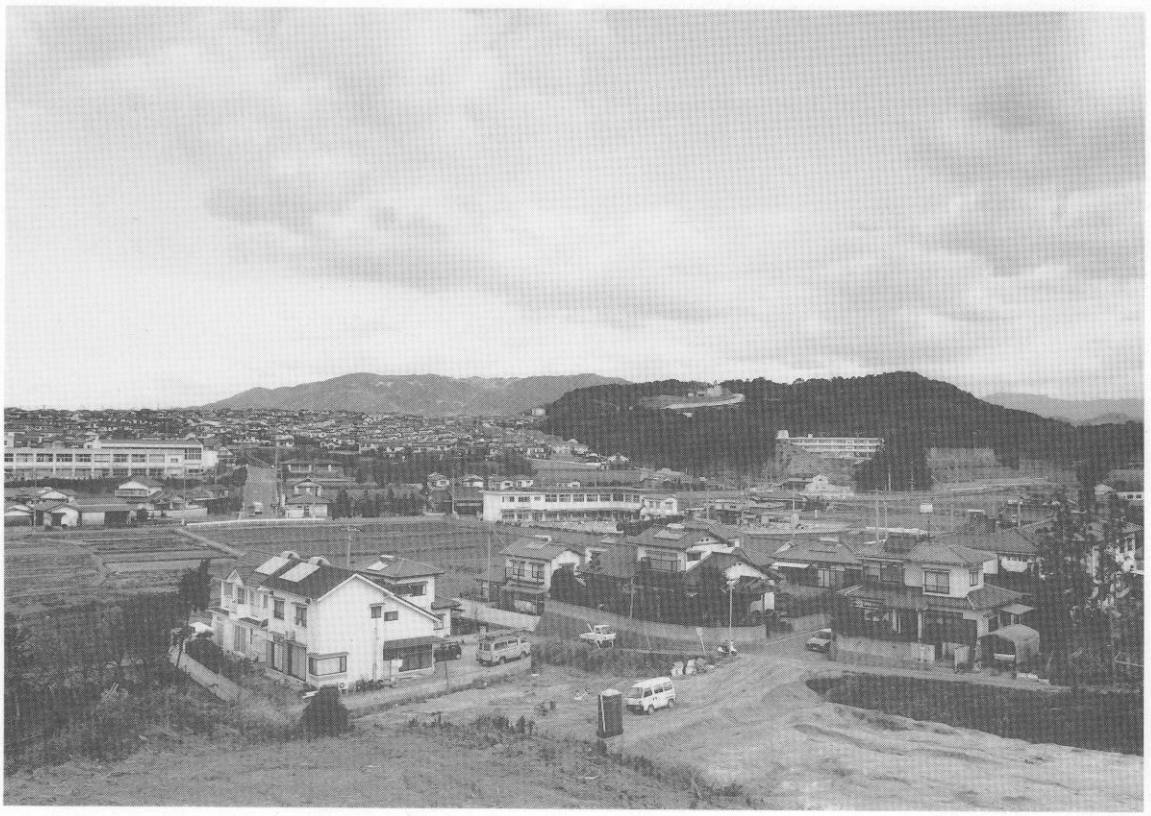
調査区近景（1）



2SK001　完掘（北東から）



2SK002　完掘（北から）



高雄山（石穴遺跡）・四王寺山遠景

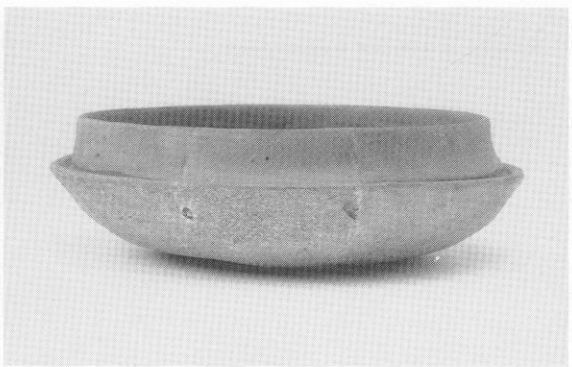
PL38　今　王　遺　跡



調査区から宝満山を望む



出土須恵器（Fig. 34－2）



出土須恵器（Fig. 34－7）

高雄地区遺跡群

—高雄地区所在の埋蔵文化財発掘調査報告書—
—太宰府市の文化財 第22集—

1994・3・31

発　行　太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺1丁目1番1号

印　刷　アオヤギ株式会社
福岡市中央区渡辺通二丁目9-31
電話 092（641）1431